

紀要愛媛

第 17 号

愛媛県内出土の U 字形鋤鍬先 — 製作方法の検討をもとに —	石貫弘泰	1 ~ 24
愛媛県における古代～中世の土器編年 — 今治平野の9世紀から12世紀を中心に —	青木聡志	25 ~ 80
北竹ノ下 I 遺跡出土の龍泉窯青磁筆架	柴田圭子	81 ~ 86

2021

公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター

愛媛県内出土のU字形鋤鋤先 —製作方法の検討をもとに—

石貫弘泰

1 はじめに

U字形鋤鋤先*¹は曲刃鎌とならび、古墳時代中期における「農具の画期」で重要な役割を果たした農具である(都出1967・1989など)。愛媛県内で出土した古墳時代中期中頃から後期にかけてのU字形鋤鋤先は現時点で56点にのぼる*²。このうち24点が今治平野、18点が松山平野で出土しており、7割以上が両平野に集中する。全国的にみても、今治市域と松山市域が鉄製農工具の出土点数の多い地域であることは、鈴木一有氏によって指摘されている(鈴木2016)。さらに、鈴木氏は愛媛県内で古墳時代後期の鉄製農工具が多い理由として、瀬戸内地域のなかでも渡来系遺物が目立つ点などから渡来系集団が集中的に

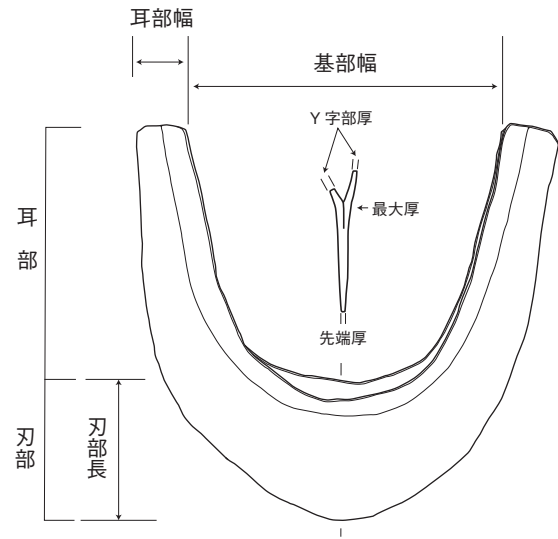


図1 U字形鋤鋤先の部分名称

移住した結果だと評価する(鈴木2016)。渡来系集団が愛媛県内に集中的に移住した痕跡を解明するためには、鉄製農工具が愛媛県内においてどのような様相を示すのかについて検討することも重要である。そのためには、まず鉄製農工具の種類ごとの製作方法や分布域などの検討をおこない、そこから導き出される種類間の製作方法(鍛冶技術)の共通点や相違点、分布域から想定される事象などを検討する必要がある。

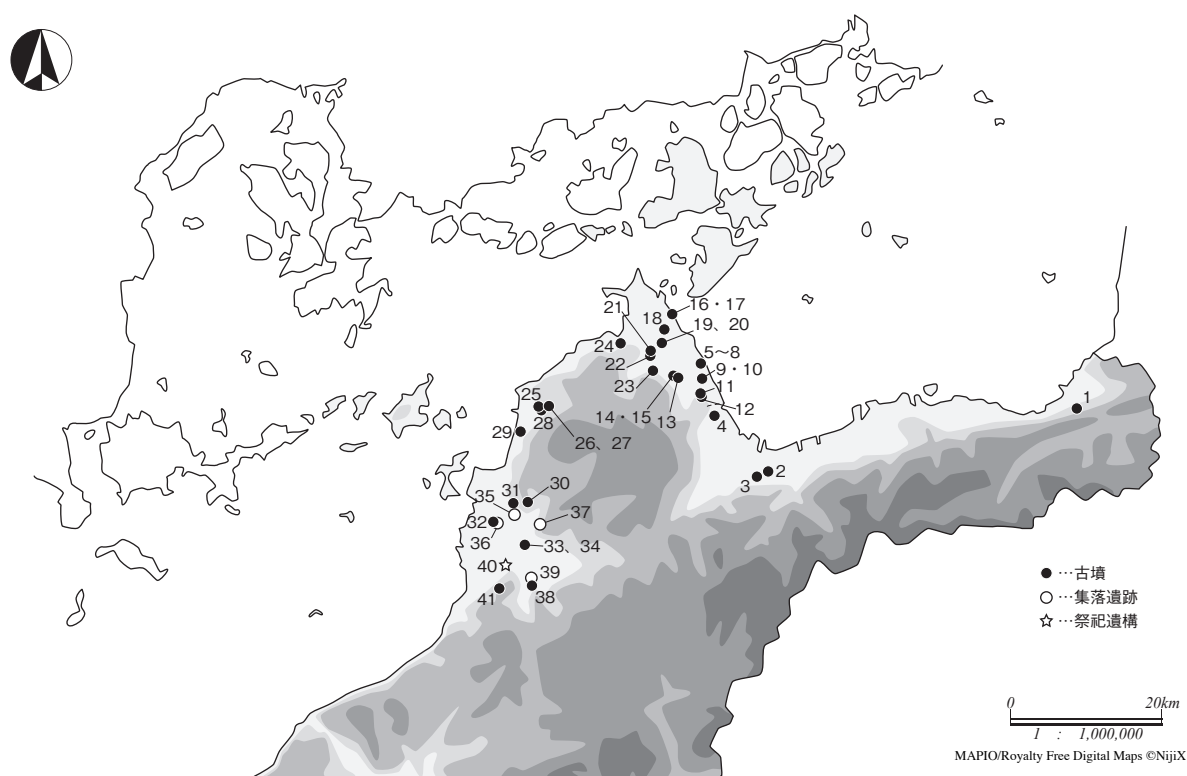
本稿は、その第一歩として、愛媛県内のU字形鋤鋤先の製作方法に基づいた考察を目的とする。U字形鋤鋤先は、都出比呂志氏や松井和幸氏、魚津知克氏らによって主に平面形態に着目した分類がおこなわれているが(都出1967、松井1987、魚津2003など)、U字形鋤鋤先は鍛造によって製作された鉄製品であり、鍛造品には鉄製素材の折り曲げや引き延ばす工程がある。それゆえ、平面形態だけでの分類では限界があり、鉄製素材をどのように鍛打し、整形するかといった製作方法に基づく立体的な分類が必要である。このような分類をおこなうことで、U字形鋤鋤先の研究はさらに進展するはずである。

部分名称は図1に示し、愛媛県内出土資料と観察をおこなった資料は表1にまとめた*³。また、遺物番号については、基本的に表1の番号にしたがっている。なお、図6・図7・図11～図14のキャプション内で「(○)」と付けた番号が表1の番号に対応する。

2 研究史とその課題

(1) 研究史

分類にかんする研究 都出氏はU字形鍬鋤先を3種に分類した(都出1967)。A類はU字形の刃先部の幅が耳部の幅とほぼ等しいもの、B類は刃先部が耳部に比べて長いもの、C類は刃先部が、直線的になり、U字形というよりは凹字形というべきものとした。土井義夫氏はU字形鍬鋤先を形態的な特徴から2種に分類した。A類は刃部が直線状ないしそれに近い緩やかな曲線を呈するもので、刃部の幅が耳部先端の幅に比べやや大きいとした。B類は刃部が大きく曲線を描き、刃部に向かって身幅が狭くなり、全体的に丸みを帯びた刃部を有するものとした。厳密にはA類は凹字形で、B類がU字形であるにつけくわえた(土井1971)。松井氏は土井氏の2分類のb類をA類、a類をB類とした。そして、A類を3種に細分し、A1類を刃先部がやや長く、先端部が直線気味のもの、A2類は本来のU字形を呈し、刃先部の幅が耳部の幅とあまり変わらないもの、A3類は刃先部がU字形であるが、その長さが長く出ているものとした(松井1987)。魚津氏は平面形態の違いから、U字形のものをA類、凹字形のものをB類の2種に分類した。そして、A類はA1類・A2類・A3類に、B類はB1類・B2類・B3類に細分した。さらに、A2類とA3類をそれぞれa類、b類、c類に、B2をa類とb類に細分した(魚津2003)。



1. 端華の森1号墳、2. 祭ヶ岡古墳、3. 格蔵山古墳、4. 世田山4号墳、5. 治平谷1号墳、6. 治平谷2号墳、7. 治平谷3号墳、8. 唐子台No.80、9. 旦13号墳、10. 法華寺裏山古墳、11. 鳥越1号墳、12. 野々瀬6号墳、13. 牛神古墳、14. 新谷石ヶ谷5号墳、15. ツノ谷古墳、16. 相の谷7号墳、17. 相の谷8号墳、18. 高地栗谷1号墳、19. 片山4号墳、20. 片山7号墳、21. 矢田長尾1号墳、22. 高橋岡寺1号墳、23. 亀ヶ森古墳、24. 奥之内1号墳、25. 上難波南0号墳、26. 小田山4号墳、27. 小田山7号墳、28. 庄の谷古墳、29. 片山1号墳、30. 瀬戸風峠1号墳、31. 景浦谷1号墳、32. 大池東3号墳、33. 東山18号墳、34. 東山麓が森3号墳、35. 松山大学構内遺跡、36. 大峰ヶ台遺跡、37. 東野お茶屋台遺跡、38. 大下田2号墳、39. 麻生小学校南遺跡、40. 出作遺跡、41. 上三谷原古墳

図2 愛媛県内のU字形鍬鋤先の分布

表1 愛媛県内出土のU字形鍬鋤先

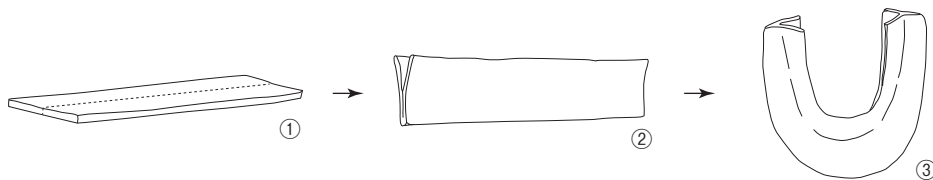
番号	古墳名	類型	全長	耳部長	刃部長	耳部幅	刃部長 / 耳部幅	耳部厚				刃部厚			
								最大厚	Y字部厚		先端厚	最大厚	Y字部厚		先端厚
									a	b			a	b	
1	端華の森1号墳	I類	[80.40]	[48.5]	35.50	[31.00]	—	[400]	[200]	[200]	100	400	250	200	100
2	祭ヶ岡古墳	Ⅲ類	145.00	95.00	50.00	13.00	380	400	200	200	100	300	300	200	200
3	世田山4号墳	ⅡorⅢ類	—	[7.55]	—	14.50	—	430	250	200	300	—	—	—	—
4	治平谷1号墳第1主体	Ⅲ類	166.00	98.50	67.50	26.00	260	550	300	250	500	378	182	178	200
5	治平谷2号墳第2主体	I類	152.50	117.50	[35.00]	29.00	120	450	250	250	200	450	250	250	300
6	治平谷2号墳第2主体	ⅡorⅢ類	—	[39.60]	—	[25.00]	—	[400]	[250]	[200]	100	—	—	—	—
7	治平谷3号墳第1主体														
8	唐子台No80														
9	旦13号墳	I類	143.50	116.50	[27.00]	31.00	0.87	400	200	200	200	300	200	500	200
10	法華寺裏山古墳	Ⅱ類	127.50	93.00	34.50	23.50	1.47	500	350	300	400	550	300	200	300
11	鳥越1号墳	Ⅱ類	147.00	97.00	50.00	29.50	1.70	300	200	300	150	700	350	350	200
12	野々瀬6号墳														
13	牛神古墳														
14	石ヶ谷5号墳	ⅡorⅢ類	[97.50]	—	—	[33.00]	—	[400]	[200]	—	100	—	—	—	—
15	ツノ谷古墳	Ⅱ類	169.00	114.00	55.00	[27.00]	200	500	200	200	100	650	250	250	100
16	相の谷7号墳														
17	相の谷7号墳														
18	相の谷8号墳	I類	125.00	99.20	25.80	25.40	1.02	770	400	350	350	550	350	250	250
19	高地栗谷1号墳	Ⅱ類	164.00	118.20	45.80	28.80	1.60	480	240	230	300	700	300	300	200
20	片山4号墳	Ⅱ類	165.50	119.50	46.00	26.00	1.77	600	300	300	300	400	200	200	300
21	片山4号墳	Ⅱ類	139.50	93.00	46.50	25.50	1.80	600	400	300	400	450	400	350	200
22	片山4号墳	Ⅲ類	—	[118.00]	—	25.00	—	650	350	300	200	—	—	—	—
23	片山7号墳	I類	166.80	—	—	27.00	—	650	350	300	250	[600]	[300]	[300]	—
24	矢田長尾1号墳	ⅡorⅢ類	—	[54.80]	—	28.50	—	600	300	300	300	—	—	—	—
25	高橋岡寺1号墳		—	73.00	—	28.50	—	—	300	—	300	—	—	—	—
26	亀ヶ森古墳														
27	亀ヶ森古墳														
28	奥之内1号墳														
29	奥之内1号墳														
30	上難波南0号墳	Ⅱ類													
31	上難波南0号墳	I類													
32	上難波南0号墳	I類													
33	小田山4号墳	I類													
34	小田山7号墳	I類													
35	庄の谷古墳	I類	133.50	99.50	34.00	23.00	1.48	600	350	300	400	850	450	350	550
36	庄の谷古墳?	I類	116.50	90.50	26.00	23.00	1.13	450	200	300	200	600	300	300	300
37	片山1号墳	I類	—	[75.50]	30.50	28.00	1.10	[500]	[250]	[300]	300	500	300	300	300
38	瀬戸風峠1号墳	Ⅱ類	171.50	115.70	55.80	30.00	1.86	500	300	260	450	620	300	300	250
39	瀬戸風峠1号墳	Ⅲ類	[233.00]	[144.50]	88.50	28.60	3.10	520	380	270	300	870	230	360	270
40	瀬戸風峠1号墳	I類	124.00	97.00	27.00	18.80	1.44	600	350	250	380	550	310	250	200
41	景浦谷1号墳	ⅡorⅢ類	—	[73.80]	—	[38.50]	—	[800]	[450]	[350]	500	—	—	—	—
42	大池東3号墳	I類	131.00	127.52	34.80	23.00	1.50	414	224	196	190	400	216	182	250
43	東山18号墳	Ⅲ類	133.00	92.00	41.00	20.00	2.10	400	200	200	400	600	200	200	300
44	東山鷹が森3号墳	Ⅱ類	[119.00]	[78.00]	[41.00]	[25.00]	1.64	[500]	[300]	[200]	250	580	450	330	500
45	松山大学構内遺跡	Ⅲ類	198.60	138.60	60.00	16.50	3.64	410	340	200	380	600	220	200	320
46	大峰ヶ台遺跡	ⅡorⅢ類	—	[83.50]	—	22.50	—	325	142	128	276	—	—	—	—
47	東野お茶屋台遺跡		—	—	[44.00]	—	—	—	—	—	—	450	250	250	400
48	大下田2号墳														
49	麻生小学校南遺跡														
50	出作遺跡	Ⅱ類	—	[82.20]	—	21.00	—	400	250	250	200	—	—	—	—
51	出作遺跡	ⅡorⅢ類	[78.50]	—	—	26.50	—	550	300	250	400	—	—	—	—
52	出作遺跡	I類	—	[140.00]	—	42.00	—	800	450	400	450	—	—	—	—
53	出作遺跡														
54	出作遺跡														
55	上三谷原古墳	Ⅲ類	157.40	101.40	56.00	23.40	2.39	500	250	200	200	500	300	200	150
※	格蔵山古墳		345.00	186.50	158.50	22.40	7.10	700	400	320	350	—	—	—	—

◎空欄は未実見の資料

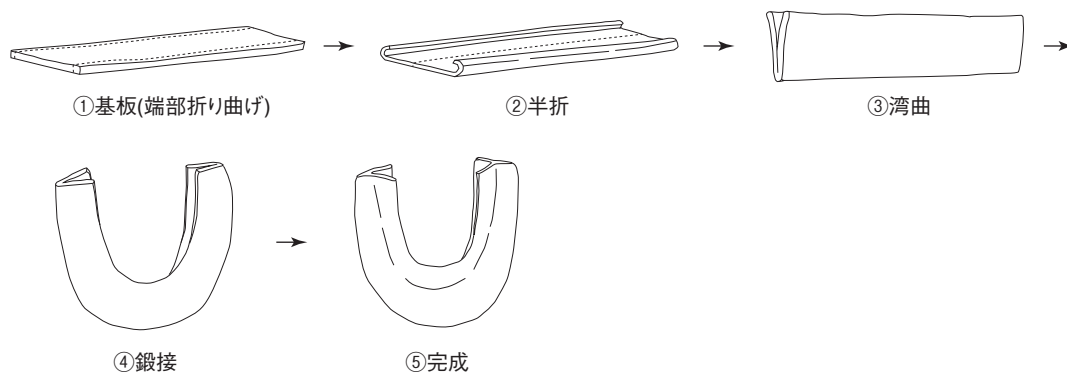
以上、各氏の分類は主に平面形態の違いによる点が共通する。なかでも、魚津氏は平面形態の特徴から精緻な分類をおこなっている。

製作方法にかんする研究 白木原和美氏は、U字形鋤鋤先の製作方法について、長方形の鉄板の長辺を半分に折り曲げ、U字形に整形して製作される(図3_A-1)と考えた(白木原1960)。松本正信氏は、白木原氏の提示したU字形鋤鋤先の製作方法に対し、鉄板の長辺側を二つに折りたたんで、折り目のところを刃先にする、折り目部分が非常に薄くなり、脆弱になると指摘した。松本氏は、近世のU字形鋤鋤先の製作方法に着目し、古墳時代のU字形鋤鋤先の製作方法も近世と同様の方法で製作されたとし、近世のU字形鋤鋤先は古墳時代からの伝統的な製作方法であると結論付けた(松本1969)。松本氏が紹介した、近世のU字形鋤鋤先の製作方法は、①：素材の鉄板から5mm～7mm程度の厚さの凸字形の鉄板を作る。②：①の鉄板を加熱し、鑿で鉄板上面に深

A-1 白木原案(白木原1960)



A-2 中村案(中村1995)



B 古瀬案(古瀬2002)

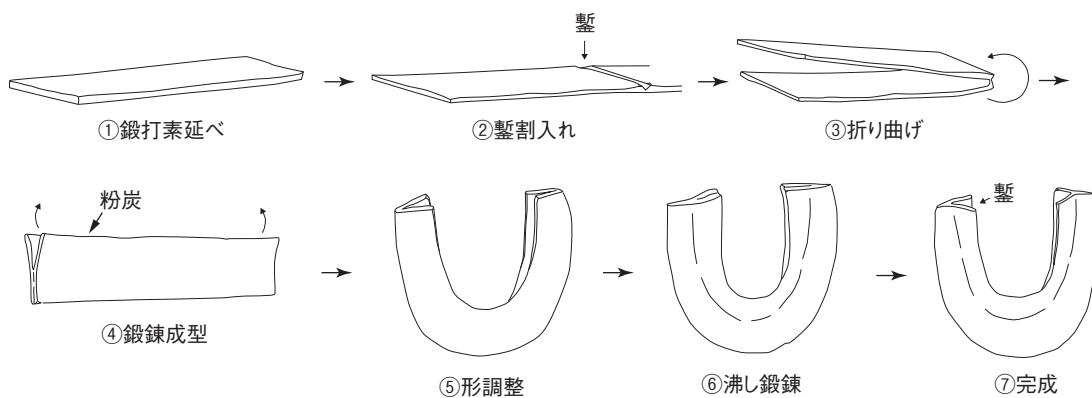


図3 U字形鋤鋤先の製作技法
(白木原案と中村案は改変して使用、古瀬案は一部改変再トレースして使用)

さ1cm程度の溝を掘る。③：全体を再加熱し、鍬鋤先の形にする。④：加熱後、③で塞がってしまった②の溝を再度鑿で掘りなおす。⑤：仕上げといった方法である。松井和幸氏は、松本氏が想定する製作方法は近世においても困難を伴う作業であったことから、古墳時代ではなおのこと困難であるとした。そこで、松井氏はU字形に整形した鉄板を2枚重ねて鍛接し、内面に残る重ね合わせの筋に沿って鑿でV字形の溝を掘っていくという製作方法を想定した(松井1987)。しかし、その後、松井氏は後述する古瀬清秀氏の見解をうけ、古瀬案(図3)をU字形鍬鋤先の製作方法として採用している(松井2001)。古瀬氏は松井氏の想定したU字形の鉄板2枚を鍛接して製作する方法について、古墳時代の鍛接方法は「沸かし付け」技法でおこなうため、U字形の鉄板を2枚、半熔融状態で鍛打する間、溝がくっつかないようにすることは困難であることから、V字に開く部分に粉炭を塗布することで溝部のくっつきを防ぐのではないかと推測した(古瀬1991)。その後、古瀬氏はU字形鍬鋤先の製作実験をおこない、2枚の鉄板を「沸かし付け」技法で鍛接すると、完全に鍛接され、うまくV字形に開かないことを確認した。さらに、古瀬氏は、図3の古瀬案で自身がU字鍬鋤先を製作しえたことから、U字形鍬鋤先製作の案として、その方法を提示した。ただし、古瀬案も完全な製作方法とはいえないとし、列島内出土のU字形鍬鋤先の詳細な観察や朝鮮半島での製作方法がどのようなものかを検討する必要があるとしている(古瀬1999・2002)。村上恭通氏は、麻生小学校南遺跡第2号堅穴住居址出土のU字形鍬鋤先は「V字形の中心から刃先部にかけて大きな割れ目」がみられることから、松井氏が想定した製作方法を支持した(村上1993)。中村光司氏はU字形鍬鋤先の製作方法で一番の問題は装着部の溝の作り方であるとし、松井氏と古瀬氏の議論の焦点は、U字鍬鋤先は2枚のU字形の鉄板を鍛接して製作するのか、それとも1枚の鉄板から製作するのかという点に帰着するとした。そこで、中村氏は三重県内出土のU字形鍬鋤先9例の断面形状の観察をおこない、断面が「U」字にちかい形状をしている事例が多く、白木原氏が想定した製作方法によってU字形鍬鋤先は製作されている(図2)と結論づけた(中村1995)。河野正訓氏は各氏が提示した製作方法を整理し、それらの妥当性を検討した。河野氏は、現在、U字形鍬鋤先の製作方法は古瀬氏が提示した案に落ち着きつつあるとしながらも、古瀬氏復元案が製作実験に依拠している点が問題であるとし、考古資料の観察をおこなうことで古瀬案の妥当性を検証しなければならないと述べる⁴。くわえて、U字形鍬鋤先は古瀬案のとおり製作されたとしつつも、長方形の鉄板の折り曲げ方法については、長辺を折り曲げる事例が多いとした。その理由として、短辺を折り曲げると刃縁に沿って筋が残り、長辺を折り曲げるよりも強度が弱くなるという点をあげた(河野2014)。

以上、製作方法にかんする研究史をまとめたが、各氏の見解は長方形の鉄板を折り曲げて、U字形に曲げていくという点で共通する。ただし、短軸側を折り曲げるのか、長軸側を折り曲げるのかについての決着はついていない。また、魚津氏らがおこなった分類と古瀬氏らがおこなった製作方法とのすり合わせはなされていない。

編年にかんする研究 松井氏や魚津氏によって編年が試みられているが、たとえば魚津氏の精緻な分類が時間差として並ぶわけではない。北部九州では中期初頭から前葉にかけてA類とB類が併存し、中期中葉から後葉にはA類のみになる。北部九州以外の西日本では中期中葉から

後葉にかけてA類が出現する。東日本では中期中葉から後葉にかけてA類とB類が出現する(魚津2003)。

分類は大まかな時期差としてもとらえうるが、詳細な類型をそのまま編年の指標にできるわけではない。類型差は用途・機能の差の可能性も考えられる。

(2) 研究史の課題と本稿の目的

今までのU字形鋤鋤先の研究では製作方法に基づいた形態分類はほとんどおこなわれてこなかった。平面形態は鍛打することで形造られることを前提にすると、その形態ごとに製作方法を検討しなければ、U字形鋤鋤先の実態はみえてこないといっても過言ではない。U字形鋤鋤先は鍛造品であり、素材を鍛延しながら整形することで完成品を造る。つまり、U字形鋤鋤先の形態差は、素材となる鉄塊の量、鍛打の工程の違いに直結すると考えられる。古瀬氏が提示した製作方法をもとにすると、まずは塊状の鉄素材が必要で、それをひたすら鍛打して延ばす作業(鍛延)によって、長方形の板を製作する。それを二つ折りにし、U字形に曲げて完成させる。これらの製作工程のなかで、特に重要だと考えられるポイントは2点ある。1点目は、素材を鍛延することである。鍛延し、素材を長方形に延ばす作業である。2点目は、二つ折りにした素材をU字形に曲げる作業である。この2点で想定されるU字形鋤鋤先の平面形態がほぼ決定される。また、鍛造品の性格上、幅が短いものは厚みをもっていないと、幅を広くすることはできず、幅広にしたものを、再度幅を狭くすることは鑿で切断する以外には難しい。そう考えると、都出氏の耳部幅と刃部長の違いによる分類(都出1967)は、U字形鋤鋤先の製作工程にとっても本質を突いた分類といえる。そもそも、都出氏のA類とB類では製作方法(工程)が異なっているのではないだろうか。

したがって、本稿では、まずU字形鋤鋤先の形態の違いを把握する。つづいて、形態差から導き出される製作方法の違いをもとに分類を試みる。そして、分類した形態に時期差または空間差の有無があるのかどうかを検討する。これらの検討をもとに、愛媛県内におけるU字形鋤鋤先の様相について若干の見解を論じてみたい。

3 U字形鋤鋤先の製作方法と分類

(1) U字形鋤鋤先の観察と分析

観察の視点 観察の視点は主に三つである。第1の視点は、刃部長と耳部幅の長さの違いである。刃部長と耳部幅の長さの違いは長方形の素材をU字形に曲げる工程の中で生じる違いであり、製作工程の違いに起因する可能性がある。第2の視点は、耳部と刃部の厚みである。U字形鋤鋤先は長方形の素材をU字形に曲げることで造られるため、刃部長が長ければ長いほど、厚みは薄くなるはずである。つまり、第1の視pointsの補足的な役割としての、刃部長と耳部幅の長さの違いとそれぞれの厚みが整合的かどうかの検討である。第3の視点は、長方形の素材を二つ折りにするときに、長辺側を折り曲げるのか、短辺側を折り曲げるのかという点である。河野氏によって、両方のタイプが存在することが指摘されているが(河野2014)、実際に二つのタイプが存

在するとしたら、製作方法にどのように影響するのか検討したい。

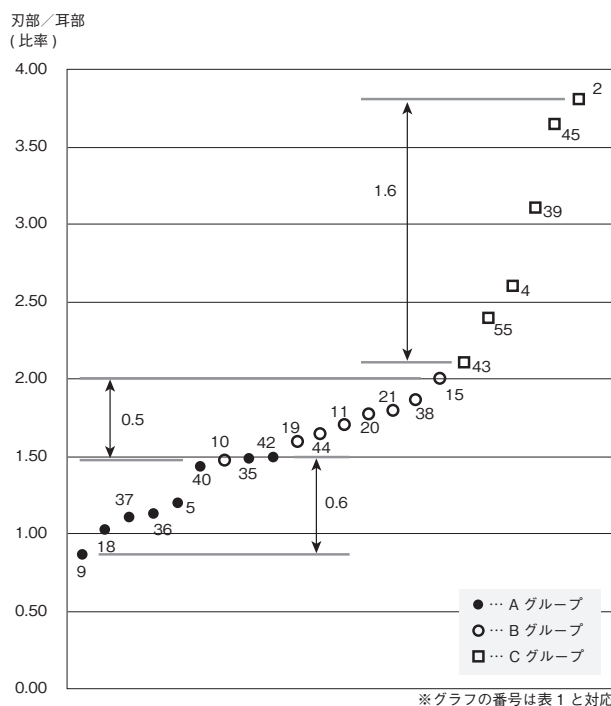
耳部と刃部の長さの違い(図4) 耳部幅(mm)に対する刃部長(mm)の比率は三つのグループに分けられる。0.87~1.5以下のAグループ、1.4以上~2.0のBグループと、2.1~3.8のCグループである。Aグループは0.87の旦13号墳から、ほぼ同一の相の谷8号墳、1.5の大池東3号墳まで、最大と最小の差は0.6である。Bグループは1.47倍の法華寺裏山古墳資料から、2.0のツノ谷古墳まで、0.5の幅をもつ。1.6~1.8までの資料が多数を占める。Cグループは2.39の上三谷原古墳から、3.8の祭ヶ岡古墳までで、1.6の差が認められる。AグループとBグループは比率の幅は小さく、かつまとまりをもち、Cグループの比率幅は1.6と大きく、ばらつきをもつ。

耳部と刃部の厚みの違い(図5) 上記の

3グループの耳部と刃部の最大厚の比較をおこなう。Aグループには耳部厚が刃部厚よりも厚いもの(aパターン)と刃部厚が耳部厚よりも厚いもの(bパターン)、ほぼ同等のもの(cパターン)の3パターンがみられる。aパターンの資料は旦13号墳、相の谷8号墳、片山7号墳、瀬戸風峠1号墳、大池東3号墳の5点で、bパターンの資料は庄の谷古墳の2点、cパターンの資料は治平谷2号墳第2主体、片山1号墳の2点である。Aグループはaパターンの資料が多い傾向にある。Bグループはaパターンとbパターンに分かれ、aパターンの資料は片山4号墳の2点で、bパターンの資料は法華寺裏山古墳、鳥越1号墳、ツノ谷古墳、高地栗谷1号墳、瀬戸風峠1号墳、東山鶯が森3号墳の6点である。Bグループはbパターンの資料が多い。Cグループはaパターン、bパターン、cパターンの3つに分かれ、aパターンのものは祭ヶ岡古墳、治平谷1号墳第1主体の2点、bパターンのものは瀬戸風峠1号墳、東山18号墳、松山大学構内遺跡の3点、cパターンの資料は上三谷原古墳の1点である。Cグループはaパターンとbパターンの2者が多数を占める結果となった。

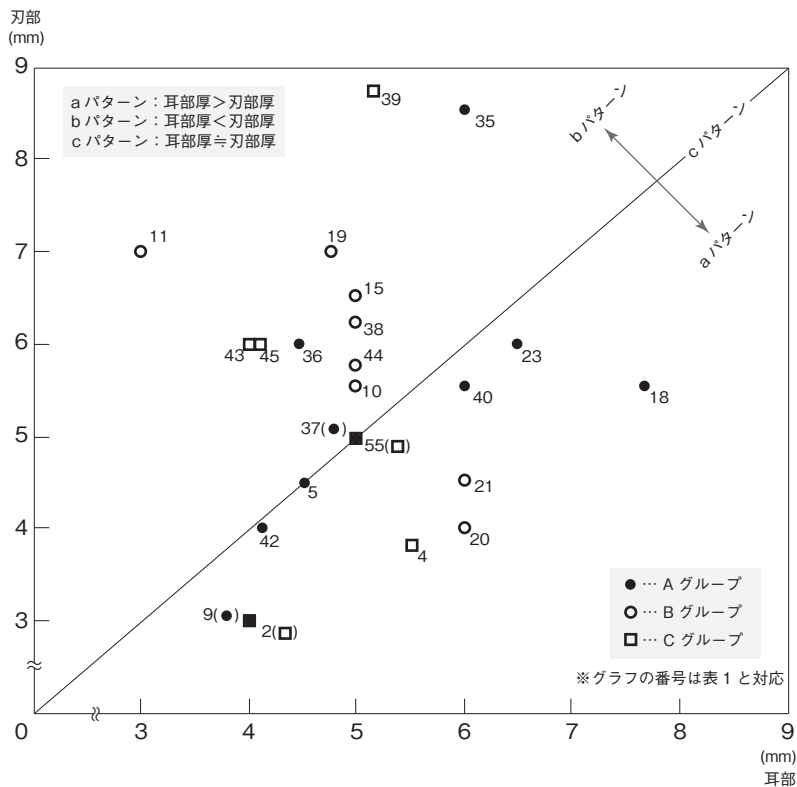
Aグループはaパターンの資料が多く、Bグループはbグループの資料が多く、Cグループはa・b両パターンが多いという結果になった。

断面形状(図6・7) 把握した13点の資料はすべて長辺側を折り曲げて製作されていることが確認できた。そのいっぽうで、側面に「ワレ」がみられた3点(鳥越1号墳、庄の谷古墳、片山1号墳)は、2枚に分離しているように見える。しかし、庄の谷古墳の側面形状を観察すると、「ワ



※グラフの番号は表1と対応
 9. 旦13号墳、18. 相の谷8号墳、37. 片山1号墳、36. 庄の谷古墳、5. 治平谷2号墳第2主体、40. 瀬戸風峠1号墳、10. 法華寺裏山古墳、35. 庄の谷古墳、42. 大池東3号墳、19. 高地栗谷1号墳、44. 東山鶯が森3号墳、11. 鳥越1号墳、20. 片山4号墳、21. 片山4号墳、38. 瀬戸風峠1号墳、15. ツノ谷古墳、43. 東山18号墳、55. 上三谷原古墳、4. 治平谷1号墳第1主体、39. 瀬戸風峠1号墳、45. 松山大学構内遺跡、2. 祭ヶ岡古墳

図4 耳部幅と刃部幅の比率



39. 瀬戸風峠1号墳、35. 庄の谷古墳、11. 鳥越1号墳、19. 高地栗谷1号墳、15. ツノ谷古墳、
38. 瀬戸風峠1号墳、43. 東山18号墳、45. 松山大学構内遺跡、36. 庄の谷古墳、44. 東山麓が森3号墳、
10. 法華寺裏山古墳、37. 片山1号墳、55. 上三谷原古墳、5. 治平谷2号墳第2主体、23. 片山7号墳、
40. 瀬戸風峠1号墳、18. 相の谷8号墳、21. 片山4号墳、42. 大池東3号墳、4. 治平谷1号墳第1主体、
20. 片山4号墳、9. 旦13号墳、2. 祭ヶ岡古墳

図5 各グループの耳部厚と刃部厚の比率

15-1,2,7、図16-5)。これは短辺を折り曲げるよりも長辺を折り曲げる際に生じやすいズレである。長辺側を均等に二分することは、想像以上に難しい。いっぽうで、短辺側を折り曲げる場合は耳部側に長短のズレが生じやすいはずである。以上のことから、実見した愛媛県内出土のU字形鋤鋤先に限ると、白木原案(図8-1)で製作されたといえる。

(2) 製作方法の検討と分類

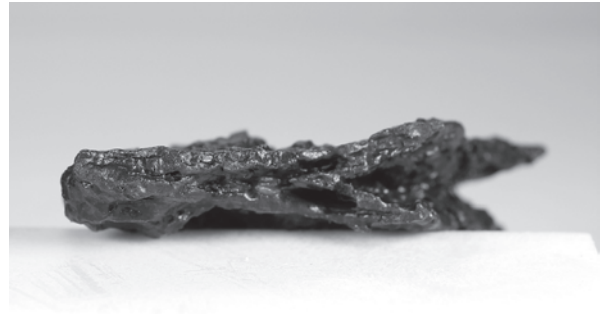
上記の観察結果から、耳部と刃部の長さの違いと断面の厚みの違いによって、それぞれを三つのグループと三つのパターンが抽出できた。A～Cのグループは、長さの比率に若干の重なりをもちつつもまとまりをもった分類となった。断面厚のパターンについては、それぞれの「グループ」には、ある「パターン」が多い傾向にあるということまでしか把握できなかったが、各グループとの結びつきは示せた。したがって、分類は「グループ」を基準にしておこなう。AグループをI類、BグループをII類、CグループをIII類とする。なお、素材を折り曲げる工程(図8-1)はどの類型においても、長辺側を折り曲げるものとする。

U字形鋤鋤先I類 I類は耳部が刃部より厚いaパターンのものが多い傾向にある。これは長方形

「レ」部分の形状が内側に凹んでいることから、いわゆる「使い減り」の可能性も考えられる。つまり、折り曲げ部分が「使い減り」により摩耗することで、接続部分が失われ、2枚にみえるだけといえる。古瀬氏が想定し河野氏が一部の資料で追認した(古瀬2002、河野2014)、短辺側を折り曲げて長方形の素材を製作する方法を裏付けるものは、今回の観察ではみうけられなかった*5。また、図8-②に示した、長軸側に鑿で割り入れたような資料もみうけられなかった。各類型とも木製柄を装着する部分を観察すると、長さにも長短が見られる資料がある(図11-1,4、図12-3、図13-2,6、図14-3、図



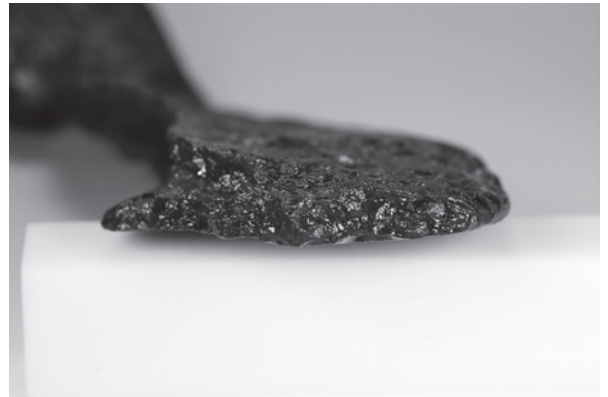
1 端華の森 1 号墳 (1)



2 治平谷 2 号墳第 2 主体 (6)



3 旦 13 号墳 (9)



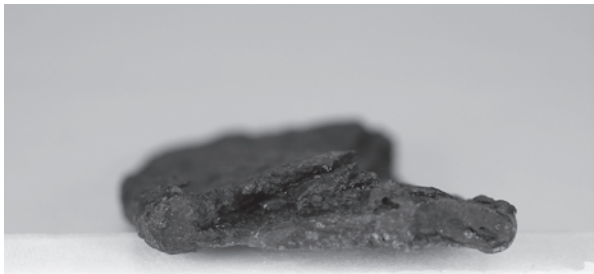
4 高地栗谷 1 号墳 (19)



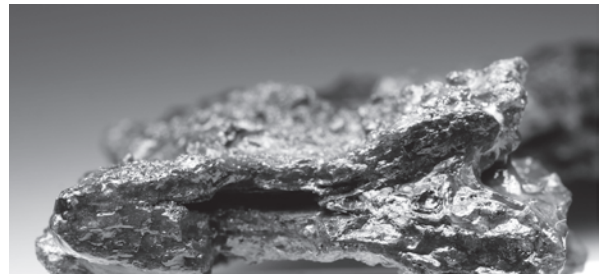
5 片山 4 号墳 (20)



6 矢田長尾 1 号墳 (24)



7 高橋岡寺 1 号墳 (25)

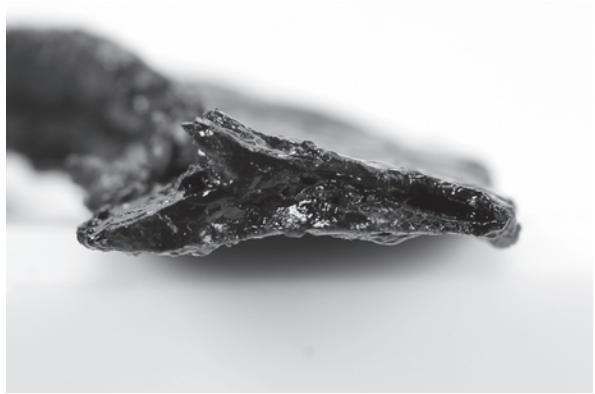


8 片山 1 号墳 (37)

図 6 断面の形状



1 大池東3号墳(42)



2 東山鷺が森3号墳(44)



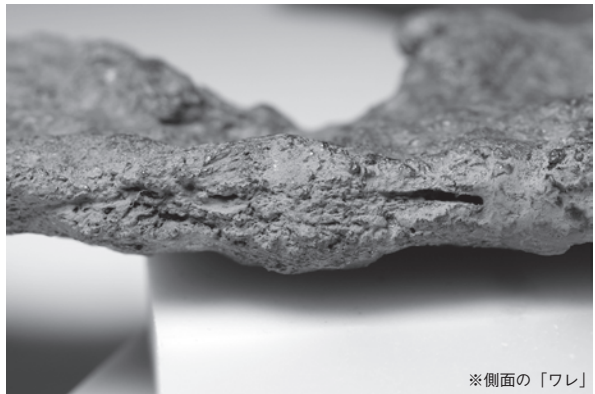
3 大峰ヶ台遺跡(46)



4 出作遺跡(50)

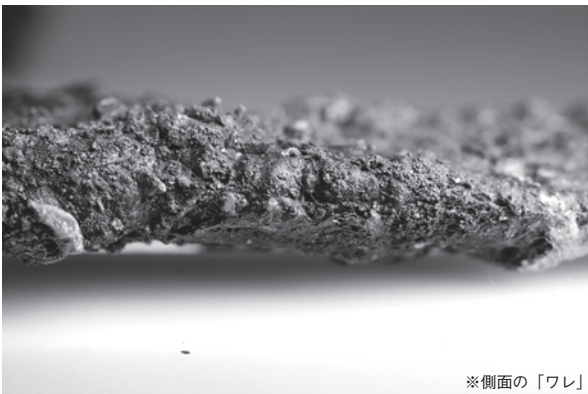


5 出作遺跡(51)



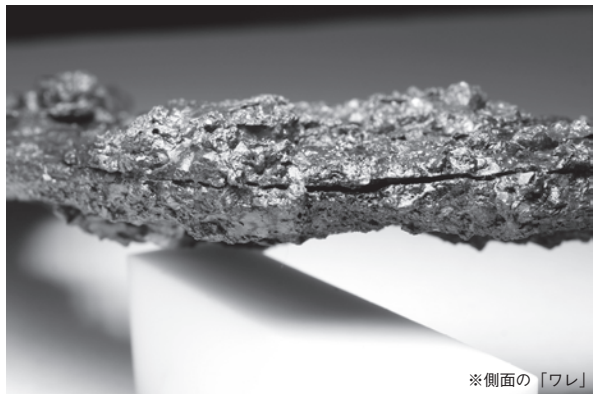
6 鳥越1号墳(11)

※側面の「ワレ」



7 庄の谷古墳(35)

※側面の「ワレ」

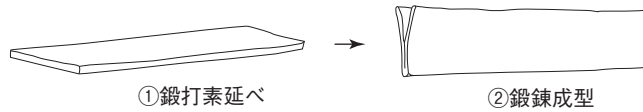


8 片山1号墳(37)

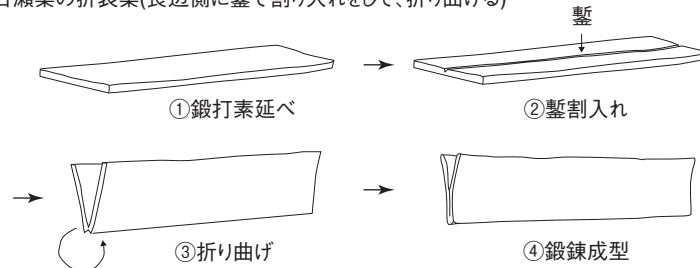
※側面の「ワレ」

図7 断面の形状と側面のワレ

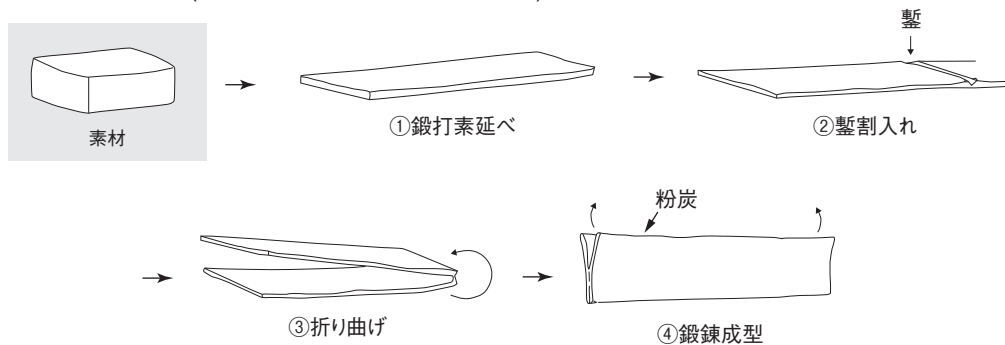
1 白木原案の製作工程(長辺側を折り曲げる)



2 白木原案と古瀬案の折衷案(長辺側に鑿で割り入れをして、折り曲げる)



3 古瀬案の製作工程(短辺側に鑿で割り入れをして、折り曲げる)



(白木原案は白木原1960を改変して使用、古瀬案は古瀬2002を一部改変再トレースして使用)

図8 鉄素材の折り曲げ方法

の素材をU字形に折り曲げる際に、刃部側を主に鍛打するためと考えられる。くわえて、I類はU字形に曲げるだけで製作されることから、長方形の鉄素材はあらかじめ製作したい全長にあわせた長さで造られる。そのため、耳部側はあまり鍛打されることなく、厚みをたもっているといえる。

U字形鋏鋤先II類 II類は刃部側が耳部よりも厚い資料が多いことが確認できた。I類が長方形素材をU字形に曲げる行為を基本として造られるのに対し、II類は素材をある程度曲げたのちに、鍛延することで耳部を形成する。鍛延することで、素材の厚みは薄くなるため、刃部が耳部より厚いbパターンの資料が多いといえる。つまり、図9-II類①で示した長方形の素材はI類のそれよりも長軸が短く、幅が広いものであったと想定できる。②の工程である程度刃部を整形し、③の工程で鍛延しながら耳部を整形する方法である。

U字形鋏鋤先III類 III類についてはaパターンの資料とbパターンの資料ではほとんど差はない。製作方法については、②の工程まではII類とほぼ同じで、③の工程で、耳部側と刃部側の両方を鍛延して整形する点がII類とは異なる。鍛延によって刃部を長くすることから、①段階の素材はII類よりも分厚い場合もある。

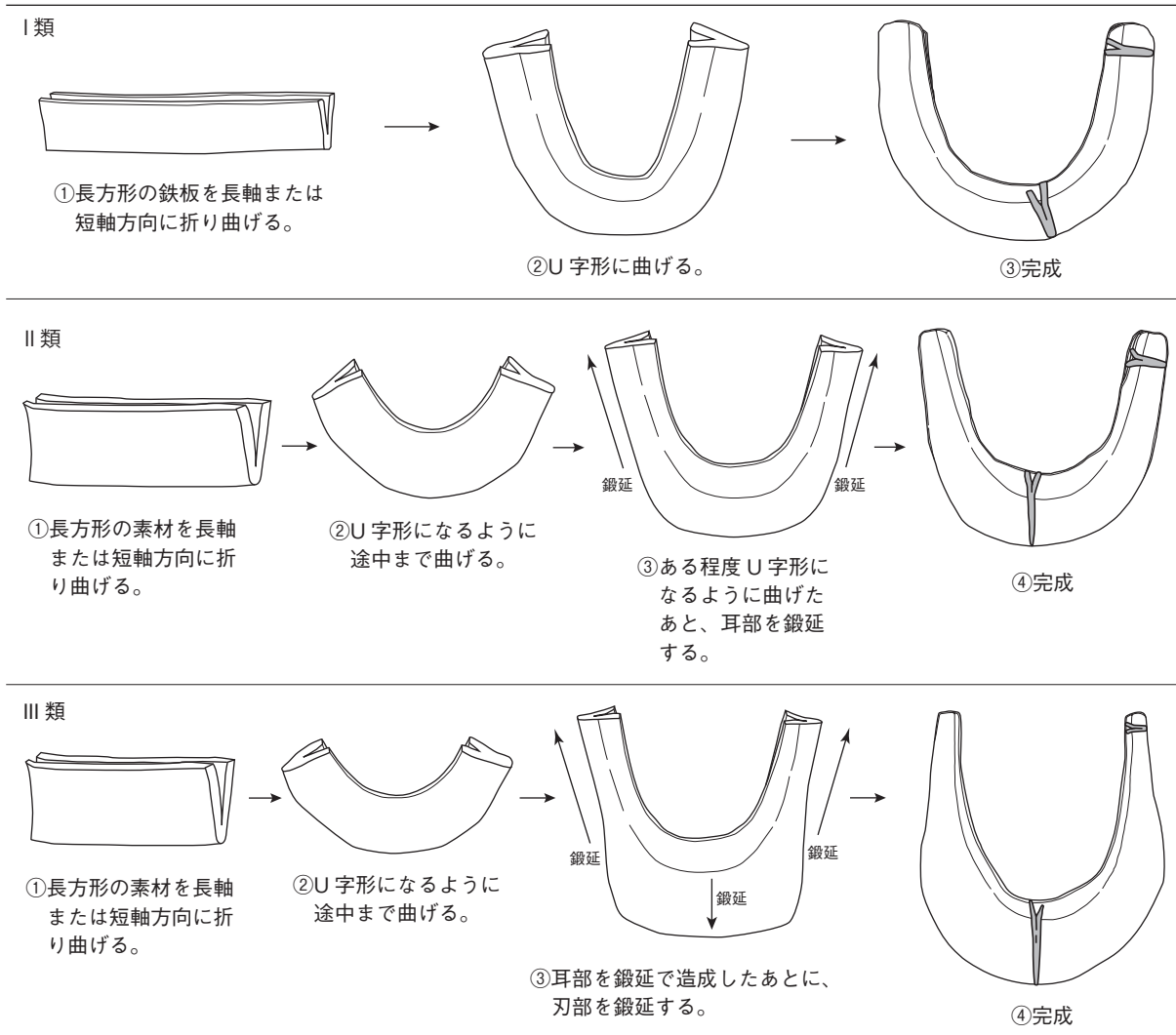


図9 U字形鋤鋤先製作工程の復元

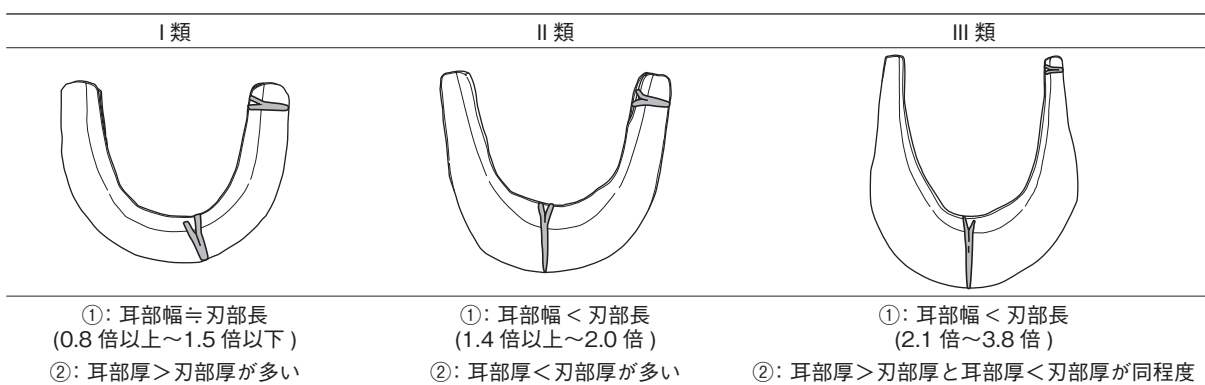
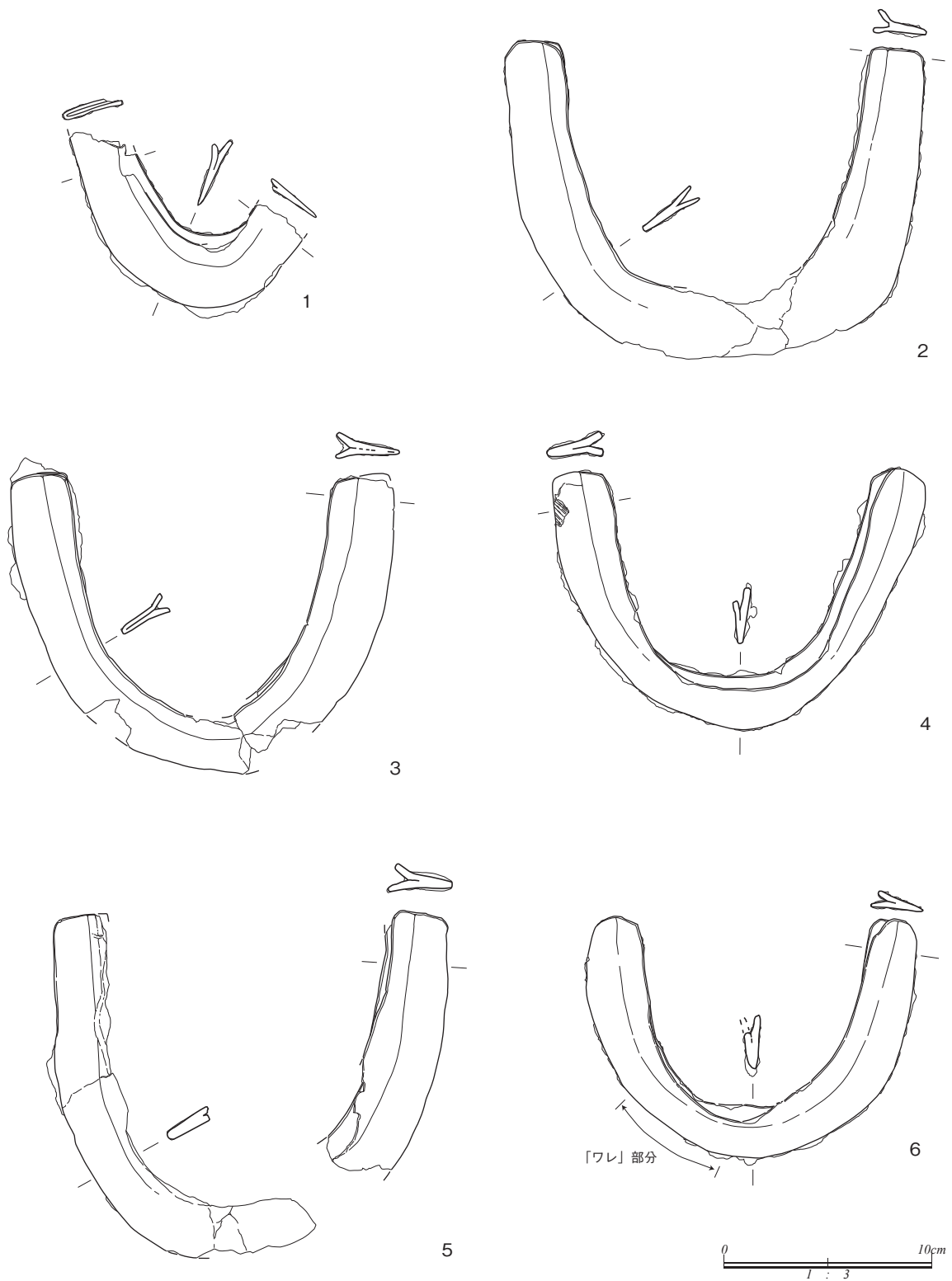
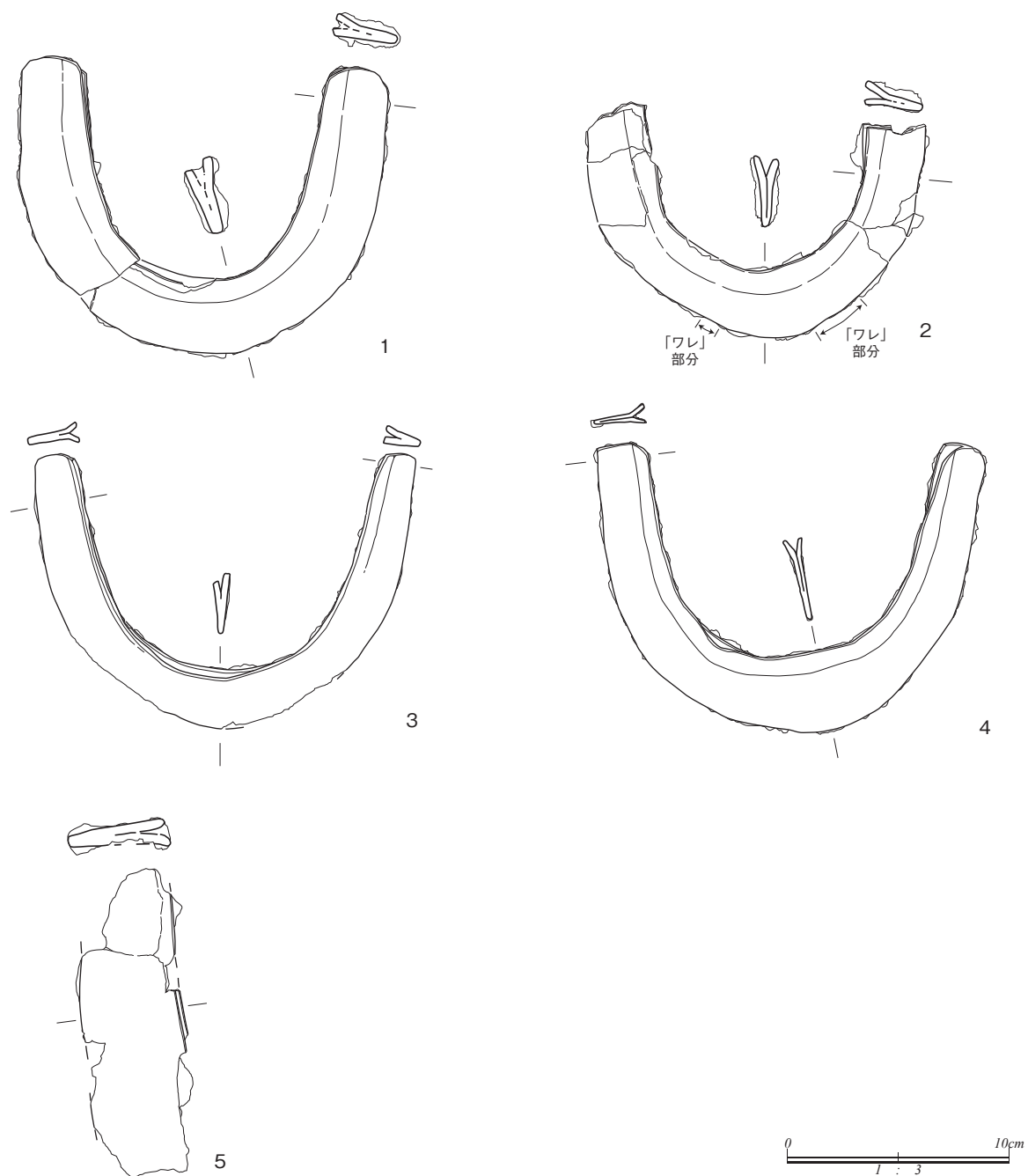


図10 U字形鋤鋤先の分類



1. 端華の森1号墳(1)、2. 治平谷2号墳第2主体(5)、3. 旦13号墳(9)、4. 相の谷8号墳(18)、
5. 片山7号墳(23)、6. 庄の谷古墳(35)

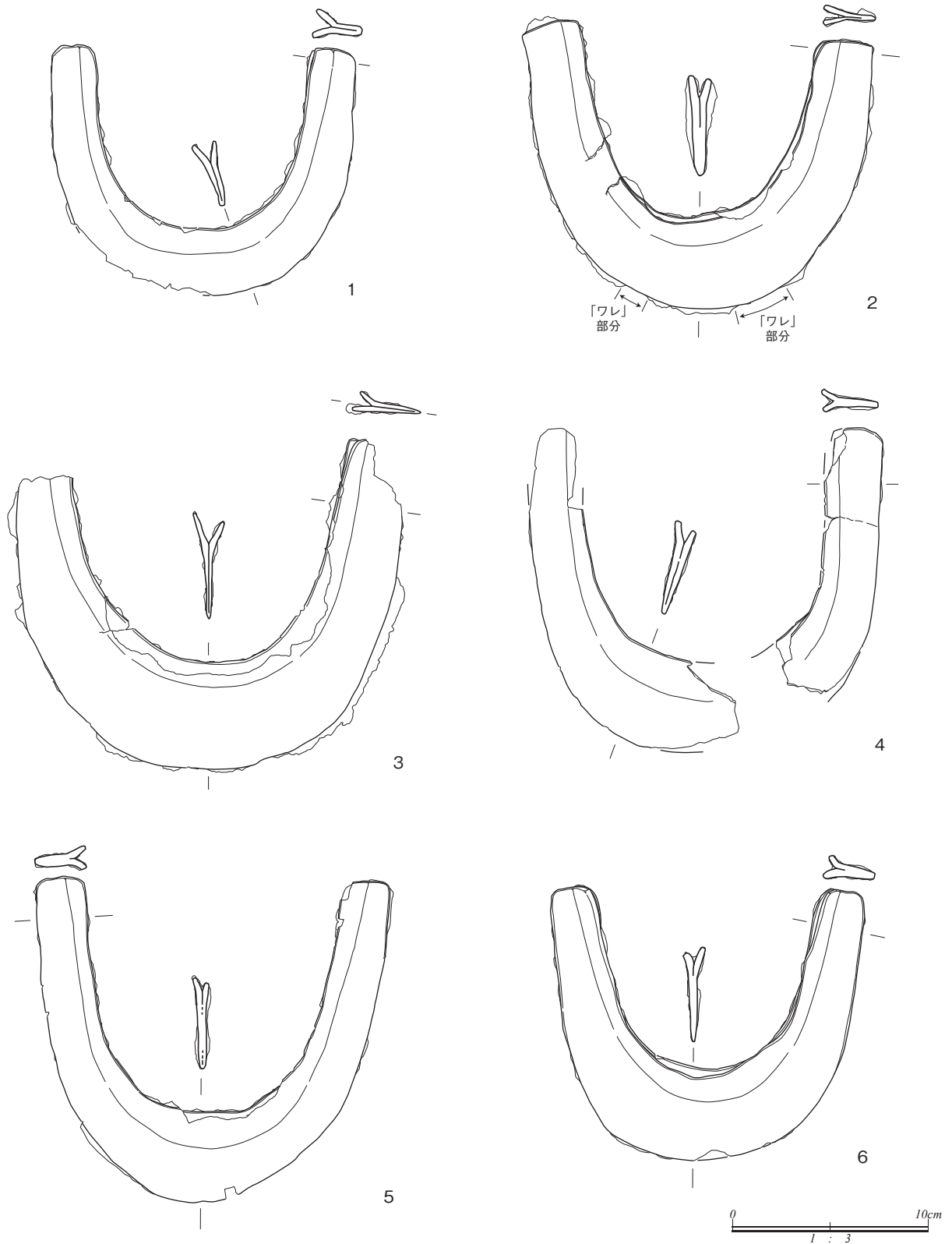
図11 U字形鉄鋤先I類(1)



1. 庄の谷古墳(36)、2. 片山1号墳(37)、3. 瀬戸風峠1号墳(40)、4. 大池東3号墳(42)、5. 出作遺跡(52)

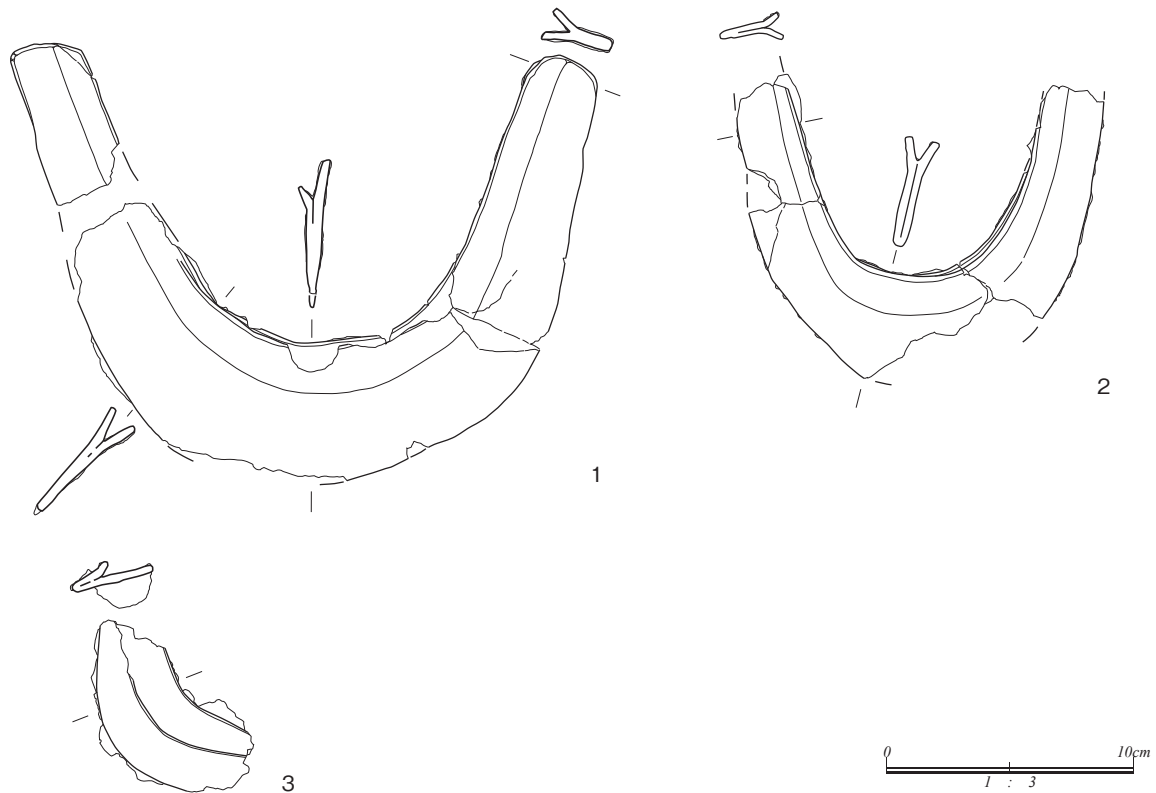
図12 U字形鍬鋤先I類(2)

まとめ 以上が、製作方法からのU字形鍬鋤先の分類である。耳部と刃部の幅の違いは、長方形素材の鍛延の有無に起因すると考えた。長方形素材が長いものは長方形の素材の時点で耳部となる部分が造られ、長方形素材が短いものは鍛延により耳部が造られるという違いである。この違いでI類とII・III類を分けた。耳部と刃部の厚さの違いについては、I類はU字形に曲げる過程で刃部側を主に鍛打することから刃部側が薄くなる傾向にあり、II類は素材を鍛延することで耳



1. 法華寺裏山古墳 (10)、2. 鳥越1号墳 (11)、3. ツノ谷古墳 (15)、4. 高地栗谷1号墳 (19)、5. 片山4号墳 (20)、
6. 片山4号墳 (21)

図13 U字形鉄鋤先Ⅱ類 (1)



1. 瀬戸風峠1号墳(38)、2. 東山鷺が森3号墳(44)、3. 出作遺跡(51)

図14 U字形鍬鋤先II類(2)

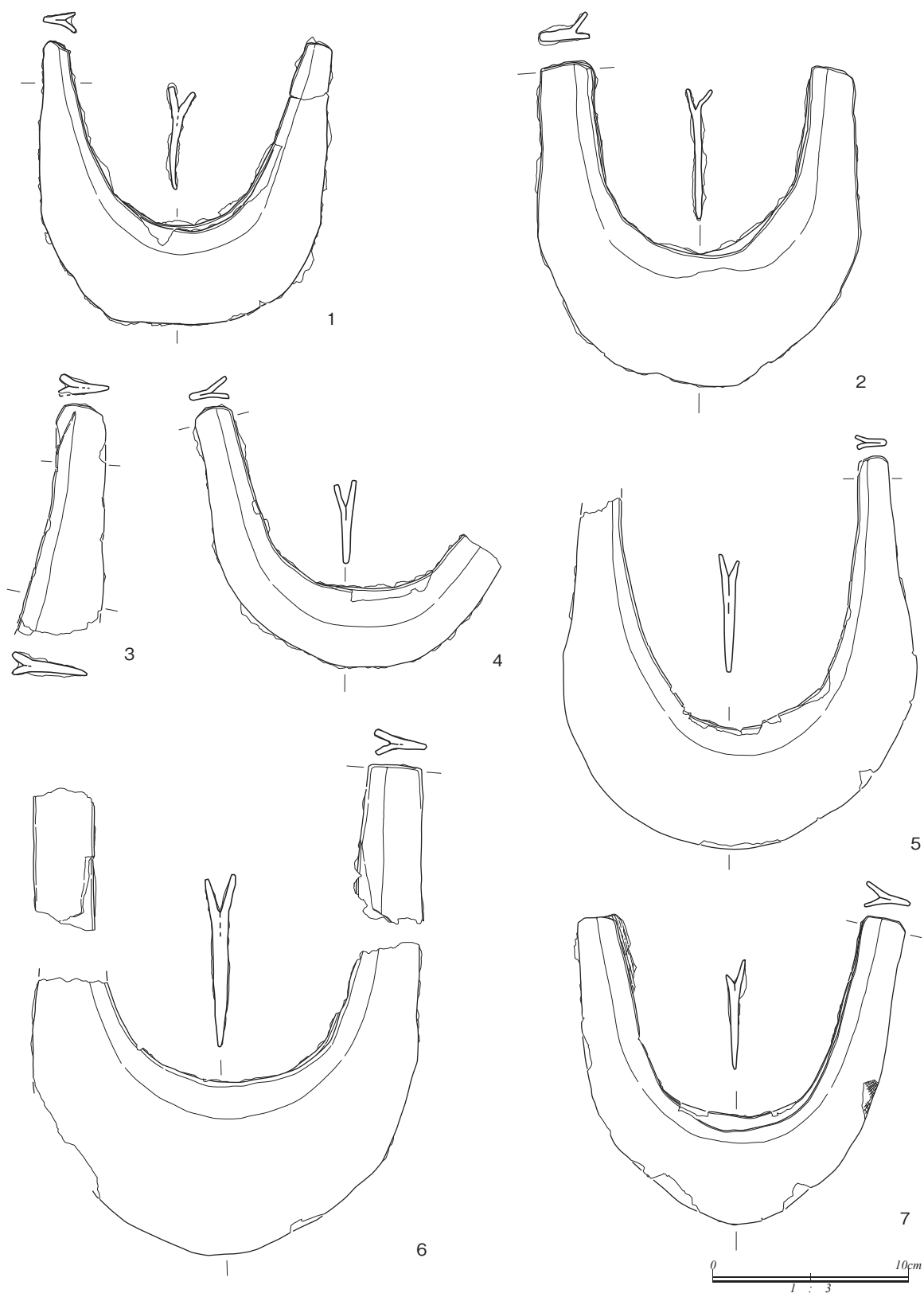
部を形造ることから耳部が薄くなる傾向にある。III類は刃部も鍛延して延ばすことから長方形素材がII類よりも分厚い。素材が分厚い分、刃部が長くできる。この場合は、素材の分厚さの度合いによって、耳部が刃部より厚みをもつ場合もあれば、その逆もあると考えられる。また、愛媛県内の資料で断面観察可能なものはすべて長辺側を折り曲げて製作する方法であった。

4 U字形鍬鋤先の年代

相伴する須恵器を手がかりに各類型の年代について考えたい。ただし、U字形鍬鋤先が出土する横穴式石室については、一定の時期幅をもつことが前提となる。

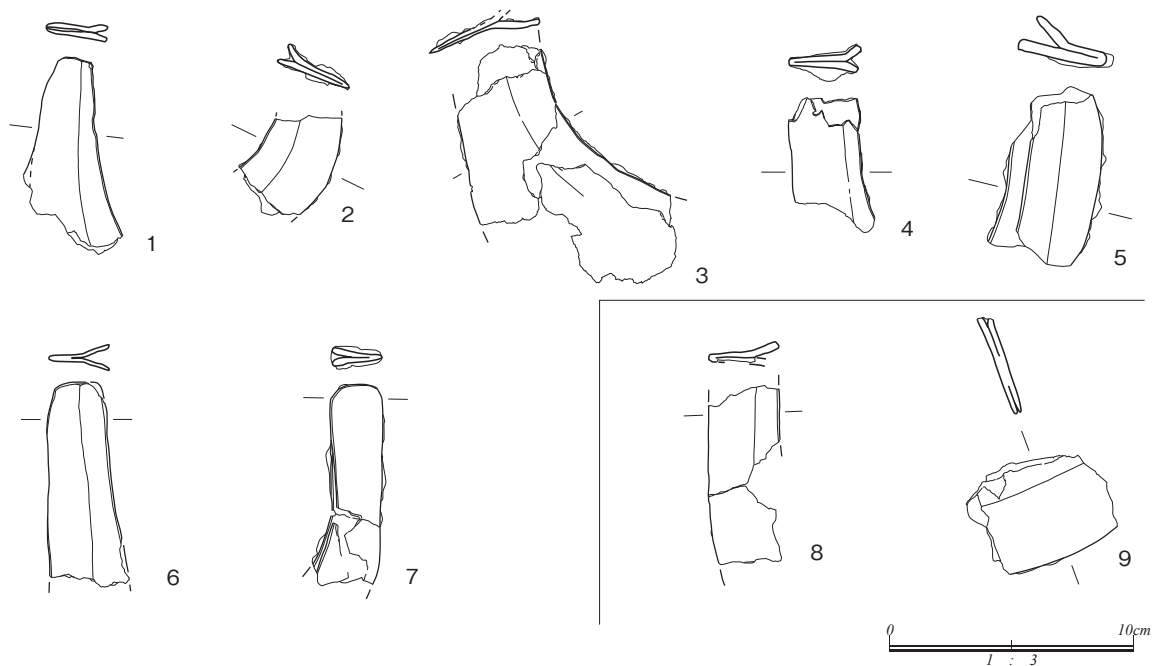
U字形鍬鋤先I類 I類で最古段階の資料は、TK208型式並行期～TK23型式並行期に位置づけられる出作遺跡のものである(図12-5)。治平谷2号墳第2主体部は、同一古墳の治平谷2号墳第1主体部がMT15型式並行期であることから、同様の時期かまたはやや下の時期が想定される。松山平野の瀬戸風峠1号墳の存続時期はTK10型式並行期～TK217型式並行期である。且13号墳はTK10型式並行期、片山7号墳はTK209型式並行期～TK217型式並行期に位置づけられる。以上のことから、I類は5世紀中頃～後半に出現し、TK47型式並行期の空白時期を経て、6世紀代から7世紀中葉段階まで存続した類型といえる。

U字形鍬鋤先II類 II類で最古段階の資料はTK208型式並行期～TK23型式並行期に位置づけら



1. 祭ヶ岡古墳 (2)、2. 治平谷 1 号墳第 1 主体 (4)、3. 片山 4 号墳 (22)、4. 東山 18 号墳 (43)、5. 松山大学構内遺跡 (45)、6. 瀬戸風峠 1 号墳 (39)、7. 上三谷原古墳 (55)

图 15 U 字形鋤鋤先 III 類



1. 世田山4号墳(3)、2. 治平谷2号墳第2主体(6)、3. 新谷石ヶ谷5号墳(14)、4. 矢田長尾1号墳(24)、
5. 影浦谷1号墳(41)、6. 大峰ヶ台遺跡(46)、7. 出作遺跡(50)、8. 高橋岡寺1号墳(25)、9. 東野お茶屋台遺跡(47)

図16 U字形鉄鋤先Ⅱ類またはⅢ類と類型不明品

れる出作遺跡のものである。MT15型式並行期～TK43型式並行期の法華寺裏山古墳、MT15型式並行期～TK217型式並行期の片山4号墳、TK10型式並行期～TK209型式並行期の鳥越1号墳、ツノ谷古墳と瀬戸風峠1号墳はTK10型式並行期～TK217型式並行期までの時期幅をもつ。したがって、Ⅱ類も5世紀中頃～後半に出現し、TK47型式並行期の空白時期を経て、6世紀代から7世紀中葉段階までの時期幅をもつ類型である。

U字形鉄鋤先Ⅲ類 Ⅲ類の最古段階の資料は、三吉秀充氏によりTK208型式並行期に位置づけられる祭ヶ岡古墳のものである(三吉2006)。MT15型式並行期以降の治平谷1号墳第1主体、TK10型式並行期～TK217型式並行期の瀬戸風峠1号墳、TK209型式並行期～TK217型式並行期の東山18号墳、上三谷原古墳はMT15型式並行期からTK209型式並行期の時期幅をもつ。Ⅲ類も5世紀中頃に出現し、TK47型式並行期の空白時期を経て、6世紀代から7世紀中葉までの時期幅をもつ類型である。

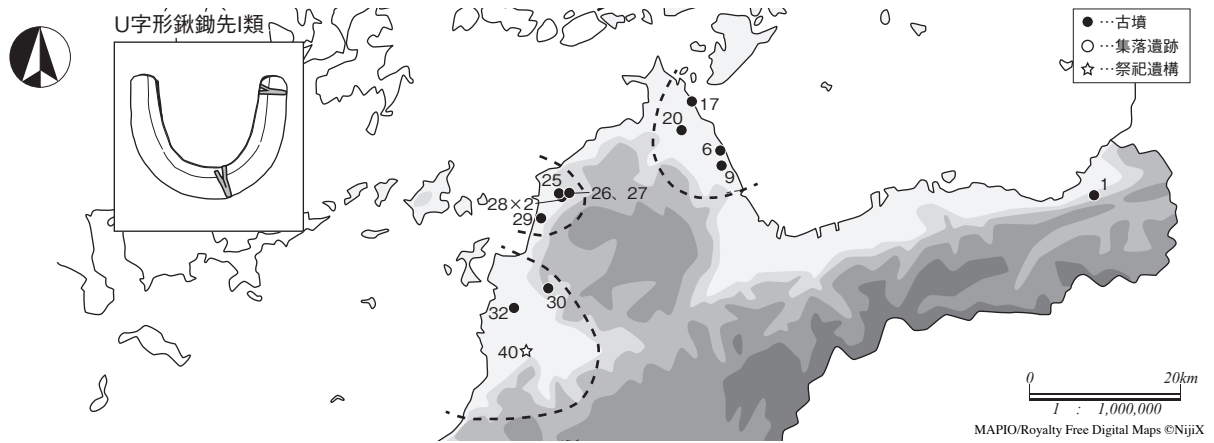
まとめ U字形鉄鋤先の3類型は、少なくとも5世紀中頃には出現しており、5世紀終わり頃の空白時期を経て、6世紀代に資料数が増加し、7世紀中葉まで存続していたことが確認できた。以上のことから、愛媛県内のU字形鉄鋤先3類型の形態差は時期差をあらわさず、5世紀中頃に出現し、7世紀中葉まで存続したと結論づけられる。

5 U字形鉄鋤先の分布(図2、図17・18)

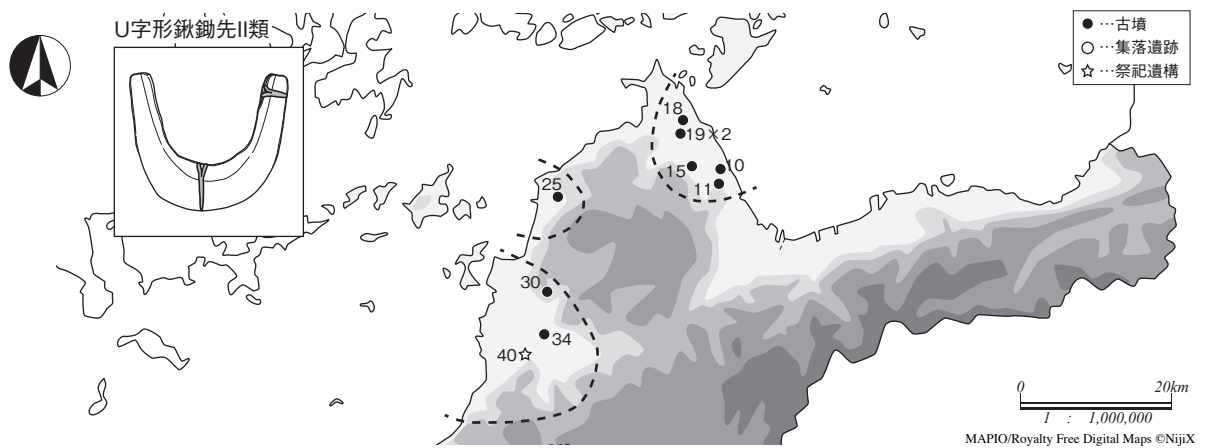
つぎにU字形鉄鋤先各類型の分布について検討する。図1は愛媛県内でU字形鉄鋤先が出土した

遺跡の分布、図17はI類からIII類のU字形鋤鋤先の分布、図18はII類またはIII類と考えられるU字形鋤鋤先の分布である。

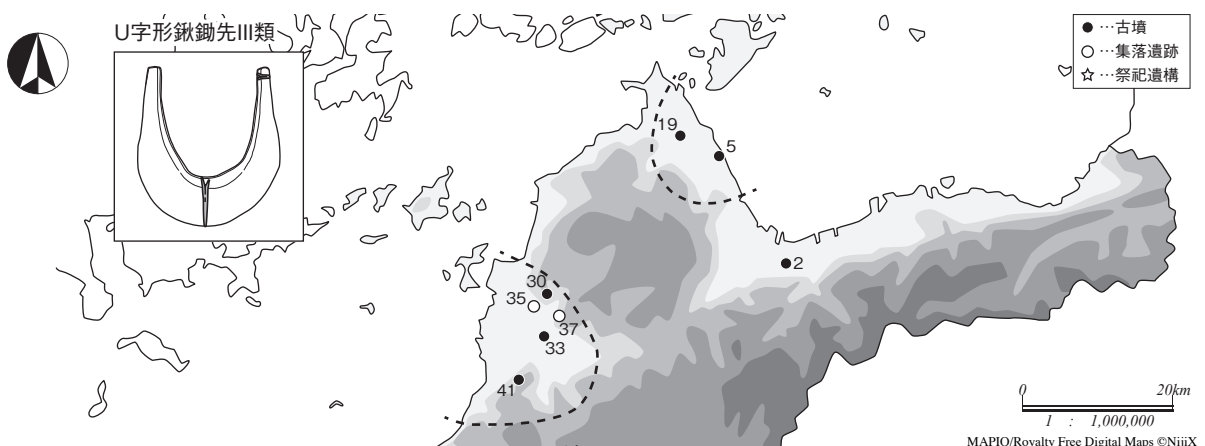
U字形鋤鋤先I類の分布(図17・図19-①) I類は今治平野、北条平野、松山平野、宇摩平野で出



1. 端華の森1号墳、6. 治平谷2号墳、9. 旦13号墳、17. 相の谷8号墳、20. 片山7号墳、上難波南0号墳、26. 小田山4号墳、27. 小田山7号墳、28. 庄の谷古墳、29. 片山1号墳、30. 瀬戸風峠1号墳、32. 大池東3号墳、40. 出作遺跡

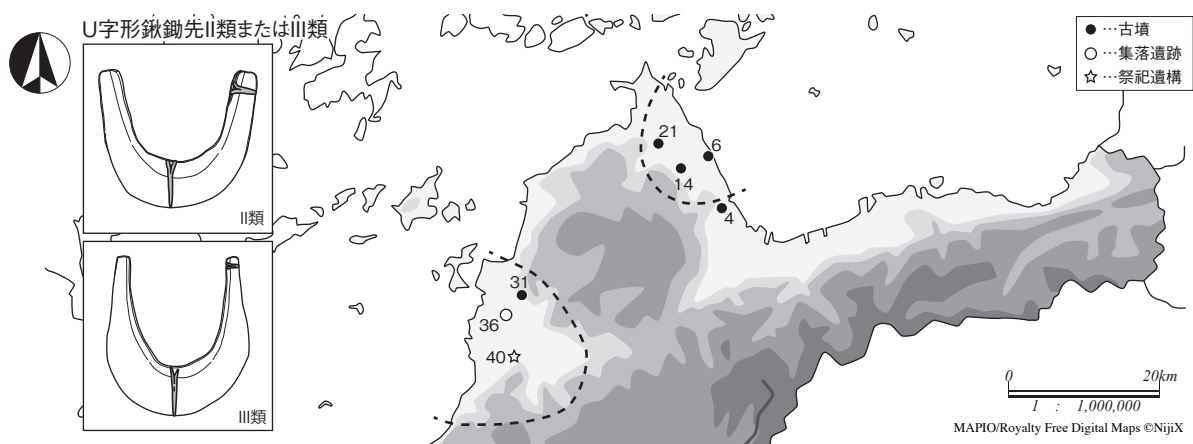


10. 法華寺裏山古墳、11. 鳥越1号墳、15. ツノ谷古墳、18. 高池栗谷1号墳、19. 片山4号墳、25. 上難波南0号墳、30. 瀬戸風峠1号墳、34. 東山高が森3号墳、40. 出作遺跡



2. 祭ヶ岡古墳、5. 治平谷1号墳、19. 片山4号墳、30. 瀬戸風峠1号墳、33. 東山18号墳、35. 松山大学構内遺跡、41. 上三谷原古墳

図17 愛媛県内のU字形鋤鋤先の分布(1)



4. 世田山4号墳、6. 治平谷2号墳、14. 新谷石ヶ谷5号墳、21. 矢田長尾1号墳、31. 景浦谷1号墳、36. 大峰ヶ台遺跡、40. 出作遺跡

図18 愛媛県内のU字形鋤鋤先の分布(2)

土している。割合で見ると、北条平野、今治平野が30%を超え、やや多い傾向をみせる。松山平野も23%を占め、少数ではあるが宇摩平野や道前平野からも出土しており、I類は松山平野から宇摩平野に広がりを見せる類型といえる。また、出作遺跡以外はすべて古墳からの出土である。したがって、I類は北条平野と今治平野にやや多く出土し、松山平野から宇摩平野に広がり、古墳を中心に出土する類型といえる。

U字形鋤鋤先II類の分布(図17・図19-①) II類は今治平野で6点出土、松山平野で3点出土、北条平野で1点出土している。今治平野が60%と5割を超えるが、松山平野も30%を占める。したがって、II類は今治平野にやや多く出土し、松山平野や北条平野に広がる類型といえる。この類型も出作遺跡以外はすべて古墳からの出土である。以上のことから、II類は分布域にやや偏りを見せ、古墳を中心に出土する類型といえる。

U字形鋤鋤先III類の分布(図17・図19-①) III類は今治平野で2点、松山平野で5点、道前平野で1点出土している。松山平野が62.5%、今治平野が25%、道前平野で12.5%となる。松山平野にやや多く分布し、今治平野や道前平野に広がる類型といえる。III類のなかで、刃部が耳部より厚いパターンの資料が松山平野に集中し、そのうちの2点が集落出土であることも興味深い。刃部側が分厚いということは、それだけ耕作時の負荷に耐えやすいためであろうか*6。以上のことから、III類は分布域にやや偏りを見せ、古墳からだけでなく、集落からも出土する類型といえる。

U字形鋤鋤先II類またはIII類の分布(図18・図19-②) II類とIII類に分類できない資料は今治平野で3点、松山平野で3点、道前平野で1点出土している。今治平野と松山平野で43%、道前平野で14%である。これらの資料がどちらの類型であるかによって、今治平野と松山平野におけるII類とIII類の分布量が大きく変わる。しかしながら、これらの資料は破片資料であり、類型の判断はできない。

まとめ(図19-③) 各類型の割合を平野別にみると、今治平野はII類が50%、I類は33%、III類は17%となり、II類が5割を占めるが、I類やIII類も一定数出土している。松山平野はIII類が

45.4%と5割近くを占めるものの、I類とII類は27.3%と同じである。北条平野はI類が83%、II類が17%である。北条平野だけでみると、I類が飛び抜けて多い。したがって、I類が北条平野と今治平野にやや多く分布する類型、II類が今治平野にやや多く分布する類型、III類が松山平野にやや多く分布する類型といえる。これらの結果から、各類型のU字形鋤鋤先は、愛媛県内の松山平野から宇摩平野にかけて分布しているものの、傾向として類型ごとに多く出土する地域がとらえられる。

6 愛媛県内におけるU字形鋤鋤先の評価

U字形鋤鋤先3類型は、5世紀中頃～後半のほぼ同時期に松山平野と道前平野に出現し、6世紀代には分布域に若干の傾向をもちながら県内各地に広がっていたことが把握できた。では、各類型の年代的な傾向と分布の傾向を合わせてみた場合はどうであろうか。5世紀中頃～後半には松山平野の出土遺跡(I類・II類)、道前平野の祭ヶ岡古墳(III類)の3点が出土しており、この時期には3類型とも出現していたことがわかる。ただし、5世紀代のU字形鋤鋤先は6世紀代とは分布の傾向が異なっていることやTK47型式並行期にはみられないことから、単発的な出現であったといえる。6世紀代になると、類型ごとに分布域

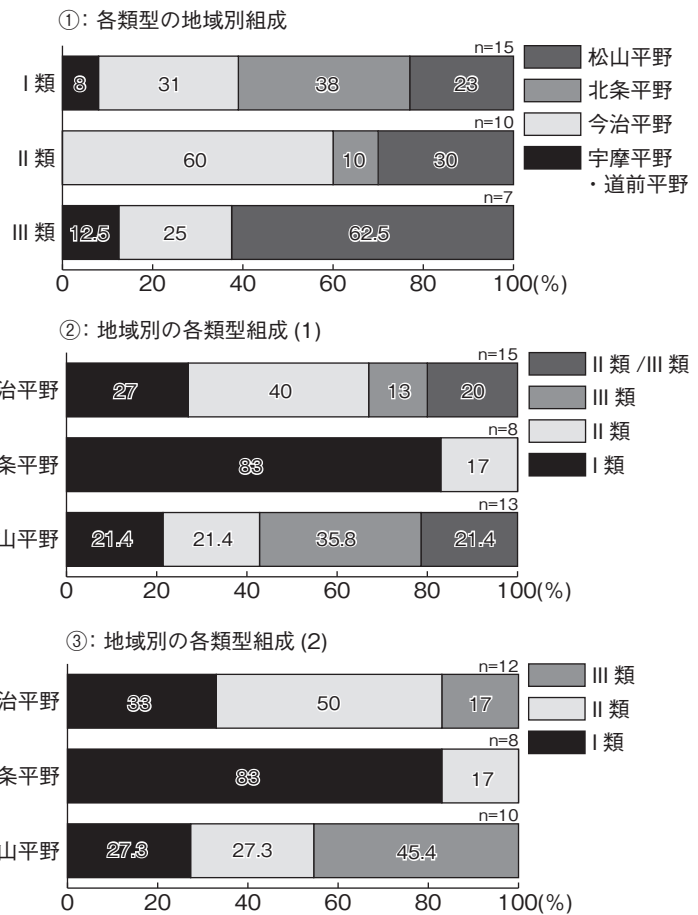


図19 愛媛県内のU字形鋤鋤先の組成グラフ



図20 塚本氏による金属器生産モデル (塚本2013より一部改変して使用)

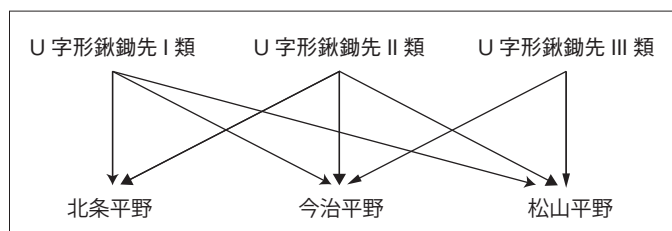


図21 愛媛県内におけるU字形鋤鋤先各類型の供給先

の差がみられるようになる。この緩やかな差はU字形鋤鋤先の製作地の差として理解できないだろうか。古墳時代の鍛冶について、製作される製品の違いから、古瀬氏は「古墳時代的生産」と「弥生時代的生産」に分け(古瀬1991)、塚本敏夫氏は「韓鍛冶」・「倭鍛冶」・「野鍛冶」に分けた(塚本1995・2012、図20)。両氏によれば、U字形鋤鋤先などの農具は、「弥生時代的生産」や「野鍛冶」に位置づけられる。古瀬氏は集落内部で操業する「村方鍛冶」による生産とし、塚本氏は地域に根ざした生産とした(古瀬1991、塚本2012)。本稿では、U字形鋤鋤先の耳部と刃部の製作方法の違いに基づき、3類型に分類した。特に耳部の整形の違いは、用途・機能の差と直接的には結びつかず、U字形鋤鋤先を製作した集団の差と考えたい。したがって、各類型の差は「村方鍛冶」とよばれる地域に根ざして鉄製農具を生産した鍛冶集団の違いと評価できよう。さらに、U字形鋤鋤先3類型の分布域が、重なりをもちつつも、緩やかながらそれぞれに傾向をみせる現象は、鍛冶集団が各地域に根ざしながら、松山平野から今治平野にかけてU字形鋤鋤先を供給したことをあらわしている(図21)。以上のことから、愛媛県内でのU字形鋤鋤先3類型の違いは鍛冶集団の違いで、北条平野から今治平野にかけての集団(I類)・今治平野を中心とする集団(II類)・松山平野を中心とする集団(III類)が、それぞれ松山平野から今治平野を中心にU字形鋤鋤先を供給していたと評価しておきたい。

7 おわりに

本稿では、愛媛県内出土のU字形鋤鋤先を製作方法に基づいて3類型に分類した。3類型には、時間的な差異はみられず、出現時期もほぼ同時期であった。いっぽうで、3類型は分布域に傾向があることが確認できた。これらの類型は、製作集団の差によると評価した。古瀬氏の「弥生時代的生産」や塚本氏の「野鍛冶」と評価した農具生産の実態が多少なりとも明らかにできたのではないだろうか。本稿での評価を深めるためには、古墳時代後期の社会構造の検討や生産遺跡の実態を解明することが重要であることはいままでのまでもないが、愛媛県域で多量に出土している鉄製農具について、その製作方法やそれに基づく編年や分布域の傾向について考察することも重要である。これらの検討をおこなうことで、愛媛県内の古墳時代後期における具体的な鉄製農具生産の実態について迫ることが可能になる。さらに、鈴木氏が想定した渡来系移住民の実態についても、その具体像が明らかにできると考えている。

謝辞

本稿をなすにあたり、富田尚夫氏には文献の紹介や地域における馬具生産の動向などをご教示いただきました。U字形鋤鋤先の地域生産を考えるうえで、大きなヒントとなりました。また、下記の諸氏や諸機関にお世話になりました。とくに資料見学に際しましては、2021年1月から見学を始めたため、年度末に向けた多忙な時期にご対応いただくこととなり、快く受け入れていただいたことをたいへん有り難く存じております。記して感謝申し上げます。

青木聡志、石貫睦子、梅木謙一、岡島俊也、小野隼弥、小玉亜紀子、後藤寛子、白石聡、済川健太郎、富田尚夫、中勇樹、中村美琴、乗松真也、早瀬航、原口耕一郎、深江龍哉、松本 茂、持永壮志朗、山内英樹、山口莉歩、吉岡和哉、渡部浩史、渡邊芳貴

今治市教育委員会、愛媛県教育委員会、愛媛県歴史文化博物館、西条市教育委員会、四国中央市教育委員会、四国中央市歴史考古博物館(高原ミュージアム)、松前町教育委員会、松山市考古館

註

- *1 U字形「鋤鋤先」は「刃先」と呼ばれる場合も多い。今回は、鋤や鋤の刃先という意味で「鋤鋤先」と称する。
- *2 2020年度、松山市埋蔵文化財センターが調査をおこなった腰折古墳群で2点のU字形鋤鋤先が出土している。未報告資料ではあるが、渡部浩史氏に出土しているとの情報をいただいた。また、富田氏からも南予地域でも1点出土していることをご教示いただいた。その3点を含めると59点になる。記して感謝するとともに、本報告をまって検討したい。
- *3 西条市小松町の格蔵山古墳のU字形鋤鋤先については、古墳からの出土品との伝承があり、古墳時代の鋤鋤先とされているが、その平面形態は近世の鋤鋤先と類似する。現時点では形態以外の根拠はないが、近世の所産と判断し、本稿での検討からは除外した。
- *4 古瀬氏は自身の復元案が完全に正しいと考えているわけではなく、製作方法の検討した時点ではもっとも合理的な製作方法であるとしている。この実験結果を裏付けるためには列島内のU字形鋤鋤先のさらなる検討や朝鮮半島のU字形鋤鋤先の検討も必要であると述べている。
- *5 この長辺と短辺方向の折り曲げ方について、もう一つ重要な問題として、「鍛接」が挙げられる。製作方法を検討するにあたり、簡単にはあるが製作実験をおこなってみた。筆者の未熟さもあり、完成には至らなかったが、折り曲げて素材を溶解させることはできた。溶解させ、鍛接することには失敗したが、断面の形状を把握することはできた。その結果、そもそも「鍛接」させているのだろうかとの疑問に思った。刃部が長いものは鍛延により形成しているため、あたかも「鍛接」でくっついているように見えるだけではないかと感じた。この点についても、稚拙な実験ではあるが、継続して検討していきたいと考えている。
- *6 今回は検討できないが、古代も含めた集落出土資料との比較をおこなうことで、実用的要素の強いものであるとの指摘も可能であろう。

参考文献

- 遺跡発行会 2013「愛媛県鉄製農工漁具出土遺跡一覧表」『遺跡』47,pp.83-113
- 魚津知克 2003「曲刃鎌とU字形鋤鋤先—「農具の画期」の再検討—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11,pp.29-48
- 魚津知克 2017a「鉄製農具」『モノと技術の古代史』金属編,pp.101-141
- 魚津知克 2020「鉄製農具の分類と様式設定」『中期古墳研究の現状と課題Ⅳ—副葬品による広域編年再考—』中国四国前方後円墳研究会第23回研究集会,pp.51-68
- 河野正訓 2014『古墳時代の農具研究—鉄製刃先の基礎的検討をもとに—』雄山閣
- 白木原和美 1960「クワヤスキについての研究ノート」『歴史評論』118,pp.2-12
- 鈴木一有 2016「中原4号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法 中原古墳群』富士見市埋蔵文化財調査報告59,pp.247-274
- 塚本敏夫 1995「製作技術からみた古墳時代の鉄器生産」『鉄器文化研究集会』発表資料
- 塚本敏夫 2012「金銅・ガラス装飾」『古墳時代の考古学』5,時代を支えた生産と技術,pp.154-170
- 都出比呂志 1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13-4,pp.36-51

- 都出比呂志 1989「農具鉄器化の諸段階」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店,pp.9-43
- 土井義夫 1971「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」『物質文化』18,pp.14-27
- 中村光司 1995「調査のまとめ」『西岡古墳発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告115-5,pp.25-30
- 野島 永 2013「鉄製農工漁具」『古墳時代の考古学』4,副葬品の型式と編年,pp.136-145
- 古瀬清秀 1991「鉄器の生産」『古墳時代の研究』5,生産と流通II,pp.37-3
- 古瀬清秀 1991「農工具」『古墳時代の研究』8,古墳II,副葬品,pp.71-1
- 古瀬清秀 1999『日本古代における鉄鍛冶技術の研究』広島大学学位論文
- 古瀬清秀 2002「見て触って知る古墳時代の鉄・鉄器生産」『研究紀要』6,下関市立考古博物館,pp.33-9
- 松井和幸 1987「日本古代の鉄製鋏先、鋤先について」『考古学雑誌』72-3,pp.30-8
- 松井和幸 2001『日本古代の鉄文化』雄山閣
- 松本正信 1969「U字形鋏(鋤)先論」『考古学研究』15-4,pp.42-7
- 三吉秀充 2006「西条市祭ヶ岡古墳出土須恵器に関する一考察」『人文学論叢』8, pp.133-144
- 村上恭通 1993「麻生小学校南遺跡出土の鉄製U字形鋏・鋤先について」『砥部町内埋蔵文化財調査報告書III』砥部町埋蔵文化財調査報告書9,pp.119-22
- 村上恭通 1994「出作遺跡における鍛冶と祭祀」『出作遺跡とそのマツリ—古墳時代松山平野の祭祀と政治—』松前町教育委員会,pp.28-9
- 村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店

挿図出典

(筆者実測・撮影の場合は所蔵・保管機関を記述。再トレースの場合は引用文献を記述)

図1：筆者作成。図2：筆者作成。図3：白木原1960・中村1995をもとに作成、古瀬2002を一部改変、再トレース。図4・5：筆者作成、図6：1.四国中央市教育委員会、2・4・7.今治市教育委員会、3・6・8.愛媛県教育委員会、5.松山市教育委員会。図7：1・2・3.松山市考古館、4・5.松前町教育委員会、6.愛媛県教育委員会、7・8.松山市教育委員会。図8：白木原1960・中村1995・古瀬2002をもとに作成。図9・10：筆者作成。図11：1.四国中央市教育委員会、2.今治市教育委員会、3・4・5.愛媛県教育委員会、6.松山市教育委員会。図12：1・2.松山市教育委員会、3・4.松山市考古館、5.松前町教育委員会。図13：1・2・3・5・6.愛媛県教育委員会、4.今治市教育委員会。図14：1・2.松山市考古館、3.松前町教育委員会。図15：1.西条市教育委員会、2・3・7.愛媛県教育委員会、4・5・6.松山市考古館。図16：1・3・4.愛媛県教育委員会、2・8.今治市教育委員会、5・6・9.松山市考古館、7.松前町教育委員会。図17・18・19：筆者作成。図20：塚本2013より一部改変して使用。図21：筆者作成。表1：筆者作成。

(2021年4月13日)

愛媛県における古代～中世の土器編年 —今治平野の9世紀から12世紀を中心に—

青木聡志

はじめに

平成24から30年度にかけて愛媛県埋蔵文化財センターによって実施された今治市新谷森ノ前遺跡の2次調査では、2区から古代の掘立柱建物が多数検出された。溝では古代～中世の土器が大量に出土し、緑釉陶器や越州窯青磁など一般の集落ではほとんどみられない陶磁器も確認された。また本遺跡の西に位置する新谷古新谷遺跡(今治市)では、「凡直万呂」銘をもつ刻書土器が発見されており、新谷地域でこの時期の遺跡が継続的に展開していることが判明してきた。その展開は遺構からの出土遺物、とりわけ普遍的に出土する土器の時期が詳細にわかれば、克明に説明しうると考える。ただその時期は外部からの搬入土器や貿易陶磁器の年代観に左右されてきた傾向があり、遺跡で大量に消費されたはずの在地土器について認識が乏しい点が懸念される。

これまで愛媛県における古代～中世の土器編年研究は、複数の研究者によって進められてきた(中野1988、栗田1994、柴田2005、丸毛2008など)。それぞれの研究では土師質土器、須恵器や黒色土器などの在地土器について検討されてはきたものの、各土器の編年が確立しているとは言い難い状況にある。その編年の確立が容易ではない理由として、土師質土器杯や皿の形態的な変化が乏しく、それらの変化を追っていくことが、一括資料が少ないことなどが考えられる。特に本稿で対象とする9世紀から12世紀の土器編年は、一括資料が限られているためこれまで深い議論にはいたらず、結果的に基準資料や編年が積極的に示されることがなかった。しかしながら、新谷地域での発掘成果のような新資料の増加や過去俎上にのぼらなかった資料に着目することにより、編年研究に欠如していた資料の不足を補えるようになってきた。

このような状況を鑑み、まず古代後半～中世前半における今治平野の在地土器の供膳具を抽出して検討し、それらの型式や系統を明らかにしつつ編年の構築を試みる。その結果として在地土器の段階設定をおこない、各段階における基準資料の明示を目的とする。これまでの在地土器の研究では対象器種を限定する傾向にあったが、網羅的に検討することにより、汎用性のある編年と基準資料を提示することを目指したい。

1 研究史と課題・目的

(1) 愛媛県の古代～中世土器の研究史

愛媛県の古代～中世の土器研究は1980年代後半に資料が増加したことを契機に始まった。中野良一氏は遺構内で出土した在地土器と他産地の搬入土器を含む相伴資料を対象に、包含層ある

いは遺構外出土の資料も一部使用しながら、9世紀後半から14世紀前半の編年試案を提示した(中野1988)。口径が大から小へ、器高や高台が高から低へという小型化の傾向、ミガキが密から粗へという簡略化の傾向を前提とし、土師質土器碗の変化について述べた。さらに、土師質土器杯は時期差による形態や法量との関係が明確ではなく、時期が新しくなるにつれて法量の減少化が認められず、大小混在化した状態であると指摘した。そして、9世紀から11世紀は底部の切り離し技法がヘラ切りであり、11世紀後半代には土師質土器碗の一部に糸切りが採用され、13世紀には土師質土器杯と皿の切り離しが完全に糸切りに変化すると指摘し、自説を補強した(中野2002)。さらに八町1号遺跡(今治市)2次調査区の報告書の中で、本遺跡の出土遺物を中心に今治平野における8世紀から16世紀の土器様相を示した(中野1995)。栗田正芳氏は松山平野を対象に、8世紀後半から12世紀の編年案を示し、新たな器形の出現や製作技法の変化から六つの技術的・形態的な画期について指摘した(栗田1994)。柴田圭子氏は松山平野を対象に、編年の柱となる土師質土器杯と皿に型式を設定し、杯と皿の型式変化と共伴資料を組み合わせ、松山平野の中世の編年案を示し(柴田2005)、近年、今治平野の中世前半の編年案も提示した(柴田2020)。柴田氏は、形態的变化が捉えやすい土師質土器の杯を基準に分類し、形態的变化が乏しい小皿や碗は対象に含めず、杯との共伴関係を表した。杯は、平底から体部が大きく開くA類、平底で体部が強く立ち上がり、器高が高いB類の二つに分類し、A類は切り離しにより、回転ヘラ切り(1)と回転糸切り(2)に細分した。さらに、A(2)は口径の法量、底径と口径の比率、体部の開き方によって五つに、B類も口径と器高の法量、体部の開き方、厚みなどによって四つに分けた。そして、今治市域の基準となる資料を集成し、基準資料のうち代表的な遺構に含まれる各型式の変化を追っている。その結果、杯Aは12世紀中頃から14世紀前半まで体部の立ち上がりが強くなりながら口径が縮小化することが明らかになった。

また、柴田氏はこれまで都城の編年観を援用して年代が位置づけられていた7世紀から9世紀の土器を対象に、尾土居窯跡(西条市)の資料との比較や都城あるいは周辺地域の土器様相を参考にして当該時期の道前平野の編年案を提示した(柴田2008)。その編年案では、7世紀まで遡らないものを(1)期、尾土居窯跡資料と併行するものを(2)期、それより下がるが黒色土器供膳具を含まないものを(3)期、黒色土器供膳具を含むものを(4)期として時期が設定された。(3)期になると、須恵器の杯Aが目立ち、(2)期と比較して体部が大きく開く点、須恵器杯B蓋は扁平な器形が多くなる点、須恵器杯Bは(2)期に遡りうるものを除くと多くない点、土師質土器供膳具が全くといっていいほど認められない点を示した。さらに柴田氏はこの編年案に長沢元瀬遺跡(今治市)の資料を加え、古谷仙田岡遺跡(今治市)と古谷横枕遺跡(今治市)の良好な出土状況の資料の年代を位置付けた(柴田2020)。

丸毛のぞみ氏は松山平野と今治平野の土師質土器杯を対象に、古代末～中世前半の編年案を提示し、両平野の地域色を明らかにした(丸毛2008)。土師質土器杯を、高台をもつI類と無高台(平底)のII類に大別し、I類は輪高台のIA類、平高台(円盤状高台)のIB類に、II類は体部の深いIIA類、浅いIIB類に細分し、出土量の多いIIB類を中心に分析した。その上で、遺構か

ら出土した資料を一つの分析の単位とし、これらの資料を相互に比較し、口径に対する底径の比率や体部の開き方、口径に対する器高の比率に加え、底部切り離しの方法や体部の調整といった製作技法にも着目してⅡB類を細分した。そして、各型式の共通点と相違点を比較し、時間的変遷と系譜関係を読み取り、遺構での伴出関係から時期区分を設定した。Ⅳ期まで両平野で同じ系譜を辿っていた杯ⅡBは、Ⅴ期に系譜分化がみられ、Ⅵ期以降は平野ごとで展開し、両平野で杯ⅡBの形態が全く異なることを指摘した。

(2) 研究史の課題

中野氏や栗田氏は在地土器全般を対象とし、資料的な制約があるなか当該時期の土器の変化の方向性について論じ、中野氏は底部の切り離し技法がヘラ切りから糸切りへ変化する現象に時期差がみられることを明らかにした。しかしながら、両者の研究では、基本的な分類案が提示されておらず、広い時期幅をもつ包含層資料も対象として、それらの検討が不十分なまま特定の器種を用いている点は否めない。中野氏は土器の変化について、粗雑化や縮小化を前提に新旧を論じているが、その方向性の正しさも検証すべき課題である。この粗雑化や縮小化は、瓦器碗や吉備型土師器碗などの変化を参照して論じられた可能性が高いと推察されるが、それをそのまま愛媛県の在地土器の変化に当てはめるには躊躇を覚える。また、松山平野と対する地域差が示されている以上、今治平野での編年案を提示する必要がある。一方、丸毛氏や柴田氏は土師質土器杯を中心に型式を設定し、組列を組みあげて編年を示した。その結果、時期が新しくなるにつれて口縁部の立ち上がりが強くなって箱形に近づく現象や、口径の縮小化などの共通した見解が得られた。丸毛氏は古代～中世にかけて認められる平底で浅い土師質土器杯を大きくⅡB類として一系統で捉えているが、古代後半の土師質土器杯には多様な形態が確認されるため、一つの系統で捉えるのは難しく、9世紀からの杯の系譜を再検討する必要がある。柴田氏は形態的な変化が少ない土師質土器の小皿や少数の碗については対象に含めていないが、形態的变化が乏しい小皿でも、製作技法に注目すれば、時期差あるいは地域色を示す可能性がある。そして、小皿同様、土師質土器碗、黒色土器や須恵器杯といった在地土器にも配慮し、それらの特徴とその変化を追うことは多器種にわたる編年案を構築する上でも重要である。

(3) 本稿の目的

本稿ではこうした課題を踏まえ、古代～中世の土器の変化を明らかにするために特定の器種に絞らず在地土器全体を見据え、型式分類をおこない、それぞれの変化の方向性を明らかにすることを念頭におく。そこで、以下、最初に土師質土器、須恵器や黒色土器の供膳具である杯、皿、碗の分類を試みる。そして、一括資料を含む良好な出土状況を示す資料群を一つの分析の単位とし、在地土器の組み合わせから様相把握をおこなう。その後、在地土器の出現や消長を指標として時期区分をおこない、組み合わせの時期を共伴した搬入土器から推定し、古代～中世、すなわち9世紀から13世紀前半の編年案を提示したい¹⁾。

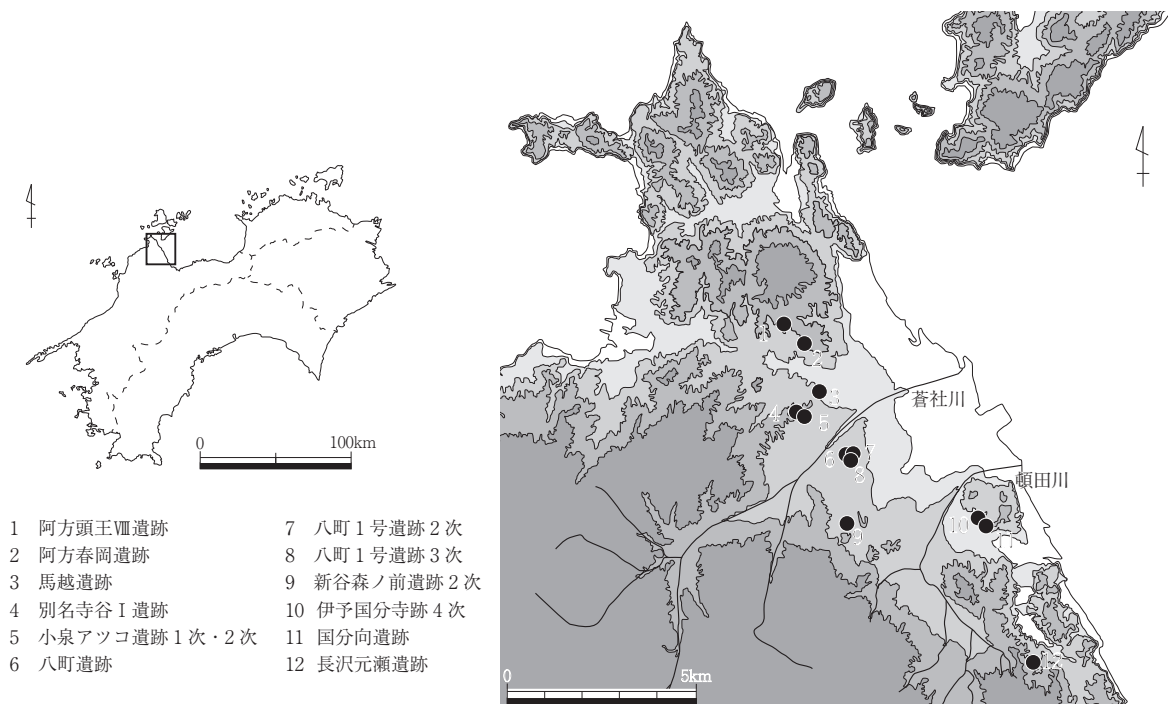


図1 対象遺跡位置図

2 対象地域

愛媛県は四国の西北部に位置し、東予、中予、南予の三つの地域に区分される。本稿で対象とするのは東予の西側に位置する今治平野である(図1)。今治平野は蒼社川や頓田川をはじめとする河川によって形成された沖積平野であり、燧灘に面している。今治平野は古代には越智郡と呼ばれ、国府や国分寺・国分尼寺が置かれた伊予国の政治・経済・文化の中心地である。良好な資料が出土している遺跡と遺構をまとめたのが表1・2である。その中でも阿方春岡遺跡²⁾、阿方頭王Ⅷ遺跡、伊予国分寺跡4次^{3) 4)}、馬越遺跡、小泉アツコ遺跡第1次調査・第2次調査(以下では1次・2次と表す)⁵⁾、国分向遺跡、長沢元瀬遺跡⁶⁾、新谷森ノ前遺跡2次⁷⁾、八町遺跡⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾、八町1号遺跡2次調査区(以下では2次と表す)、八町1号遺跡3次調査区(以下では3次と表す)、別名寺谷Ⅰ遺跡(いずれも今治市)から出土した資料を対象とする(図12～39)¹²⁾。

3 在地土器の分類

(1) 土師質土器杯(図2・3)

杯は底部の切り離し技法から大きく二つに分類される。これは、これまでの先行研究によって、底部の切り離し技法が時期差を表すことが示され(中野1988、丸毛2008など)、形態的变化の乏しい土師質土器のなかでは分類しやすいためである。

A類：底部の切り離しが回転ヘラ切りである。

B類：底部の切り離しが回転糸切りである。

A類 器形からa～fの6分類を設定し、法量や形態的特徴からさらに細分した(図2)。

表2 基準資料一覧その2

遺跡	遺構	土師質土器					須恵器			黒色土器	赤色塗彩	緑釉陶器	灰釉陶器	畿内系土師器	畿内系黒色土器	吉備型土師器	和泉型瓦器	楠葉型瓦器	貿易陶磁器	篠窯須恵器	東播系須恵器	その他
		杯 A	杯 B	皿 A	皿 B	碗 煮沸具	杯	高台付杯	皿	蓋												
国分向遺跡	SE1	○								○												
高橋岡ノ端遺跡	SD05		○		○	○																
	SP139				○	○																
	SP169		○			○																
	SK-②-08		○		○												○					
高橋湯ノ窪遺跡Ⅱ	SB03	○																				
	SB04	○																				
	SK05		○		○												○		○			○
且遺跡	9区 SD06	○	○		○	○										○						
長沢元瀬遺跡	SB04			○			○	○		○												
	SD01	○		○		○	○	○	○	○	○											
新谷森ノ前遺跡2次	SX01		○		○											○			○			○
登畑遺跡	9区 SD01		○		○	○										○			○			○
八町遺跡	5調査区1号井戸		○		○											○			○			
	5調査区1号墳墓		○		○											○			○			
	5調査区5号溝状遺構		○		○											○			○			
	5調査区11号土坑状遺構		○		○											○			○			
	7調査区3号井戸		○		○											○			○			
	7調査区4号井戸		○		○											○			○			
	7調査区2号土坑状遺構	○			○					○									○			
	7調査区13号土坑状遺構		○		○												○		○			
7調査区124号柱穴		○		○																		
八町1号遺跡2次調査区	SK1	○	○	○	○	○									○	○		○				
	SK2	○	○	○	○										○	○		○				
	SK3	○	○	○	○	○									○	○		○				○
	SK4	○	○	○	○										○	○		○				
	SK5	○	○	○	○										○	○		○				
	SK6	○	○	○	○										○	○		○				○
	SP11	○	○	○	○										○	○		○				
八町1号遺跡3次調査区	SK14		○		○											○						○
	SK15		○		○	○										○						瓦器杯
	SX01		○		○											○			○			
	SK19						○	○	○	○												
八町1号遺跡4次調査区	SK05		○		○																	
	SK08		○		○																	
	SK10		○		○											○						
八町ヒル田遺跡	SB01				○																	
	SK04		○		○											○						
	SP01		○		○																	
別名寺谷遺跡	SE01	○		○		○	○			○									○			
	SK21	○								○												
	SP42		○			○																瓦器杯
別名寺谷Ⅰ遺跡	DAN01	○				○					○	○										
	DAN02	○				○					○	○										
	SD08	○		○		○					○	○										
	1号土器溜まり	○		○						○												
2号土器溜まり	○								○													
山口古屋敷遺跡	SK19		○												○	○						
	SK24		○																			瓦器杯
	SK25		○		○		○												○			瓦器杯
	SK30		○		○																	瓦器杯
	SP39		○		○										○							瓦器杯
	SP42		○		○																	瓦器杯
四村日本遺跡	I-SK01	○			○	○			○	○												

(柴田 2020 を参考に筆者加筆)

a: 口径が底径より大きく、口径と底径の比率が2:1程度で、器高が高く3.5cm以上である。口縁部は外方へ直線的に開くものと、口縁部の下半がやや丸みをおびたのち、直線的に開くものがみられる。胎土は比較的精良であり、写真1の例のように、器の内外面が白色・赤色双方を発色している。この色調は胎土に起因するものではなく、赤色の土器についてはいわゆる赤色塗彩土師器のような色調でもない。この白色化・赤色化の要因としては、焼成方法に何らかの工夫が施されているか、あるいは化粧土の使用が想定される。このような土器を白色系・赤色系土器と呼んでおく。

b：口径と底径の比率は3：2程度であり、aより底径が大きく、器高が低い。口縁部は直線的に外方へ開き、なかには弱く外反するものも認められる。5分類に細分した。

b1：器高3.0cm前後、口径12.0～13.0cm前後である。白色系・赤色系土器であり、胎土が比較的精良である。

b2：器高が3.0cm未満のものも確認されるが、ほとんどが3.0cm以上、口径は12.0～13.0cm前後である。胎土がb1よりも粗い。

b3：b2よりも口径が縮小し、11.0cm前後、器高は3.0cm前後を測る。

b4：b3より口径が拡大し、15.0cm前後である。器高も拡大し、3.0～4.0cm前後である。

b5：b3より口径と器高がやや拡大し、口径12.5cm前後、器高3.5cm前後であり、外面には顕著なロクロ目が観察される。

c：口縁部下半と上半にナデ調整が大きく2段入る。口縁部下半のナデ調整は、底部と体部の境に施され、成形時の回転ナデ調整や底部切り離し後に施される強いナデ調整によって窪んでいるものも認められる。a、bとの大きな違いはこの強いナデ調整である。口縁部は内湾気味に開き、口縁部中程がやや張るものと張らないものがみられる。口縁部上半が短く外反もしくは屈曲する。2分類に細分した。

c1：器高3.0cm以上、口径13.0cm前後を測る。白色系・赤色系土器であり、胎土は比較的精良である。

c2：器高3.0cm以上、口径12.5cm前後であり、c1よりも胎土が粗い。

d：cと同様に、口縁部下半と上半にナデ調整が大きく2段入る。口縁部は内湾気味に開くが、cとは異なり、口縁上半は外反せず、内湾もしくは上方に立ち上がる。多段ナデ調整により内湾気味に開く個体もあり、胎土は粗い。2分類に細分した。



写真1 白色系・赤色系土器
(阿方春岡遺跡出土)

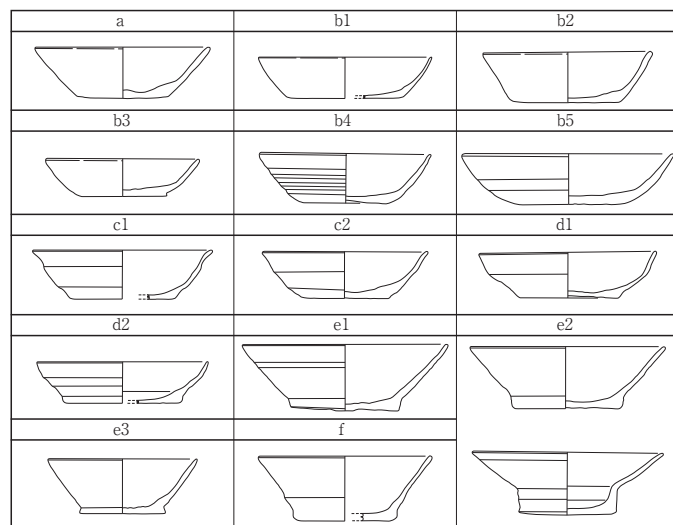


図2 土師質土器杯A類分類図

d1：口径 13.0cm 前後、器高 3.0cm 以上である。

d2：口径 12.5cm 前後、器高 3.0cm 前後である。

e：底部が円盤状高台であり、高台の角が垂直気味に立ち上がる。口縁部は外方へ直線的に開き、口縁部上半で外に屈曲する形態などがある。図 2 でも示しているように、e 類は底部の形態が多様であり、見込みが大きく窪んでいるもの、高台の高さが高いもの、底部が分厚いものなどが確認される。e 類は底部形態で 1、2、3 や a、b、c として細分すべきである。しかし、完形の資料が少なく、大半が破片資料であり、土師質土器杯の他の分類では全体形が判明している形態を重視して分類しているため、それらの基準に合わせた。従って、底部形態で細分せず、円盤状高台を呈する器形を全てひとくくりにして扱い、全体の器形から 3 分類に細分した¹³⁾。

e1：口径 14.0～15.0cm 以上、器高 4.5cm 以上である。白色系・赤色系土器であり、胎土が比較的精良である。

e2：口径 12.0～15.0cm 以上、器高 4.5cm 以上である。胎土はやや粗い。

e3：2 よりも口径と器高が縮小し、口径 12.0cm 未満、器高 4.0cm 前後を測る。

f：底部が分厚いが、e のような明瞭な角をもたない。口径と底径の大きさが近く、器高が高い。口縁部は丸みを帯びながら開くことはなく、直線的に外方へ開き、立ち上がりやや強い。

B 類 A 類同様に器形から a～c の 3 分類を設定し、立ち上がりの角度や法量などからさらに細分した¹⁴⁾(図 3)。

a：口縁部は直線的に大きく外へ開き、外反するものや体部下半がやや丸みを帯びる個体もみられる。口縁部はほぼ平滑であり、回転台成形による窪みがほとんど目立たない。先行研究では、時期が新しくなるにつれて口縁部の立ち上がりが強くなり、全体形が箱形になっていくことが指摘されており(柴田 2020、丸毛 2008)、それに従って立ち上がりの角度によって 3 分類に細分した。法量については細分することが難しく、後述するように、時期が新しくなるにつれて口径の縮小化が認められるものの、対象とした時期では明確な基準を設定できない。

a1：口縁部の立ち上がりの角度が 40° 前後である。

a2：口縁部の立ち上がりの角度が 50° 前後であり、1 よりも立ち上がりが強い。

a3：口縁部の立ち上がりの角度が 60° 前後であり、2 よりも立ち上がり強く、箱型に近づく。

b：器形は a とほぼ同様であるが、外面に顕著なロクロ目がみられ、特に口縁部下半に認められる。口縁端部がやや窪み、尖り気味に収まるのも確認される。口縁部の立ち上がりの角度は 40～50° 程度である。

c：器壁が a や b よりもやや厚く、口縁部の立ち上がりが強い。口縁部上半には強いナデ調整が施され、尖り気

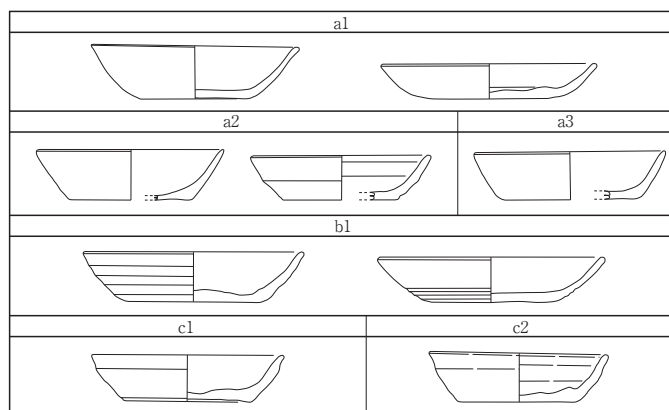


図 3 土師質土器杯 B 類分類図

味に収まる。2分類に細分した。

c1：口径 13.0cm 以上である。

c2：口径 13.0cm 未満である。

(2) 土師質土器皿 (図 4)

土師質土器杯同様、底部の切り離し技法によって二つに分類した。

A 類：底部の切り離しが回転ヘラ切りである。

B 類：底部の切り離しが回転糸切りである。

A 類 器形から a、b の 2 分類を設定し、さらに法量や形態的特徴からそれぞれ細分した。

a：口縁部中程もしくは全体にナデ調整が施され、口縁部は外反気味に開く。なかには強いナデ調整が施され、口縁部が大きく外反する個体もある。全体形は扁平な器形であり、器高が 2.0cm 未満である。3 分類に細分した。

a1：口径 14.0cm 前後であり、なかには口縁部下半にナデ調整が施される。白色系・赤色系土器であり、胎土が比較的精良である。

a2：口径 13.0cm 前後であり、口縁部中程もしくは全体に施されるナデ調整が 1 よりも弱くなるため外反度合いが弱くなり、体部から口縁端部にかけて緩やかに外反する。白色系・赤色系土器である。

a3：口径 13.0cm 前後であり、白色系・赤色系土器ではない。

b：a とは異なり、口縁部中程に強いナデ調整が施されない。口縁部上半を中心にナデ調整が施され、下半に施されるものも認められる。口縁部は直線的に開くものと外反するものがある。4 分類に細分した。

b1：器高 2.0cm 以上、口径 12.0cm 前後を測る。白色系・赤色系土器であり、胎土が比較的精良である。

b2：器高 2.0cm 以上、口径 11.0～12.5cm 前後であり、胎土が 1 よりやや粗い。

b3：器高 2.0cm 前後、口径 10.0～11.0cm 前後であり、2 よりも口径が縮小している。

b4：器高 2.0cm 未満、口径 9.0cm 前後を測り、3 よりも縮小している。b4 は B 類とほぼ同様の形態であるが、B 類と比べて出土量が非常に少なく、細分しても時期差を表し難いと判断したため、細分していない。

B 類 器形や調整により、a～e の 5 分類を設定した¹⁵⁾。B 類はいずれも口径 10.0cm 未満、器高 2.0cm 未満である。

a：口縁部は外へ直線的に開き、体部下半が丸みを帯びる個体もみられる。

b：器形は a とほぼ同じであるが、口縁部の立ち上がりが a より強い。

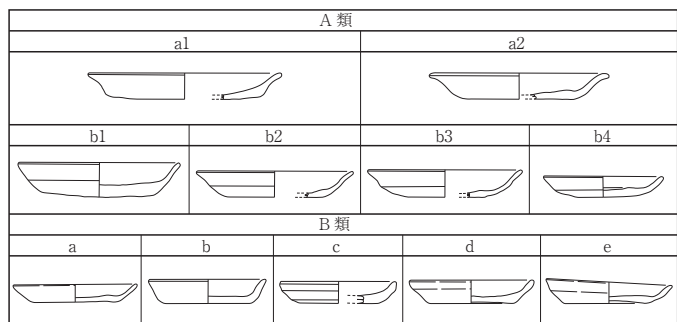


図 4 土師質土器皿分類図

c：口縁部中程に強い回転ナデ調整が施され、なかには口縁上半がやや肥厚している。口縁部は直線的に外へ開くものと大きく外反するものが認められる。

d：口縁部下半に強い回転ナデ調整が施され、口縁部は直線的に外へ開く。

e：口縁部上半と下半に強いナデ調整が施される。口縁部は丸みを帯びながら開くものや、直線的に外方へ開いたのち、口縁中程で角度を変えて上方へやや立ち上がるものが多い。

(3) 土師質土器碗 (図 5)

土師質土器碗は完形やそれに復元できるものが少なく、破片資料が多い。その中でも底部片が多数確認される。従って、土師質土器杯や皿のように全体的な器形で分類せず、多数認められる底部の形態で分類し、次に高台の高さ、口縁部の開き方によって細分した。

底部形態

A：底部の高台の断面形態が三角形である。

B：底部の高台の断面形態が四角形もしくは台形である。

C：底部の高台の断面形態が細長い長方形であり、ハの字状に開く器形が多い。

高台の高さ

a：高台の高さが 0.5cm 以下である。

b：高台の高さが 0.6～1.0cm 前後を測る。

c：高台の高さが 1.5cm 以上である。

口縁部の開き方

1：口縁部は下半から丸みを帯びながら外へ開く。

2：口縁部は直線的に外へ開く。

3：口縁部は下半が外へ若干張り、深碗の形態である。

底部形態		
A	B	C
高台の高さ		
a	b	c
口縁部の開き方		
1	2	3

図 5 土師質土器碗分類図

(4) 須恵器杯 (図 6)

器形から 2 分類を設定した。

A：底部から体部の立ち上がりの角度が 60° 程度であり、口縁部の立ち上がりが強い。

B：底部から体部の立ち上がりの角度が 40～50° 程度であり、口縁部は A よりも大きく開く。焼成がやや甘いものが目立ち、色調は青灰色ではなく、灰白色が多い。

杯	
A	B
高台付杯	
A	B

図 6 須恵器分類図

(5) 須恵器高台付杯 (図 6)

須恵器杯同様、器形から 2 分類を設定した。

A：底部から体部の立ち上がりの角度が 60° 程度であり、口縁部の立ち上がり強い。

B：底部から体部の立ち上がりの角度が 40～50° 程度であり、口縁部は A よりも大きく外方へ開く。









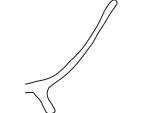

底部形態			
A	B	C	D
			
高台の高さ		高台の高さ	
a  0.5cm 前後以下		b  1.0cm 前後	
口縁部の開き方			
1	2	3	4
			

図 7 黒色土器分類図

(6) 黒色土器 (内黒)¹⁶⁾ (図 7)

黒色土器は完形や、それに復元できるものが少なく、破片資料が多い。土師質土器碗と同様に、多数出土する底部の形態で分類し、次に高台の高さ、口縁部の開き方によって細分した。

底部形態

A：底部が平底である。

B：底部の高台の断面形態が三角形である。

C：底部の高台の断面形態が四角形もしくは台形である。

D：底部の高台の断面形態が細長い長方形であり、ハの字に開く形態が多い。

高台の高さ

a：高台の高さが 0.5cm 前後である。

b：高台の高さが 1.0cm 前後である。

口縁部の開き方

1：口縁部は直線的に外へ開く。

2：口縁部は直線的に外へ開き、1 よりも立ち上がり強い。

3：口縁部は緩やかに丸みを帯びながら外へ開く。

4：口縁部は下半が外へ若干張り、深碗の形態である。

4 基準資料と組み合わせ

今回対象とした遺構から出土した資料をまとめたのが表 3 である。出土量の多い土師質土器杯と皿、須恵器に注目すると、以下の 10 の組み合わせが抽出でき、これらをパターン 1～10 と呼称する。ここでは、パターン 1～10 に該当する基準資料と共伴資料を示す。

パターン 1：長沢元瀬遺跡 SD01 出土品を指標とする。杯 Aa、皿 Aa1、須恵器杯 A、B、高台付杯 A、B が共伴する。本遺構からは赤色塗彩土師器も出土している。

パターン 2：阿方春岡遺跡 SD01、同遺跡 SX01 出土品を指標とする。杯 Aa、bl、cl、el、皿

Aa1、b1、須恵器杯 B が共伴する。緑釉陶器と灰釉陶器が出土している。

パターン 3：別名寺谷 I 遺跡 1 号土器溜まり出土品を指標とする。杯 Aa、b1、c1、d1、e1、皿 Aa2、b2 が共伴する。

パターン 4：別名寺谷 I 遺跡 SD08、同遺跡 2 号土器溜まり出土品を指標とする。杯 Ab2、c2、d1、d2、e2、皿 Aa3、b2、須恵器杯 B が共伴する。緑釉陶器と灰釉陶器が出土している。

パターン 5：八町遺跡 7 調査区 2 号土坑状遺構、国分向遺跡 SE01 出土品を指標とする。杯 Ab2、e2、f が共伴する。越州窯青磁が出土している。

パターン 6：伊予国分寺跡 4 次 4 区 11 層、同遺跡 12 層、阿方頭王 VIII 遺跡 DAN01 出土品を指標とする。杯 Ab2、b3、c2、d2、e2、e3、f、皿 Ab3 が共伴する。畿内系土師器皿や畿内系黒色土器、篠窯須恵器などが出土している。

パターン 7：馬越遺跡 6 区 SE1、八町 1 号遺跡 2 次 SK2 出土品などを指標とする。杯 Ab4、b5、Ba1、a2、b、c1、皿 Ab4、Ba、b、c、e が共伴する。和泉型瓦器椀、楠葉型瓦器椀、吉備型土師器椀などがみられる。

パターン 8：八町遺跡 7 調査区 4 号井戸、同遺跡 7 調査区 13 号土坑状遺構出土品などを指標とする。杯 Ba1、a2、a3、b、c1、皿 Ba、b、c、d、e が共伴する。和泉型瓦器椀、白磁、龍泉窯青磁が出土している。

パターン 9：八町 1 号遺跡 3 次 SX01、新谷森ノ前遺跡 2 次 SX01 出土品などを指標とする。杯 Ba1、a2、a3、b、c1、皿 Ba、b、d が共伴する。和泉型瓦器椀、東播系須恵器、白磁が出土している。

パターン 10：八町遺跡 5 調査区 1 号墳墓、八町遺跡 3 次 SK15 出土品を指標とする。杯 Ba2、a3、c2、皿 Ba、b が共伴する。和泉型瓦器椀が出土している。

5 型式組列と暦年代

(1) 型式組列

上記で示した組み合わせの変化の方向性について検討する。すでに先行研究で底部の切り離し技法において、ヘラ切りから糸切りへの変化が時期差を表し、ヘラ切りが古く、糸切りが新しいことが明らかにされている(中野 1988、2002、丸毛 2008)。よって、ヘラ切りのみにより構成されるパターン 1・2・3・4・5 →ヘラ切りと糸切りが共伴するパターン 7 →糸切りのみにより構成

表 4 組み合わせとパターン

	土師質土器																								須恵器											
	杯 A												杯 B				皿 A				皿 B				杯	高台付										
	a	b1	b2	b3	b4	b5	c1	c2	d1	d2	e1	e2	e3	f	a1	a2	a3	b	c1	c2	a1	a2	a3	b1	b2	b3	b4	a	b	c	d	e	A	B	A	B
パターン 1	■																																			
パターン 2	■	■																																		
パターン 3	■																																			
パターン 4																																				
パターン 5																																				
パターン 6																																				
パターン 7																																				
パターン 8																																				
パターン 9																																				
パターン 10																																				

されるパターン 8・9・10 への変遷が考えられる。

まずパターン 1～6 の変化の方向性を明らかにする。最初に土師質土器杯から検討すると、白色系・赤色系土器の有無を時期差と仮定するならば、パターン 1・2→3→4・5・6 あるいは 4・5・6→3→1・2 への変化が考えられる。杯 Ab2 と Ab3 および杯 Ae2 と Ae3 では口径に差異が認められ、大→小もしくは小→大へと変化するならば、パターン 4・5→6 と 6→4・5 が想定される。杯 Af は杯 Ae2 の底部が分厚くなり、高台を持たなくなった器形と考えられることから、パターン 4→5・6 の変化が考えられる。つまり、杯 Ab2、Ab3、Ae2、Ae3、Af から、パターン 4→5→6 を読み取れる。従って、土師質土器杯では 1・2→3→4→5→6 あるいは 4→5→6→3→1・2 への変化を指摘できる。次に、土師質土器皿から検討していく。杯同様に、白色系・赤色系土器の有無を時期差と仮定するならば、皿 Aa では、パターン 1・2→3 あるいは 3→1・2 が考えられ、皿 Ab では、パターン 2→3・4・6・7 あるいは 3・4・6・7→2 の変化が想定される。よって、パターン 1・2→3・4・6→7 あるいは 7→3・4・6→1・2 を指摘できる。皿 Ab は口径に大小が認められ、大→小あるいは小→大へと変化するならば、パターン 2→3・4→6→7 あるいは 7→6→3・4→2 への変化が考えられる。パターン 7 では底部の切り離し技法において、糸切りが共伴し、パターン 1～6 より新しいため、皿 Ab はパターン 2→3・4→6→7 への変化が考えられる。皿 Aa も法量に大小が認められ、時期差を表しているとするならば、パターン 1→2・3 もしくはパターン 2・3→1 への変化が想定される。白色系・赤色系土器の有無を加味すると、皿 Aa はパターン 1→2→3 への変化を指摘できる。従って、皿からはパターン 1→2→3→4→6→7 へと変遷することが想定される。以上の検討から、パターン 1～6 は、1→2→3→4→5→6 への変化が考えられる。

次に、パターン 8～10 の変化の方向性を明らかにする。まず土師質土器杯から検討すると、杯 Bc は、Bc1 と Bc2 の口径に差異があることから、パターン 8・9→10 もしくは 10→8・9 が想定される。次に、土師質土器皿では、皿 Ba と皿 Bb がみられるパターン 8～10、皿 Bc、Be がみられるパターン 8、皿 Bd がみられるパターン 8～10 がある。これらでは前後の時期を想定できない。しかしながら、糸切りが確認されるパターン 7 も含めて、パターン 8～10 の前後関係を明らかにするならば、皿 Ba と皿 Bb がみられるパターン 7～10、皿 Bc と皿 Be がみられるパターン 7、8、皿 Bd がみられるパターン 8～10 に分けられ、パターン 7→8、パターン 8→7 とパターン 8→9・10、パターン 9・10→8 が想定される。すでにパターン 7→8・9・10 へと移り変わることが判明しているため、パターン 7→8→9・10 の変化が想定される。以上の検討を踏まえると、パターン 8～10 は、パターン 8→9→10 への変化が考えられる。

以上より、パターン 1→2→3→4→5→6→7→8→9→10 へ変遷することが考えられ、その変化の方向性を示したのが表 4 である。

(2) 暦年代

パターン 1～10 の変遷を、パターン 1→2→3→4→5→6→7→8→9→10 へと変化する

ことを示した。ここでは、それぞれのパターンの暦年代について検証する。年代は紀年銘資料などから判断することができないため、年代を推定できる搬入土器から比定した¹⁷⁾(表5)。

パターン1では、長沢元瀬遺跡 SD01 において赤色塗彩土師器が出土している。山内氏によると、赤色塗彩土師器は8世紀初頭～9世紀前半にかけて認められ、8世紀中葉～後半に出土量がピークを迎えるとされる(山内 2018)。加えて、本遺構からは8世紀後半ごろの須恵器が多量に出土している点、緑釉陶器が出土していない点、黒色土器が確認される点から、8世紀後半～9世紀前半の年代が想定される。パターン2では、阿方春岡遺跡 SD01 からⅡ期、Ⅲ期に位置付けられる緑釉陶器や K90 頃の灰釉陶器が相伴していることから9世紀後半に比定される。パターン3の別名寺谷Ⅰ遺跡1号土器溜まりでは、搬入土器は出土していない。しかし、パターン2とパターン4の両者の特徴があることから、9

世紀末～10世紀初頭ごろと考えられる。パターン4では、別名寺谷Ⅰ遺跡 SD08 においてⅣ期の緑釉陶器や O53 の灰釉陶器が相伴し、10世紀前半に位置付けられる。パターン5では、八町遺跡7調査区2号土坑状遺構から越州窯青磁碗Ⅰ-2類が出土している。また、パターン4とパターン6の両者の特徴が確認されることから、10世紀後半に位置付けられる。パターン6では、伊予国分寺跡4次11層において11世紀前半頃に所属する、ての字口縁皿である畿内系土師器や、西山1号窯に比定される篠窯須恵器などが出土している。10世紀末

表5 年代推定の時期根拠

		赤色塗彩	緑釉陶器	灰釉陶器	畿内系土師器	畿内系黒色土器	吉備型土師器	和泉型瓦器	楠葉型瓦器	貿易陶磁器	篠窯須恵器	東播系須恵器
パターン1	長沢元瀬遺跡 SD01	○										
パターン2	阿方春岡遺跡 SD01		Ⅱ～Ⅲ期	K90							西山1号窯?	
	阿方春岡遺跡 SX01		Ⅱ期?	K90								
パターン3	別名寺谷Ⅰ遺跡1号土器溜まり											
パターン4	別名寺谷Ⅰ遺跡 SD08			Ⅳ期	O53							
パターン5	別名寺谷Ⅰ遺跡2号土器溜まり			Ⅲ～Ⅳ期								
	八町遺跡7調査区2号土坑状遺構									越州窯系青磁碗Ⅰ-2類		
パターン6	国分向遺跡 SE01											
	伊予国分寺跡4次4区11層					畿内系Ⅲ類、Ⅵ期				白磁碗Ⅵ類		
パターン7	伊予国分寺跡4次4区12層				11世紀前半頃						西山1号窯?	
	阿方頭王Ⅶ遺跡 DAN02											
パターン8	馬越遺跡6区 SE1				12世紀初頭頃		I-2～3期		I-2期	白磁碗Ⅱ類		
	八町1号遺跡2次調査区 SK1						I-3期	Ⅱ-2期		白磁碗Ⅳ類ⅢⅦ類		
	八町1号遺跡2次調査区 SK2						I-3期	Ⅱ-2期		白磁碗Ⅳ類ⅢⅦ類		
	八町1号遺跡2次調査区 SP11							Ⅱ-2期				
パターン9	八町遺跡7調査区4号井戸							Ⅱ-3期				
	八町遺跡5調査区5号土坑状遺構							Ⅱ-3期				
	八町遺跡7調査区13号土坑状遺構							Ⅱ-3期				
パターン10	小泉アツコ遺跡第1次調査 SQ01									龍泉窯青磁碗Ⅰ-2b類		
	小泉アツコ遺跡第2次調査 SP105							Ⅱ-3～Ⅲ-1期				
	八町1号遺跡3次調査区 SX01							Ⅲ-1期				
	新谷森ノ前遺跡2次 SX01							Ⅲ-1期		白磁碗Ⅳ類		B2a
	小泉アツコ遺跡第2次調査 SP72											
パターン11	馬越遺跡12区 SK11							Ⅲ-1～2期		龍泉窯青磁碗Ⅱ類		
	八町1号遺跡3次調査 SK15							Ⅲ-2期				
パターン12	八町遺跡5調査区1号墳墓							Ⅲ-2期				

～11世紀と考えられる。パターン7では、馬越遺跡6区SE1や八町1号遺跡2次SK1において12世紀初頭頃に位置付けられる、ての字口縁皿である畿内系土師器やI-2～II期に位置付けられる吉備型土師器、I-2期に所属する楠葉型瓦器碗、II-2期に比定される和泉型瓦器碗などが共伴するため、12世紀前半と考えられる。パターン8では、八町遺跡7調査区4号井戸や小泉アツコ遺跡1次SQ01においてII-3期に位置付けられる和泉型瓦器碗や龍泉窯青磁碗I-2b類が出土し、12世紀

年代	組み合わせ	時期区分	遺跡・遺構
800	パターン1	I期古	長沢元瀬遺跡SD01
		I期新	
850	パターン2	II期	阿方春岡遺跡SD01 阿方春岡遺跡SX01
900	パターン3	III期古	別名寺谷I遺跡1号土器溜まり 別名寺谷I遺跡SD08
	パターン4	III期中	
950	パターン5	III期新	八町遺跡7調査区2号土坑状遺構 国分向遺跡SE01
		パターン6	IV期古
1000	パターン6	IV期新	阿方頭王VIII遺跡DAN01
1050		IV期新	
1100	パターン7	V期古	馬越遺跡6区SE1 八町1号遺跡2次調査区SK2 八町1号遺跡2次調査区SK1 八町1号遺跡2次調査区SP11
1150	パターン8	V期中	八町遺跡5調査区5号土坑状遺構 八町遺跡7調査区4号井戸 八町遺跡7調査区13号土坑状遺構 小泉アツコ遺跡第1次調査SQ01
1200	パターン9	V期新	八町1号遺跡3次調査区SX01 小泉アツコ遺跡第2次調査SP105 新谷森ノ前遺跡2次SX01 小泉アツコ遺跡第2次調査SF72
1250	パターン10	VI期新	馬越遺跡12区SK11 八町1号遺跡3次調査区SK15
			八町遺跡5調査区1号墳墓

図8 時期区分と絶対年代

後葉に比定される。パターン9では、新谷森ノ前遺跡2次SX01からIII-1期に位置付けられる和泉型瓦器碗や、白磁碗IV類などが出土し、12世紀末～13世紀第1四半に比定される。パターン10では、八町遺跡5調査区1号墳墓においてIII-2～3期の和泉型瓦器碗や龍泉窯青磁碗II類があり、13世紀第2四半～第3四半世紀と考えられる。

すなわち、パターン1～10への変化は、共伴した搬入土器の暦年代とも矛盾がない。

6 時期区分と編年案

(1) 時期区分

10のパターンは、土師質土器杯・皿の新たな器種の出現、消長を指標とし、I～VI期に区分できる(図8)。上記までの検討をもとにした編年案が図9～11である。ここではそれぞれの時期の特徴について述べる。

I期：パターン1が該当する。パターン1では、須恵器杯においてA→Bの変化を追うことが可能であり、古段階と新段階の2時期に分けられる。古段階は須恵器杯A、高台付杯A、B、新段階は土師質土器杯Aa、須恵器杯B、黒色土器A、Ca1が該当すると考えられる。その理由は、愛媛県では黒色土器が須恵器杯A、高台付杯A、Bと共伴する例がない点、黒色土器は9世紀以降に確認される点、土師質土器杯Aaが須恵器杯Aよりも杯Bに類似している点があげられる。高台付杯Bは新段階にも含まれる可能性があるが、資料が少ないため、現時点では古段階に含めておいた方が妥当であると考えられる¹⁸⁾。なお、須恵器杯Bの器形に相似する赤色塗彩土師器は新段階まで残る可能性がある。

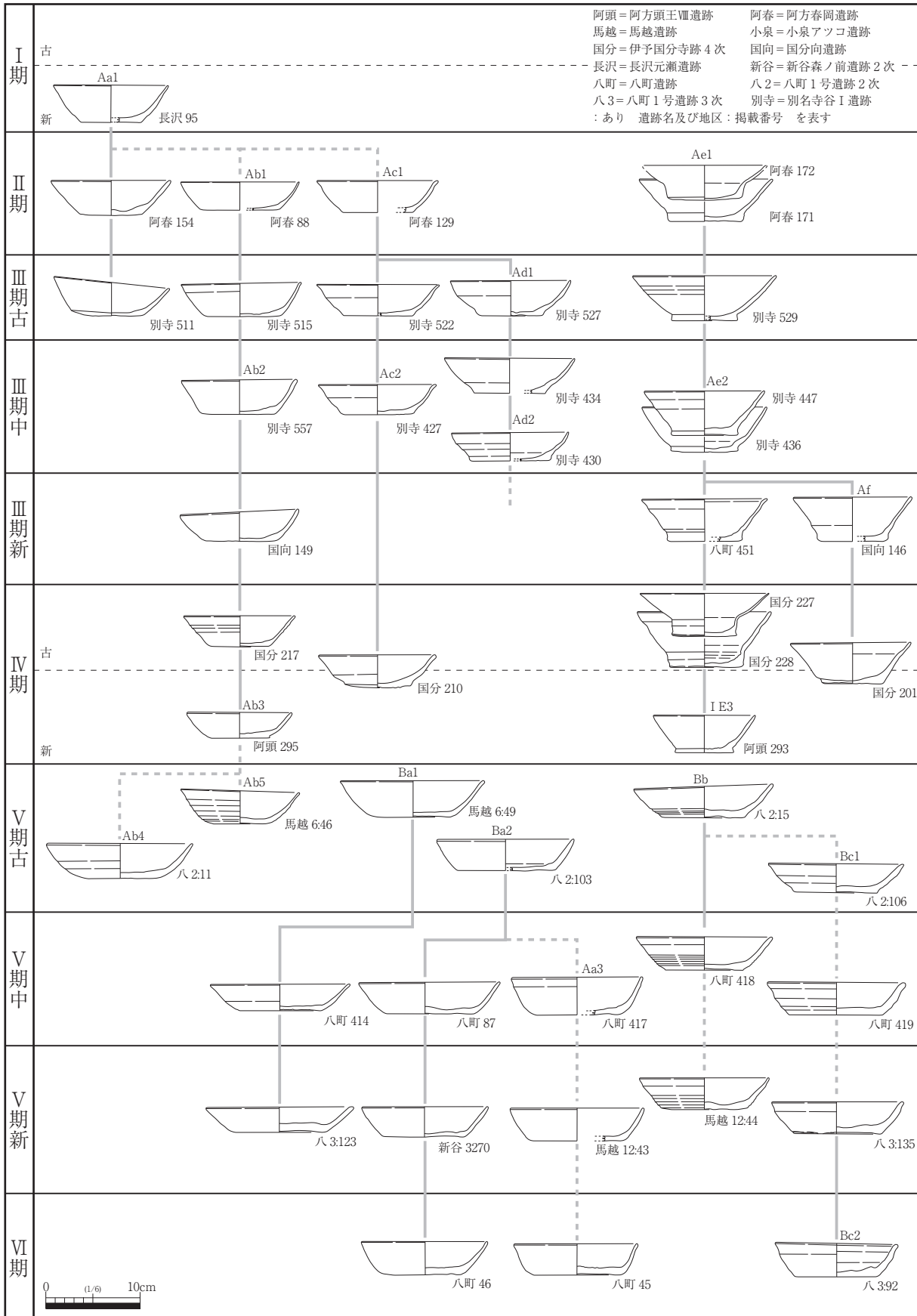


図9 土師質土器杯編年案

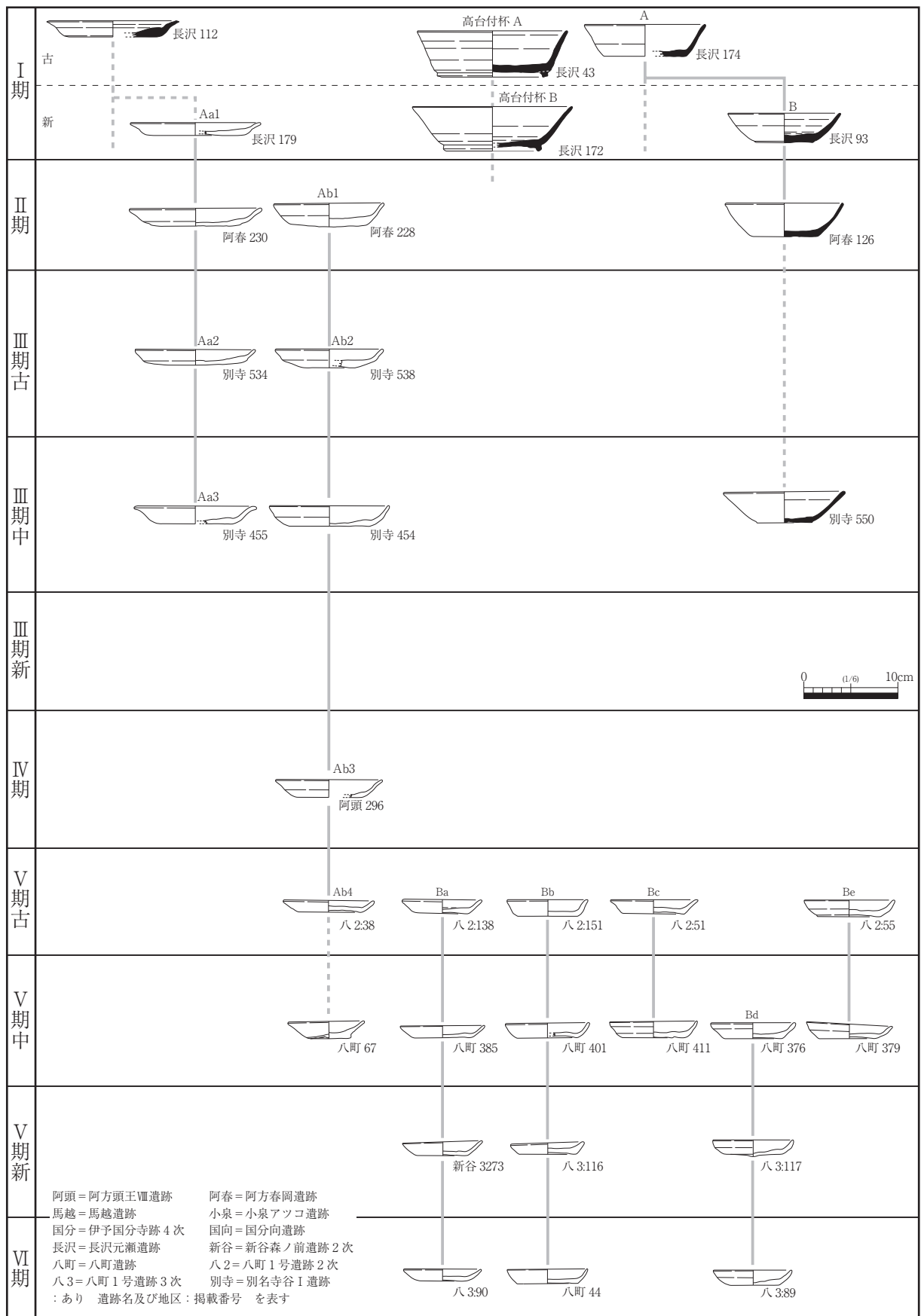


図 10 土師質土器皿・須恵器編年案

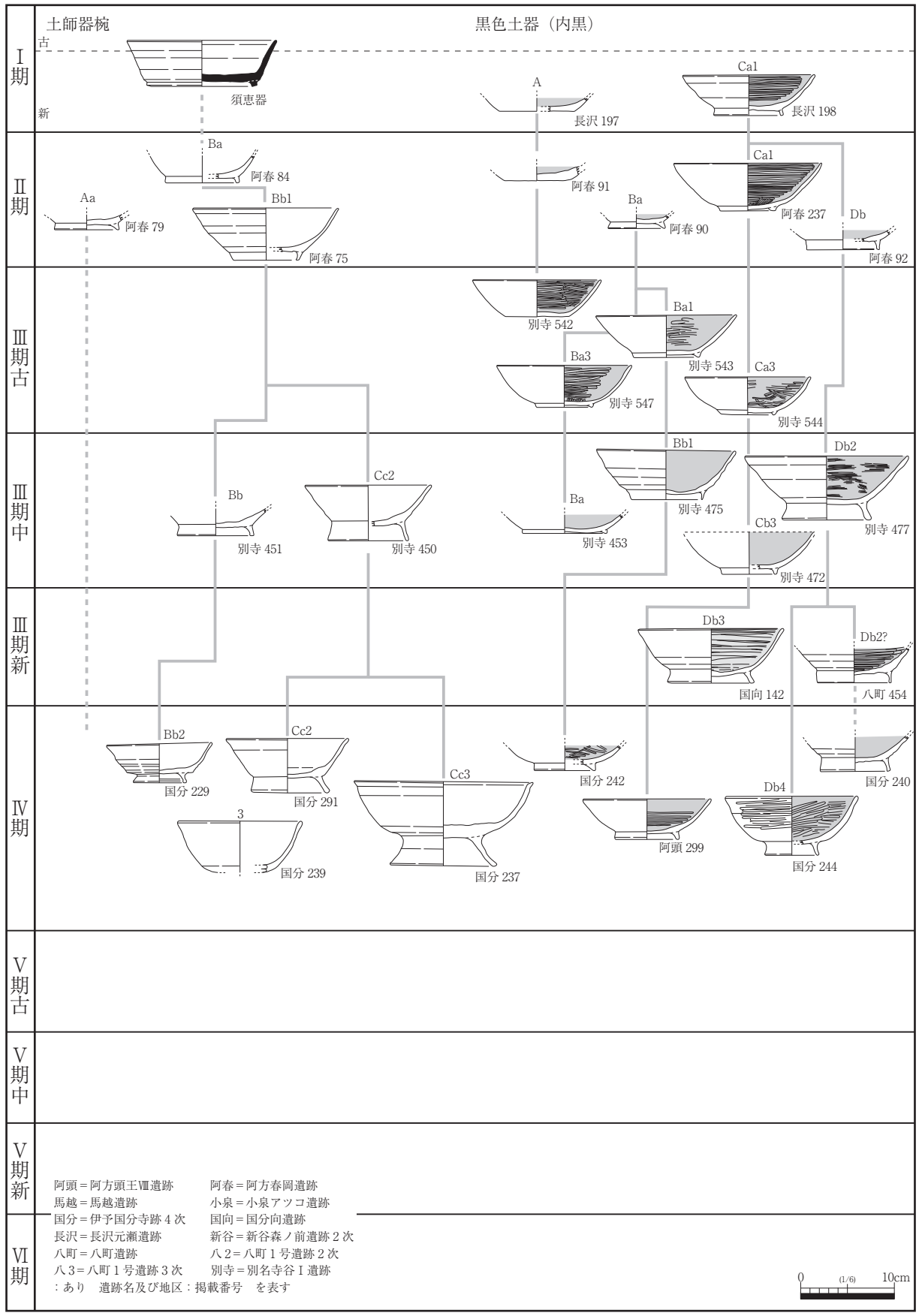


図 11 土師質土器碗・黑色土器編年案

黒色土器はⅠ期新段階からⅣ期まで、底部や口縁部の破片から時期を判断することが難しい。これは、土師質土器碗でも同様のことが指摘される。後述するように、時期が新しくなるにつれて高台が長脚化する傾向がみられるが、新しい時期でも低い高台は存在し、高台の粗雑化という変化から安易に時期を判断できない。Ⅰ期新段階の黒色土器は内面のミガキが分割ミガキではなく、おそらく回転台を利用した一連のミガキであり、一つのミガキが途中でとぎれることがなく、一周めぐる。このミガキはⅠ期新段階のみ確認でき、この時期の特徴である可能性が考えられる。また、当該時期の黒色土器碗の全体形は土師質土器杯 Aa や須恵器杯 B に四角形の高台を貼り付けた器形である。

Ⅰ期古段階と新段階は、前者が8世紀後半、後者が9世紀前半に比定される。柴田氏の古代の土器編年(2)期と(3)期に該当すると考えられ(柴田2008)、古段階が(2)期、新段階が(3)期に当てはまる。しかし、柴田氏は(3)期には黒色土器が含まれないと述べているため、黒色土器がⅠ期新段階、つまり9世紀前半から認められるかについては、検討すべき課題であり、今後の資料の増加を待って判断したい。

Ⅱ期：パターン2が該当する。土師質土器杯が一定量出土し、白色系・赤色系土器の土師質土器杯と皿が主体を占める点、これらの形態に多様化が認められる点を指標とする。須恵器は硬質でも、灰白色の色調が多く、焼成がやや甘くなる。土師質土器碗はⅡ期から確認でき、口縁部はこの時期の土師質土器杯と同様の形態であると考えられる。黒色土器は断面形態が三角形や高台がやや高いものがみられる。内面のミガキは横方向に施され、一部途切れるが、明瞭な分割ミガキは施されていない。また、Ⅰ期新段階よりミガキがやや細かく、見込みには平行線状のミガキが施されるものも確認される。しかしながら、ミガキが粗いのもみられるため、ミガキの粗密で時期を判別することは難しい。

Ⅲ期：パターン3～5が該当する。Ⅲ期は杯 Ab2 や Ac2、皿 Ab2 といった、白色系・赤色系土器ではない杯と皿が出現することを指標とする。Ⅲ期は古段階・中段階・新段階に分けられ、古段階はパターン3、中段階はパターン4、新段階はパターン5が当てはまる。

古段階はⅡ期のように、白色系・赤色系土器である杯 Aa2 や Ab1 とともに、それらの器形に類似し、白色系・赤色系土器ではない杯 Ac2、Ad などが共伴する段階である。黒色土器では、口縁部下半が若干張る Ba3 や Ca3 が出現し、黒色土器 A は本段階まで認められる。内面のミガキには新たに分割ミガキが確認され、古段階以降は分割ミガキのみ施される。

中段階は土師質土器杯 Aa、Ab1、Ac1、皿 Ab1 などがみられなくなり、胎土がやや粗く、橙色や褐色を呈した杯 Ab2、Ac2 や皿 Ab2 が主体となる時期である。土師質土器皿 Aa は本段階以降は確認できない。土師質土器碗と黒色土器には、高台の高さが1.0cmを超える長脚化した形態が新たに現れる。黒色土器は中段階以降、高台をもつ碗のみ認められる。須恵器杯はこの時期まで存在している可能性があるが、その数は非常に少なく、器形は同時期の土師質土器杯に類似している。

新段階は中段階の器種構成に加え、新たに杯 Af が出現し、須恵器杯が完全に認められない。

杯 Af は底部が分厚く、杯 Ae2 の高台の立ち上がりが不明瞭になったものと想定され、底部が平底である以外は杯 Ae2 の器形に類似している。国分向遺跡 SE01 からは焼成不良の須恵器のような白色の土師質土器杯が出土し、このような土師質土器はⅢ期新段階と次のⅣ期のみ確認される。

Ⅳ期：パターン 6 が該当する。Ⅲ期新段階よりも土師質土器杯 Ab の口径が縮小し、11.0cm 前後である杯 Ab3 と、土師質土器皿 Ab3 の出現を指標とする。土師質土器皿はⅢ期よりも口径が縮小し、小皿化するが、10.0cm 未満の形態はほとんど確認できない。土師質土器碗はⅣ期まで認められ、Ⅲ期より大型化しているものもある。また、底部形態は不明であるが、口縁部下半が張る深碗形態がⅣ期には出現している。黒色土器も土師質土器碗同様、本段階に深碗形態が現れ、長脚化した高台はこの時期まで認められる。Ⅳ期は古段階と新段階の 2 段階に分けられ、土師質土器杯 Ab2、Ab3、Ae2、Ae3 がみられる時期が古段階、杯 Ab3 と Ae3 が共伴する時期が新段階である。しかし、その新古は土師質土器杯 Ab と Ae を指標とするほかに、それ以外の器種の型式で新古を判断するのは現状では難しい。古段階は 10 世紀末～11 世紀前半、新段階は 11 世紀後半に位置付けられる。

Ⅴ期：パターン 7～9 が該当する。底部が糸切りである、土師質土器杯 B や皿 B の出現を指標とする。Ⅴ期は古段階、中段階、新段階に分けることができ、それぞれパターン 7 が古段階、パターン 8 が中段階、パターン 9 が新段階に対応する。

古段階は、土師質土器杯と皿の底部の切り離し技法において、ヘラ切りと糸切りが共伴することが最大の特徴である。土師質土器杯は口径・器高ともにⅣ期より大型化する一方で、皿は口径・器高ともに縮小し、小皿化が進む。杯 Ab4、Ab5 は杯 Ab3 の系譜で捉えたが、器形の大型化は杯 B の影響を受けていると考えられ、特に杯 Ab4 は杯 Ba と器形が類似している。土師質土器碗は、従来Ⅴ期以降にも確認でき、瓦器碗に淘汰されるなかで消えていったと指摘されてきた(中野 2002、柴田 2012)。しかし、土師質土器碗はⅡ期からⅣ期にかけて出土し、Ⅴ期以降には認められないと考えられる。その理由として、Ⅴ期に位置付けられていた土師質土器碗が出土している遺構からは、Ⅱ～Ⅳ期の在地土器や搬入土器が共伴し、それらはいずれも破片資料である点、共伴しているⅤ期以降の在地土器が完形やそれに近い形で出土しているのに対して、土師質土器碗はいずれも破片資料であり、完形に近い形態の報告がない点、Ⅴ期と考えられている土師質土器碗には、口縁部や底部にミガキが施され、それらは吉備型土師器碗の可能性が高いからである。黒色土器も同様の理由からⅤ期以降は確認できず、Ⅴ期古段階の初め頃までで収まると想定される¹⁹⁾。

中段階は土師質土器の杯、皿ともに底部の切り離しが糸切りである B 類しか確認できない点、ヘラ切りである A 類が出土しない点、皿 Bd が新たに出現する点を指標とする²⁰⁾。本段階では口縁部の立ち上がりが強い杯 Ba3 もみられるが、2 遺構から合計 2 点しか確認できないため、普遍的に出土しないと考えられる。古段階では、杯 B 類の中で杯 Bb が占める割合がやや高かった。中段階では各遺構で異なるが、杯 Ba2 が占める割合が高くなる。また、本段階までは皿 Bc と Be がみられ、次の新段階以降は認められない。中段階からは新たに皿 Bd が確認される。

新段階は中段階の器種構成から皿 Bc、Be が確認できないことを指標とする。本段階には、立ち上がりやや強い杯 Ba2 が主体を占め、口径 14.0～15.0cm の法量が多くなる。杯 Ba1 は本段階まで認められる。

Ⅵ期：パターン 10 が該当する。杯 Ba1 が確認できなくなり、杯 Ba2 が杯の主体を占めることを指標とする。杯 Ba3 はⅤ期と比べて普遍的に認められるが、依然その出土数は少ない。また、本時期の杯 Ba2、3 ともに口径が前時期よりも縮小し、13.0～14.0cm 前後へと変化している。土師質土器皿は皿 Ba と Bb、Bd が認められる。

(2) 小結

10 のパターンを六つの段階に区分し、各段階の土器の内容について検討してきた。ここでは土器の種類ごとにその特徴や変化についてまとめておきたい。

土師質土器杯はⅡ期に Aa、Ab、Ac、Ae の四系統が確認される。これらは一部の形態に分化や消長がありながらⅣ期まで存続し、Ab のみⅤ期古段階まで残る。Ⅰ～Ⅳ期にかけて、Ⅲ期中段階とⅣ期に法量の縮小化を指摘できる。Ⅴ期古段階には新たに杯 B が出現し、大きく三系統が確認される。Ⅰ～Ⅳ期まで杯 A が杯の中心を占めるのに対し、Ⅴ期には杯 B が主体となり、杯 A は古段階のみ認められ、杯 A の占める割合が少ない。杯 Ba は、Ⅵ期に口縁部の開きがやや緩やかな Ba1 が確認されず、この時期には口縁部の立ち上がり強い Ba3 が増加することから、Ⅴ～Ⅵ期にかけて口縁部の立ち上がりが強くなっていく。杯 Ba の法量はⅤ期よりもⅥ期の法量が小さくなるが、明確な基準を設けられない。口縁部の下半に顕著なロクロ目が観察される杯 Bb はⅤ期のみ認められる。

土師質土器皿は、皿 Aa はⅠ期～Ⅲ期中段階まで確認できるのに対し、皿 Ab はⅤ期古段階まで認められ、Ⅳ期以降は法量が小さくなっていく。小皿化した皿 Ab4 はⅤ期古段階のみ確認される。Ⅴ期には皿 B が出現し、Ⅴ期古段階には四形態、中段階には五形態、新段階～Ⅵ期には三形態がある。法量で分けることは困難であるが、杯同様にⅥ期にはⅤ期よりも口径が縮小している。

土師質土器椀は断面三角形と断面方形の低い高台をもつ椀がⅡ期から認められる。全体形は資料数が少なく不明であるが、口縁部は同時期の土師質土器杯と同様の形態であると想定され、Ⅳ期になるにつれて深椀形態へと変化する。その後、高台の断面が方形を呈する椀は、Ⅲ期以降 0.6cm 以上の高台の高さをもつ形態のみ確認でき、時期が新しくなるにつれて高台が高くなる傾向を読み取れる。また、土師質土器椀はⅤ期以降には認められず、確認されたとしても短期間であると考えられる。

黒色土器は高台が付かない平底の A はⅠ期～Ⅲ期古段階にかけてみられる。高台の高さが低い椀はⅠ期～Ⅲ期中段階まで確認されるが、その中心はⅢ期古段階までと推測される。Ⅲ期中段階には高台の高さが大きい形態が出現し、Ⅳ期まで確認できる。内面のミガキはⅡ期まで回転台を使用した一連のミガキが施されるが、Ⅲ期古段階には分割ミガキが現れ、この時期以降は分割

ミガキが主流になる。口縁部が直線的に外方へ開く形態はⅠ～Ⅳ期まで認められ、口縁部下半が外へ張る深椀の形態はⅣ期から確認される。黒色土器椀も土師質土器椀同様に、Ⅴ期以降は確認できず、認められたとしても短期間であると考えられる。

須恵器はⅠ期を中心に認められ、無高台の杯はⅠ期新段階以降は口縁部の開き方が緩く、やや丸みを帯びたBのみ確認される。杯はⅢ期中段階まで認められる可能性はあるが、普遍的に出土するのはⅡ期までである。高台付杯はⅠ期を中心にみられ、一部Ⅱ期まで残る可能性がある。

7 まとめ

本稿では、今治平野を対象に、9世紀から13世紀前半の在地土器供膳具を網羅的に扱い、それらの編年案を示した。土師質土器杯の分類では、これまでの先行研究の成果を踏まえながら、新たな分類を提示し、土師質土器皿、椀、黒色土器や須恵器は製作技法や形態に注目して分類した。そして一遺構を一つの分析の単位とし、それぞれの分類の組み合わせから10のパターンを見出した。その上で、10のパターンの前後関係を検証し、その時間の方向性を共伴している搬入土器の年代から再確認した。土師質土器杯・皿の出現や消長からⅠ～Ⅵ期の時期区分を設定し、それぞれの時期の特徴について論じ、次のような点を明らかにした。

一つ目は、平底で浅い土師質土器杯は、これまで先行研究では一系統の変化で考えられてきた。本稿では、それらを杯Aa～d、Ba～cの大きく七つに分類し、それらの変化を明らかにしたところ、Ⅰ～Ⅳ期には四系統認められ、Ⅴ～Ⅵ期には杯Ba～cを中心とした四系統がある。丸毛氏はこの平底で浅い土師質土器杯に、糸切り技法が導入されても、杯の形状変化にはつながらないと指摘しているため(丸毛2008)、土師質土器杯の変化を一系統で把握したと考えられる。しかしながら、糸切り離し技法の出現は、Ⅰ～Ⅳ期までの杯の変化の方向性とは異なり、杯の大型化や新たな器形である杯Bbが出現することから、杯の形状変化に繋がっていると考えられ、土師質土器杯の変化を一系統で捉えることは難しい。

二つ目は土師質土器皿を形態および製作技法から分類したところ、皿Aは二系統認められ、新しくなるにつれて法量が縮小化していくことが明らかとなった。また、皿Ab4はⅤ期新段階を中心に認められ、中段階にはほとんど確認されない。皿BはⅤ期中段階には五系統あり、Ⅴ期新段階以降は三系統確認でき、製作技法が時期差を表していることが判明した。

三つ目は、土師質土器椀と黒色土器椀の変化では、これまでこれらの椀は新しくなるにつれて、口径が大から小へ、器高や高台が高から低へという小型化の傾向、ミガキのある形態は密から粗へという簡略化の傾向を前提に考えられてきた(中野1988、柴田2012)。しかし、このような変化を追うのは困難であり、高台は高から低ではなく、逆に低から高へという変化を追えることが判明した。また、ミガキの簡略化は時期差を反映しているのではなく、ミガキの施し方に時期差があることが明らかとなった。ミガキの幅や分割ミガキの粗密が時期差を示す可能性は十分に考えられるが、現時点では資料数が少なく、これらで時期を判断できない。さらに、これらの土器椀は、今治平野では12世紀以降において数を減らしながらも存在していると考えられてきた。

しかし、いずれもⅣ期、つまり11世紀まで確認され、12世紀初頭まで残る可能性はあるが、少なくとも12世紀半ば以降には確実にみられない。

これまでの古代～中世における在出土器の研究では、対象の器種を限定する傾向があり、編年案も特定の器種を中心に示されてきた。本稿では、この時期の在出土器供膳具を総合的に扱い、各段階の基準試料を提示し、これまで判然としていなかった土器様相の変化を明らかにした。しかしながら、全器種を共通した属性で分類できてはおらず、基準資料に偏りがみられる点は否定できない。また、対象資料が消費地の資料に限られているため、将来的には生産地出土資料の充実を待ってクロスチェックおこない、編年案を補強したい。

最後になりましたが、本稿を執筆するに当たり、以下の方々や調査機関には資料調査の便宜の他、多くの御指導や御教示を賜りました。記して感謝を申し上げます。(敬称略)

石貫弘泰、小野隼也、亀井英希、柴田圭子、首藤久士、富田尚夫、中村美琴、乗松真也、村上恭通、持永壮志朗、山口莉歩、今治市教育委員会、愛媛県歴史文化博物館

註

- *1 7世紀から8世紀の資料は遺構から出土した資料だけでなく、包含層から出土した資料を対象としても非常に少なく、特に8世紀前半に確実に比定できる資料がほとんどないため対象に含めていない。また、13世紀から14世紀は柴田氏が指摘するように、土師質土器のバリエーションが増加し狭小な範囲での出土しか確認できない資料が多い(柴田2020)。そのため、前後の系譜やその変化を追うのが困難であり、資料の増加をまって再検討したい。
- *2 阿方春岡遺跡SD01の126は、土師質土器杯として報告されているが、資料を実見したところ、焼成不良の須恵器の可能性が高いため、本稿では須恵器として扱った。
- *3 伊予国分寺跡4次11層209は、土師質土器杯として報告されている。しかし、資料を実見したところ、焼成不良の須恵器の可能性が高いため、本稿では須恵器として扱った。図21に図示していないのは、後述するように、本資料の時期には須恵器杯が認められないため、混入品と判断したからである。
- *4 伊予国分寺跡4次12層287は、報告書では高台が残存していると報告されている。しかし、実見したところ、高台は端部が欠損していたため、全体形を判断できなかった。そのため、図22には図示していない。
- *5 小泉アツコ遺跡第2次調査SP105から出土した瓦器碗は、報告書では外面にミガキがないため、Ⅲ-1期頃と考えていた。しかし、一部の資料には外面にミガキが施されていたため、Ⅱ-3～Ⅲ-1期と判断した。
- *6 長沢元瀬遺跡SD01の171～178、180、181は土師質土器として報告されているが、資料を実見したところ、焼成不良の須恵器の可能性が高いため、本稿では須恵器として扱った。195は赤色塗彩土師器と報告されている。しかし、底部に一部橙色(5YR7/6)を確認できたが、それ以外は橙色(7.5YR7/6)であり、底部の橙色は赤彩ではなく、焼成により変色したと判断したため、土師質土器として扱った。197は黒色土器の皿として報告されている。しかし、報告書で口縁部とされている箇所は、摩耗により丸くなったと考えられ、実際は杯の体部の断口であることから、皿ではなく杯と判断した。
- *7 新谷森ノ前遺跡2次SX01は未報告資料であり、現在整理中である。今後本報告が刊行される予定である。そのため、図34の掲載番号は整理中の整理番号であり、今後の整理によって掲載番号が変更される可能性がある。
- *8 図19では図示していないが、本遺構からは土師質土器の鍋として報告されている455が出土している。しか

し、資料を実見したところ、土師質土器ではなく、須恵器の可能性が高い。器種も鍋ではなく鉢と考えられる。須恵器の鉢であるならば、十瓶山産の可能性もある。

- *9 八町遺跡7調査区4号井戸からは420以外にも土師質土器のA類として416が出土している。これは、形態的にⅢ期の杯Ac2に類似していること、前段階の資料からの系譜を追っていくこと、ともに出土している杯B類とは胎土などが異なりⅢ期の形態に類似していることから、混入と判断した。そのため図29には掲載していない。また、報告書では、420、422の底部の切り離しが回転ヘラ切りと報告されている。しかし、420は回転ヘラ切りではなく、回転糸切りであった。422は底部がやや摩耗していて判断することができなかったが、ヘラ切りの皿は416以外なく、416とは形態が異なることから、回転糸切りで切り離された可能性が高いと判断した。また、442～444の瓦器椀は、報告書では外面にミガキがないため、Ⅲ-1期と認識していた。しかし、外面にはやや粗雑なミガキを観察できたため、Ⅱ-3期と判断した。
- *10 八町遺跡5調査区5号土坑状遺構95は、柴田氏や丸毛氏によって、14世紀前半に位置付けられている形態である(丸毛2008、柴田2020)。これは、型式学的な変化を前時代のV期新段階から追うことができないことに加え、普遍的に出土する14世紀前半ごろの時期幅が1世紀ほど開くため、除外した。これがV期新段階まで系譜を追うことができるかは今後の資料の増加をまって再検討したい。また、99～102の瓦器椀は、報告書では外面にミガキがないため、Ⅲ-1期と認識していた。しかし、実見したところ、外面にやや粗雑なミガキを観察できたため、Ⅱ-3期と判断した。
- *11 八町遺跡7調査区13号土坑状遺構494～497は報告書では外面にミガキがないため、Ⅲ-1期と認識していた。しかし、実見したところ、外面にやや粗雑なミガキを観察できたため、Ⅱ-3期と判断した。
- *12 図12～39は、図の典拠で記述しているように、報告書の図面を再トレースした図と筆者が再実測し、それをトレースした図が混在している。そのため、再実測した土器の法量は報告書の観察表に記されている法量と異なっている。報告書の図面を再トレースした資料の法量は報告書の観察表の数値を使用した。なお図面では、断面白抜きは土師質土器、断面黒塗りは須恵器、網掛けは黒色土器を表している。
- *13 底部で分類を試みたが、それらが時期差や地域差を表しているのか判断できなかった。今後資料が増加するなかで、底部も含めた全体形から細分したい。
- *14 土師質土器杯B類にもAeのような円盤高台の底部をもつものがある。しかし、完形のものもしくはそれに近い形態で出土するのはまれであり、その多くは底部しかみられない。加えて、A類よりも底部形態が多様であることから分類していない。見通しになるが、B類で円盤高台・柱状高台をもつ形態は11世紀から13世紀にかけてみられ、時期が新しくなるにつれて底部下端の張り出しが強くなる傾向がうかがえる。
- *15 藤村啓修氏によって、本稿でも扱っている小泉アツコ遺跡第1次調査SQ01(SK06)、同遺跡第2次調査土器埋納遺構SP72(SX01)から出土した土師質土器皿の分類がおこなわれている(今治市教育委員会2020)。藤村氏はSQ01から出土した土師質土器皿を見た目の形態で2群、SP72から出土した資料は色調・形態から5群に分類している。両遺構から出土した土師質土器皿の分類基準は異なり、2群と5群がどのように対応するか記述されていない。そのため、本稿では藤村氏の分類とは異なり、製作技法と調整で分類し、色調や胎土では分類しなかった。それは、色調や胎土も加えて分類すると、かなり細分され、かえって編年を組み立てる上で問題が生じると考えたからである。今後観察を進めていく中で、製作技法と調整に加え、色調や胎土からもふまえた分類を試みたい。
- *16 黒色土器は内面黒色土器(A類)を分類した。内外面黒色土器(B類)は、今治平野ではほとんど確認できない。内外面黒色土器は出土していても破片資料が多いため、あまり使用されていないと想定される。
- *17 時期比定は中世土器研究会1995、高橋2016、山内2018、山本悦1993、山本信2000、中世土器研究会事務局2015、小森2005、橋本2018などを参考におこなった。
- *18 須恵器高台付杯Bは須恵器杯の変化を参考にすると、高台付杯A→Bへの変化が想定できるため、時期を

区分すべきである。しかし、現時点では高台付杯 B が 1 点しか確認できないため、高台付杯 B は古段階に含めた方がよいと考えられる。それは、I 期新段階の資料数が少ない点、II 期の遺構からほとんど出土していない点、II 期の遺構では杯 A がほぼ完形で出土しているのに対し、杯 B は破片資料のみの出土であることに加え、出土数も少ないからである。今後の資料の増加によっては I 期新段階に含まれるものが確認されるかもしれない。I 期新段階に該当すると想定される高台付杯と皿の形態は、高台付杯が高台付杯 B のように口縁部の開きが大きいもの、皿は口径が 14.0cm 前後のものと想定される。

*19 馬越遺跡 6 区 SE4 からはほぼ完形の内面黒色土器碗が出土しており、II - 3 期に位置づけられる和泉型瓦器碗と土師質土器皿 B 類がともに出土し、V 期新段階と考えられる出土例がある。しかし、井戸の堀方あるいは埋土のどちらから出土したか報告されていないことや、この黒色土器碗は内外面ともにミガキが丁寧に施され、深碗の形態であり、IV 期ごろの黒色土器碗と考えられることから本遺構出土資料は除外した。黒色土器碗は、本例以外の V 期以降の遺構から出土しているが、それらはいずれも混入と考えられる。その理由は、当例以外はいずれも破片資料であり、完形に近いものやそれに復元できるものがない点、共伴している V 期以降の在地土器や搬入品が完形に近い形で出土する点、II ~ IV 期の在地土器や搬入品が混在しているからである。黒色土器は資料数が少ないため V 期以降に決してみられないと断言することはできないが、V 期以降に認められる可能性は非常に低く、V 期古段階の初めで収まると考えられる。

*20 図 30 には 67(皿 Ab4) を掲載しているが、この資料は V 期古段階と考えられる。その理由として、V 期中段階では、本遺構以外から皿 A が出土していないこと、本遺構でも 67 と 85 の 2 点しか確認できていないからである。なお、85 は資料の所在が不明であり、実見する機会を得ることができなかったため、図 30 には掲載していない。今後の資料の増加により、V 期中段階にも皿 A が確認される可能性はあるが、その数は非常に少ないと考えられる。

参考文献

- 伊野近富 1995 「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』 pp.225-244、真陽社
- 栗田正芳 1994 「道後平野における回転台土師器について」『中近世土器の基礎研究』 X、pp.49-74、日本中世土器研究会
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7 世紀~19 世紀—』 京都編集工房
- 柴田圭子 2005 「四国における土器・陶磁器の編年」『中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~』 pp.353-376、全国シンポジウム「中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~」実行委員会
- 柴田圭子 2008 「第 2 章 考察 第 3 節 大久保遺跡(大久保・竹成地区)・大開遺跡・松ノ丁遺跡における古代の土器様相」『大久保遺跡(大久保・竹成地区・E 地区)・大開遺跡・松ノ丁遺跡(1 次・2 次)—一般国道 11 号 小松バイパス埋蔵文化財調査報告書 第 2 集—』埋蔵文化財発掘調査報告書第 144 集、pp.41-48、財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 柴田圭子 2012 「出土土器から見た伊予地方の様相」『シンポジウム 安芸地方の中世を探る—中世前期を中心として—』 pp.73-84、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門 東広島教育委員会
- 柴田圭子 2018 「今治平野の中世土器—経田遺跡出土の土師質土器杯の検討—」『紀要愛媛』第 14 号、pp.1-10
- 柴田圭子 2020 「第 11 章まとめ 第 4 節 古谷地区における古代~中世遺跡について」『古谷尾ノ端遺跡・古谷仙田岡遺跡・古谷横枕遺跡・古谷立丁遺跡・古谷高木遺跡・古谷坪ノ内遺跡・古谷シヨクガ谷遺跡—一般国道 196 号今治道路(湯ノ浦 IC~朝倉 IC 間)埋蔵文化財調査報告書 8—』埋蔵文化財発掘調査報告書第 199 集、pp.804-823、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

- 高橋照彦 1995「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』pp.257-278、真陽社
- 高橋照彦 2016「平安時代須恵器の研究現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』pp.75-100、考古学研究会関西例会200回記念シンポジウム考古学研究会関西例会
- 中世土器研究会事務局 2015「東播系須恵器鉢の分類と編年」『中近世土器の基礎研究』26、pp.139-154、日本中世土器研究会
- 中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中野良一 1988「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世の土器研究』IV、pp.141-156、日本中世土器研究会
- 中野良一 1995「第5章 まとめ」『八町1号遺跡—2次調査区—』今治市埋蔵文化財調査報告書第22集、pp.93-113、今治市教育委員会
- 中野良一 2002「伊予における土器椀—吉備系土師器椀の受容—」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』pp.509-519、古代吉備研究会
- 橋本久和 2009『中世考古学と地域・流通』真陽社
- 橋本久和 2018『概論 瓦器椀研究と中世社会』真陽社
- 丸毛のぞみ 2008「古代末～中世前半の伊予地域の在り土器について—坏の編年を中心に—」『地域・文化の考古学—下條信行先生退任記念論文集—』pp.579-594、下條信行先生退任記念事業会
- 森 隆 1995「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』pp.245-256、真陽社
- 山内英樹 2018「伊予の古代赤色塗彩土師器」『紀要愛媛』第14号、pp.17-30、
- 山下峰司 1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』pp.279-297、真陽社
- 山本悦世 1993「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊、pp.157-174、岡山大学埋蔵文化財センター
- 山本信夫 2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会

報告書

- 今治市教育委員会 1995『八町1号遺跡—第2次調査—』
- 今治市教育委員会 1998『八町1号遺跡—第3次調査—』
- 今治市教育委員会 1998『八町1号遺跡—第4次調査—』
- 今治市教育委員会 1999『高橋湯ノ窪遺跡II』
- 今治市教育委員会 1999『八町ヒル田遺跡』
- 今治市教育委員会 2001『伊予国分寺跡確認調査』
- 今治市教育委員会 2001『馬越遺跡発掘調査報告書』
- 今治市教育委員会 2002『高橋岡ノ下遺跡 高橋具禪寺遺跡 高橋岡ノ端遺跡』
- 今治市教育委員会 2015『別名寺谷遺跡』
- 今治市教育委員会 2020『小泉アツコ遺跡 第1次調査・第2次調査』
- 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 2018『長沢元瀬遺跡・長沢二反地遺跡』
- 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 2019『山口古屋敷遺跡』
- 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 2020『朝倉下経田遺跡』
- 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 2020『古谷尾ノ端遺跡・古谷仙田岡遺跡・古谷横枕遺跡・古谷立丁遺跡・古谷高木遺跡・古谷坪ノ内遺跡・古谷シヨクガ谷遺跡—』

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 1989『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998『登畑遺跡』
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000『阿方春岡遺跡・阿方牛ノ江遺跡・矢田八反坪遺跡・矢田大出口遺跡・矢田平山近世墓・矢田平山古墳・矢田平山遺跡』
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000『旦遺跡 宮之前遺跡 長沢石打遺跡 長沢1号墳 長沢6号墳 二の谷2号墳 鉢又古墳群 郷桜井西塚古墳』
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2006『馬越和多地遺跡2次』
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2007『阿方頭王Ⅶ遺跡 阿方頭王Ⅷ遺跡 阿方頭王Ⅸ遺跡 阿方頭王Ⅹ遺跡 阿方頭王Ⅺ遺跡 阿方頭王Ⅻ遺跡』
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2007『別名端谷Ⅰ遺跡・別名端谷Ⅱ遺跡・別名ルノ谷遺跡・別名寺谷Ⅰ遺跡・別名寺谷Ⅱ遺跡』
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2009『国分壺町地遺跡 国分向遺跡1次・2次』

挿図出典

図1～11：筆者作成 図12：93、174、180筆者再実測・トレース、前記以外は報告書の図を再トレース 図13：179、195、197、198筆者再実測・トレース、前記以外は報告書の図を再トレース 図14：252、254、267、292、293、299は報告書の図を再トレース、前記以外は筆者再実測・トレース 図15：94～96は報告書の図を再トレース、前記以外は筆者再実測・トレース 図16：全て筆者再実測・トレース 図17：571、572は報告書の図を再トレース、前記以外は筆者再実測・トレース 図18：477、482、484、485は報告書の図を再トレース、前記以外は筆者再実測・トレース 図19：456、457は報告書の図を再トレース、前記以外は筆者再実測・トレース 図20：全て筆者再実測・トレース 図21：255は報告書の図を再トレース、237、238、246、247、249、250は実物をみながら報告書の図を修正・トレース、前記以外は筆者再実測・トレース 図22：303は報告書の図を再トレース、303以外は筆者再実測・トレース 図23：全て筆者再実測・トレース 図24：全て筆者再実測・トレース 図25：全て報告書の図を再トレース 図26：全て報告書の図を再トレース 図27：全て報告書の図を再トレース 図28：全て報告書の図を再トレース 図29：419は報告書の図を再トレース、419以外は全て筆者再実測・トレース 図30：全て筆者再実測・トレース 図31：全て筆者再実測・トレース 図32：3、4、6、9は筆者再実測・トレース、前記以外は実物をみながら報告書の図を修正・トレース 図33：173、177、178は筆者再実測・トレース、前記以外は実物をみながら報告書の図を修正・トレース 図34：112、117、119、129、131、132、137、138は筆者再実測・トレース、111、140、141は報告書の図を再トレース、前記以外は全て実物をみながら報告書の図を修正・トレース 図35：全て筆者実測・トレース 図36：全て実物をみながら報告書の図を修正・トレース 図37：全て筆者再実測・トレース 図38：93、94、96、104は筆者再実測・トレース、前記以外は実物をみながら報告書の図を修正・トレース 図39：全て筆者再実測・トレース

(2021年4月13日)

口径
11.0

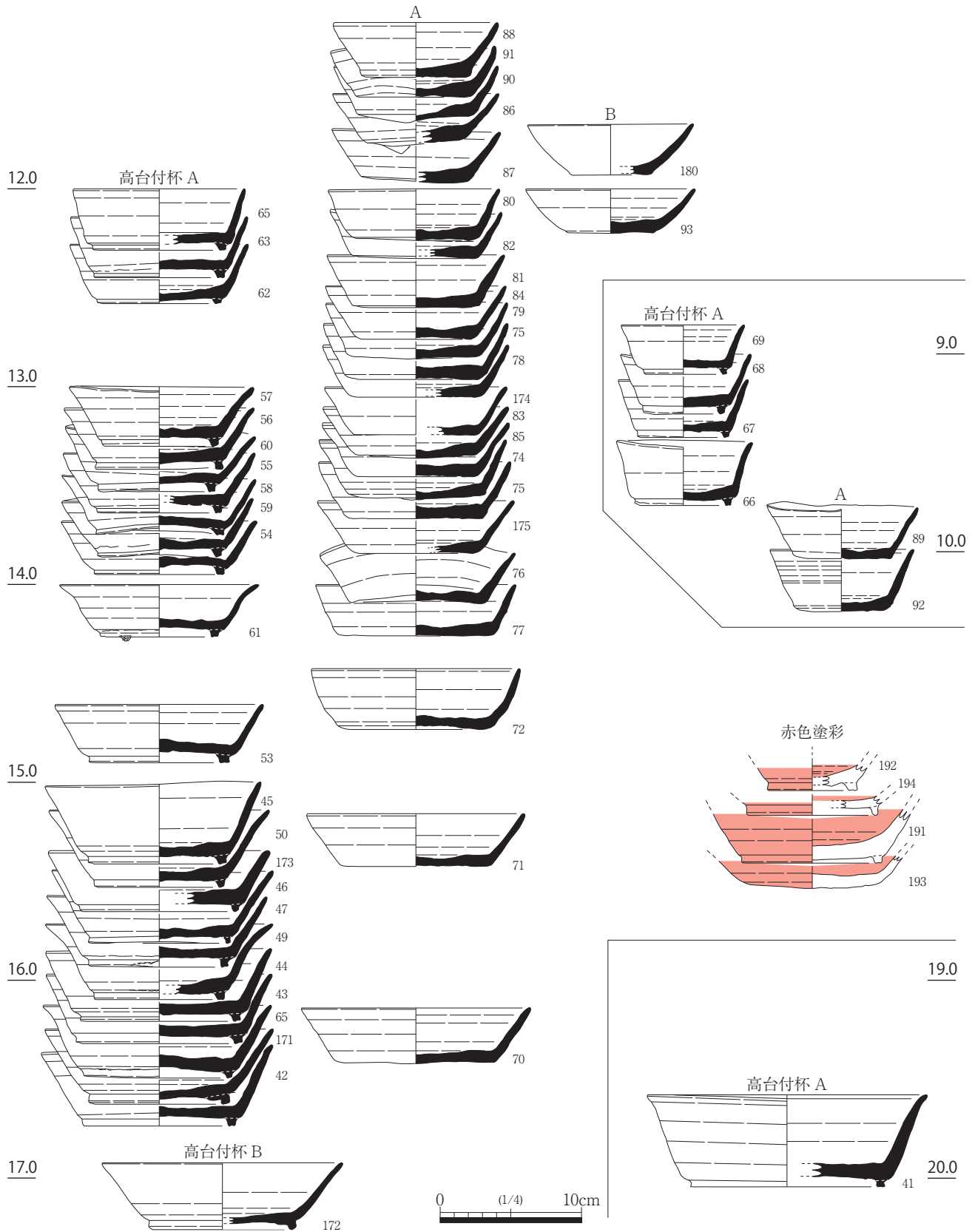


図 12 長沢元瀬遺跡 SD01 出土遺物その 1

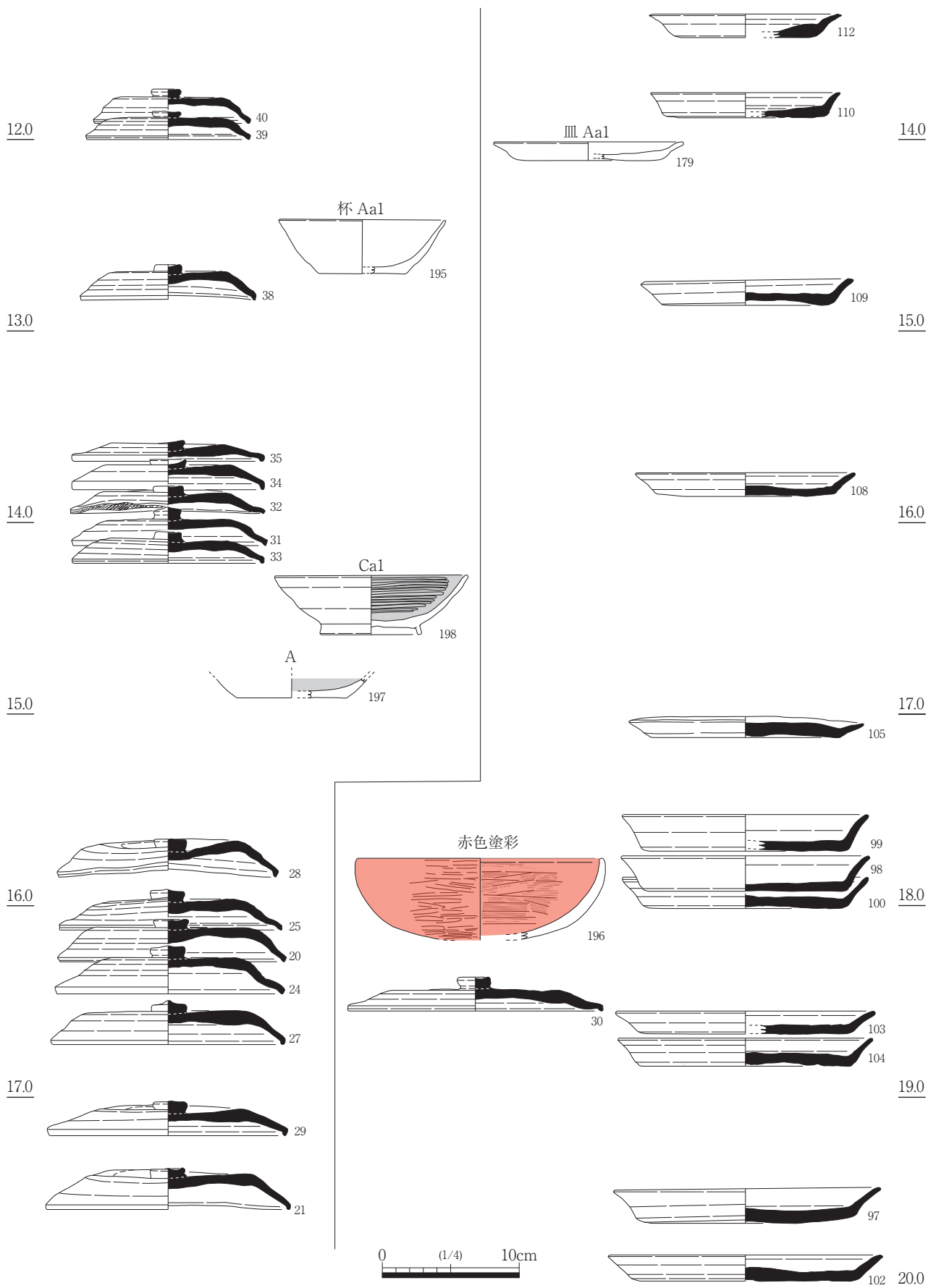
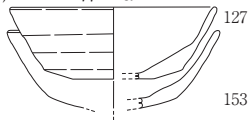


図 13 長沢元瀬遺跡 SD01 出土遺物その 2

口径

11.0(cm)

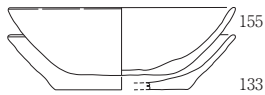
杯 Aa2



B



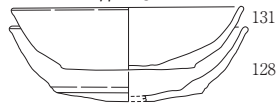
12.0



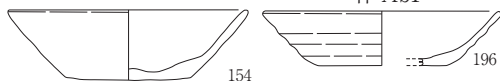
皿 Ab1



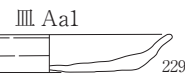
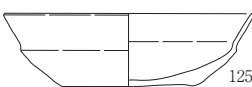
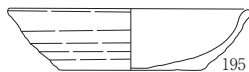
杯 Ac1



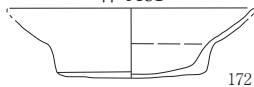
杯 Ab1



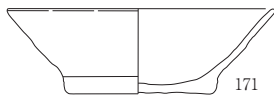
13.0



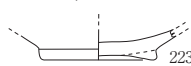
杯 Ae1



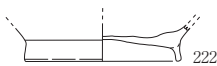
14.0



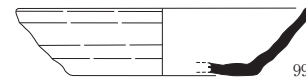
碗 Aa



碗 Bb



15.0

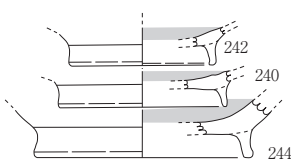


16.0

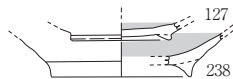
Ca1



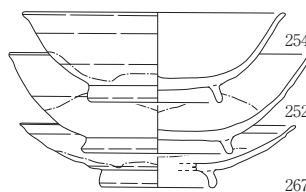
Db



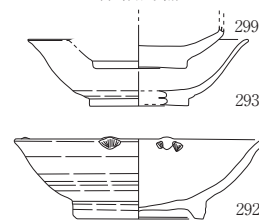
Ba



灰釉陶器



緑釉陶器

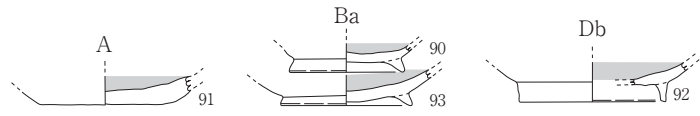


17.0

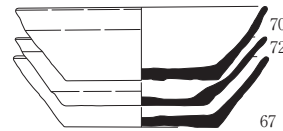
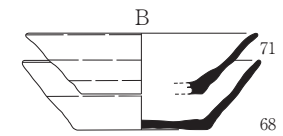
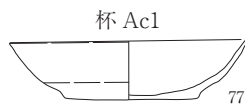
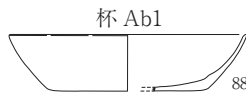
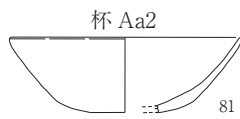
图 14 阿方春岡遺跡 SD01 出土遺物

口径

11.0(cm)

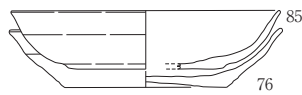
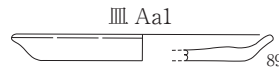


12.0

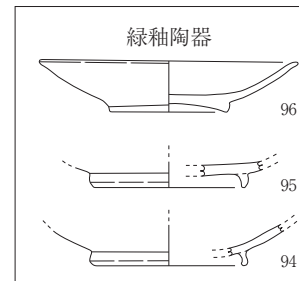
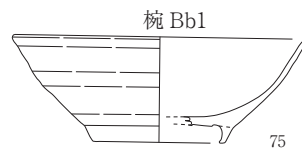


13.0

14.0



15.0



16.0

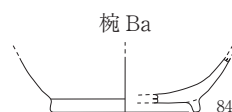
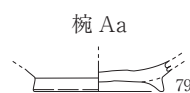


図 15 阿方春岡遺跡 SX01 出土遺物

口径

11.0

12.0

13.0

14.0

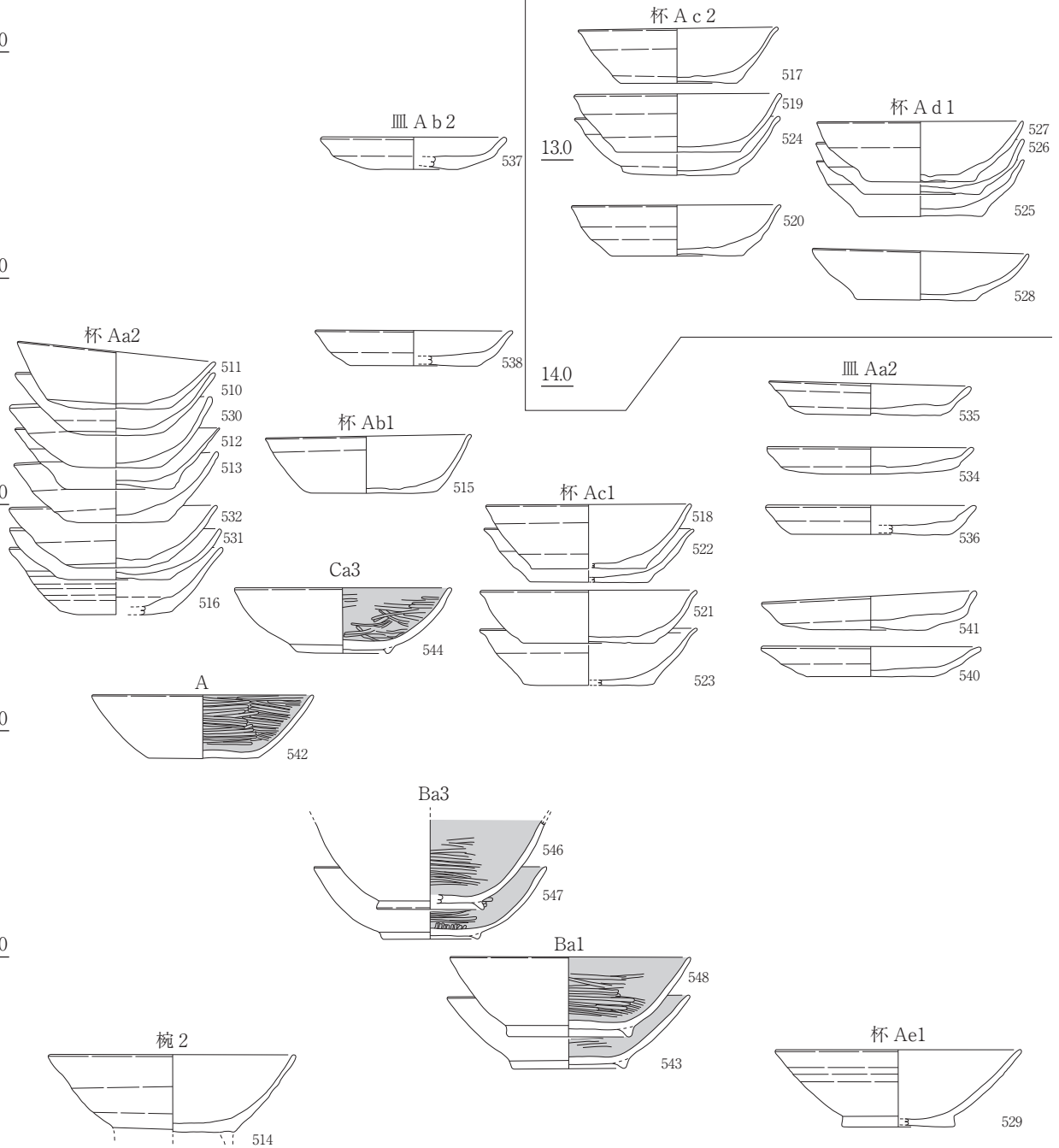
15.0

16.0

12.0

13.0

14.0

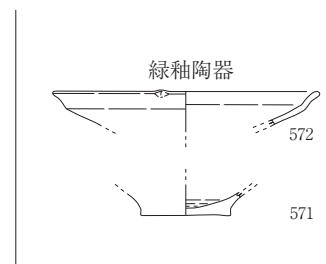


0 (1/4) 10cm

图 16 別名寺谷 I 遺跡 1 号土器溜まり出土遺物

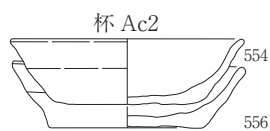
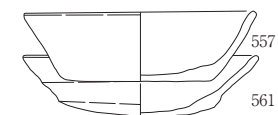
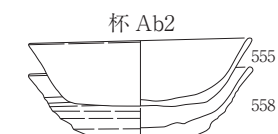
口径
9.0(cm)

10.0

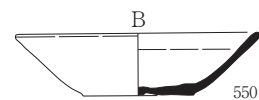
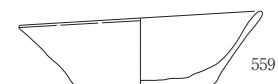


11.0

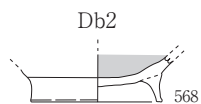
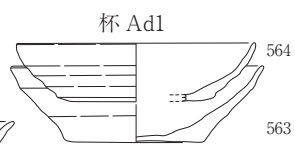
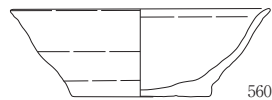
12.0



13.0



14.0



15.0



図 17 別名寺谷 I 遺跡 2 号土器溜まり出土遺物

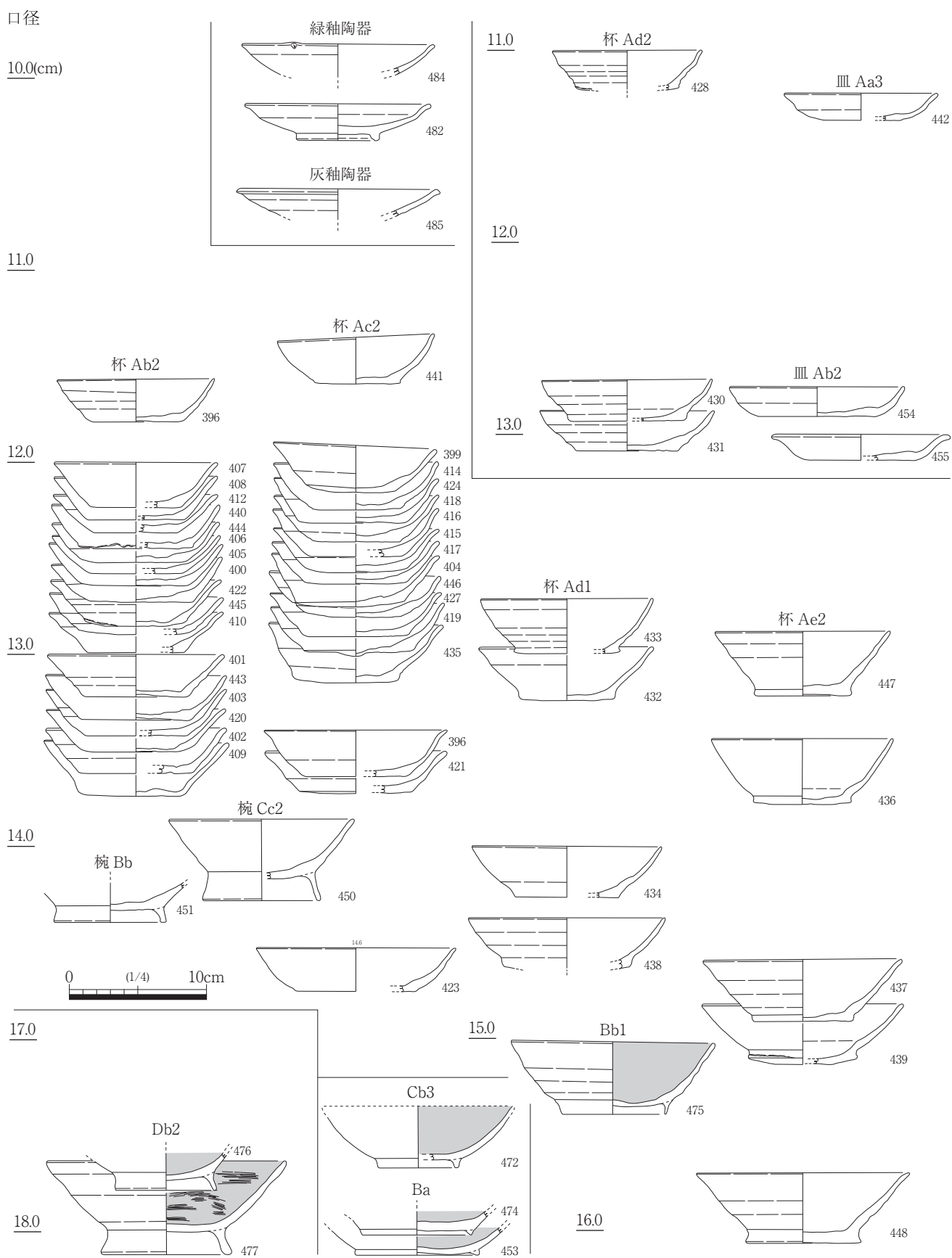


图 18 別名寺谷 I 遺跡 SD08 出土遺物

口径

9.0(cm)

10.0

11.0

12.0

13.0

14.0

15.0

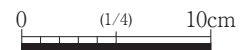
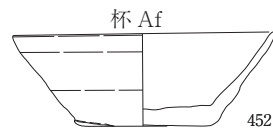
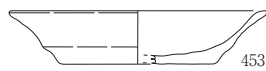
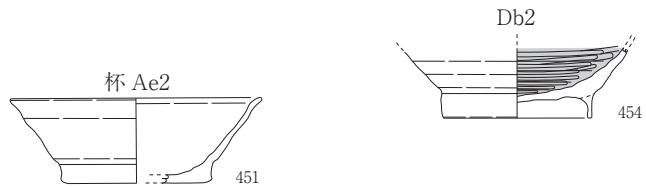
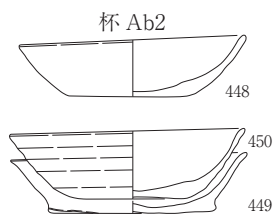
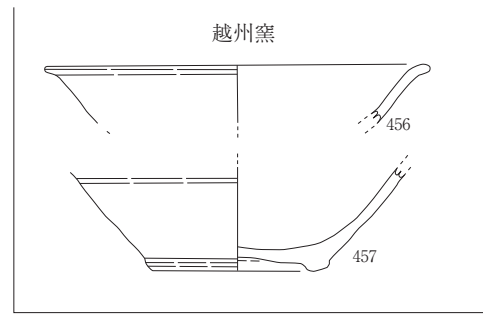


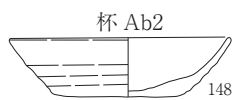
图 19 八町遺跡 7 調査区 2 号土坑出土遺物

口径

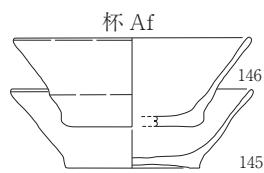
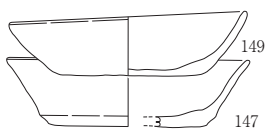
10.0

11.0

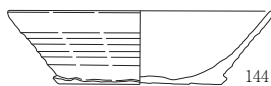
12.0



13.0



14.0



15.0

16.0

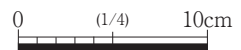
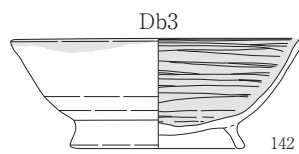


图 20 国分向遺跡 SE01 出土遺物

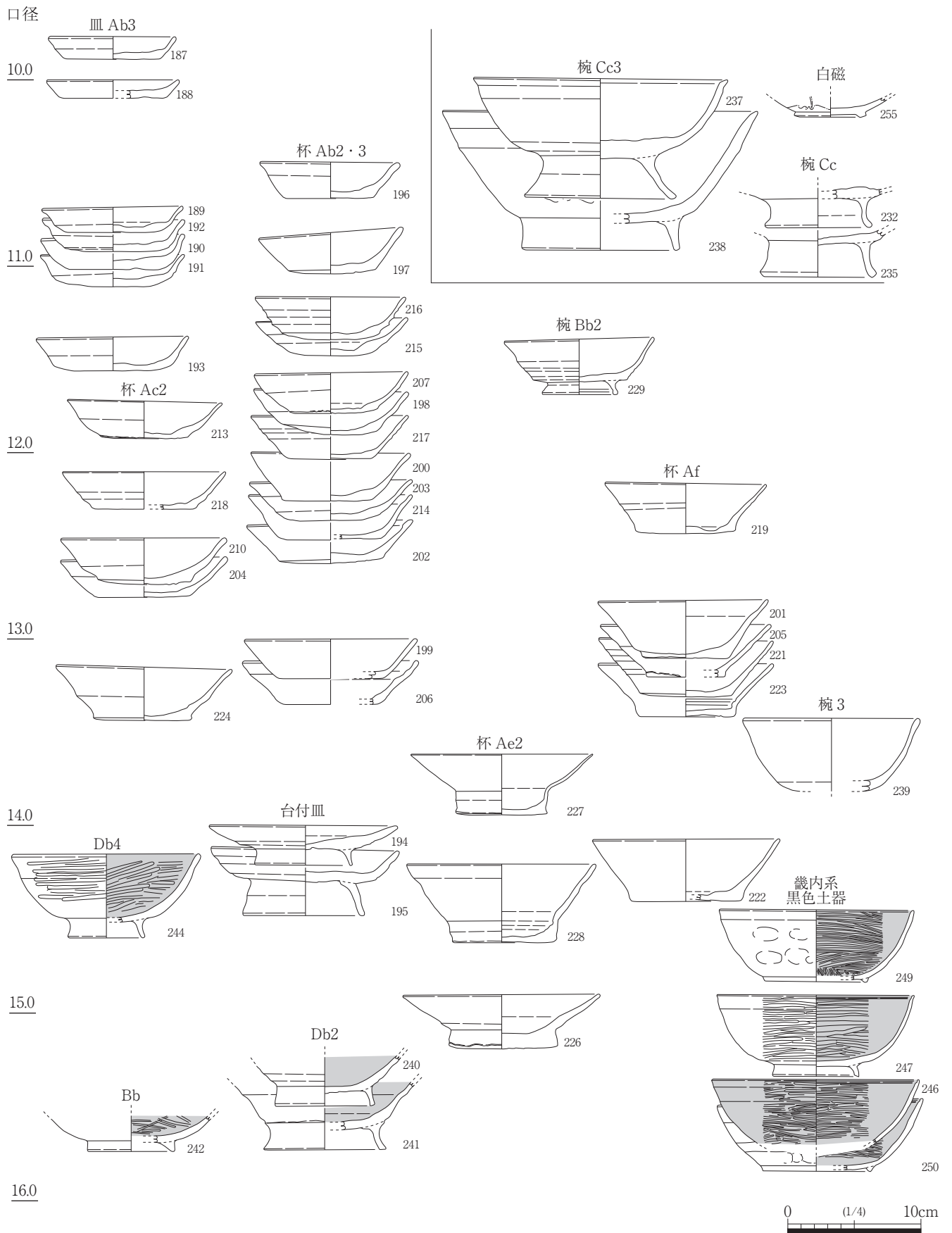


図 21 伊予国分寺跡 4 次 11 層出土遺物

口径
9.0(cm)

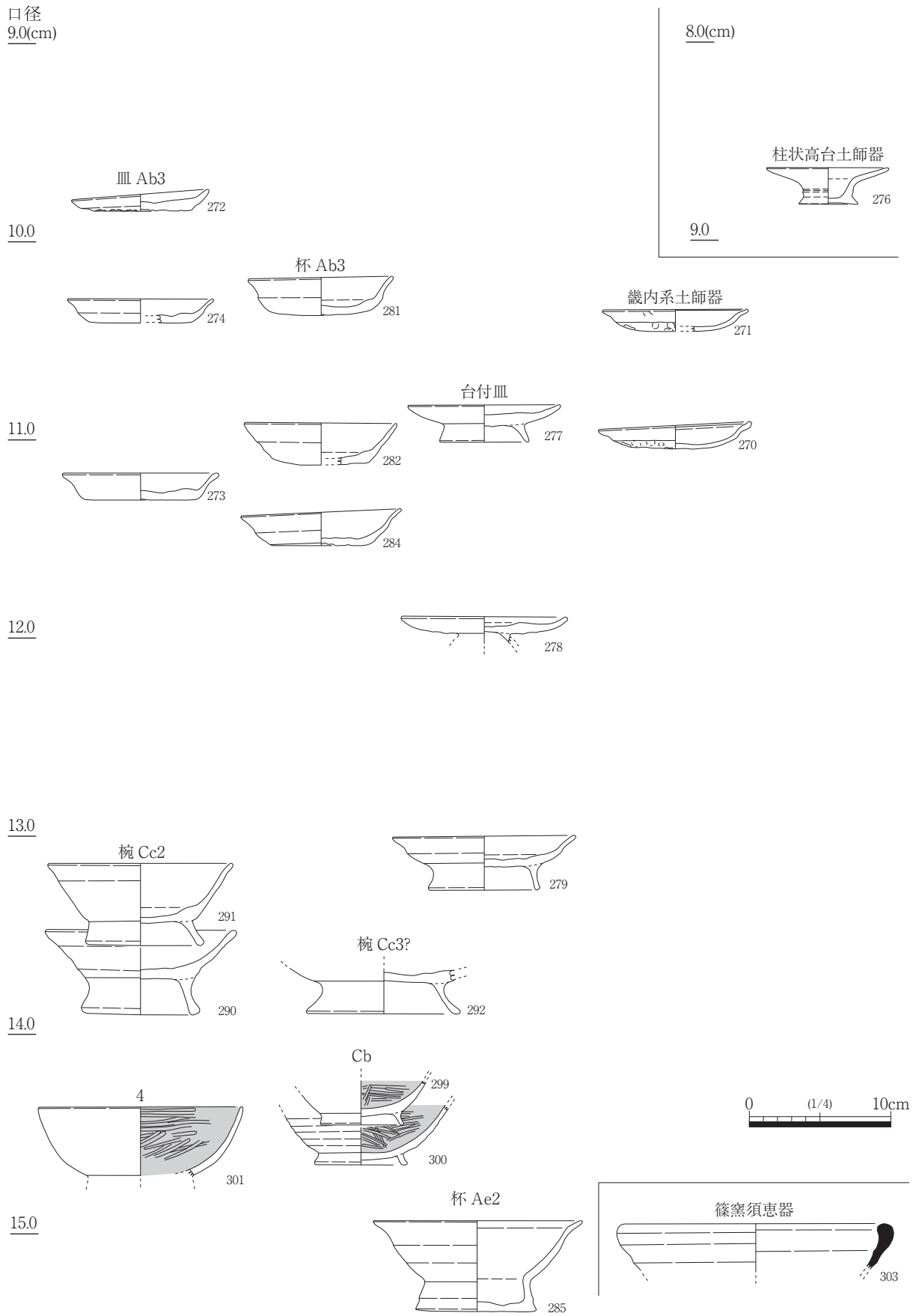
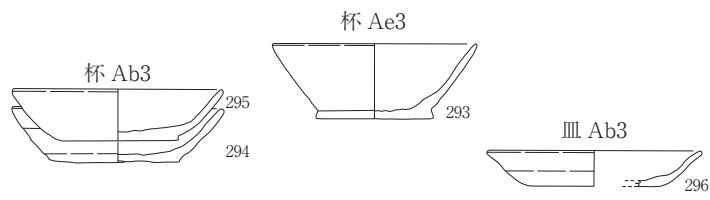


図 22 伊予国分寺跡 4 次 12 層出土遺物

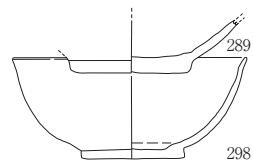
口径

10.0(cm)

11.0

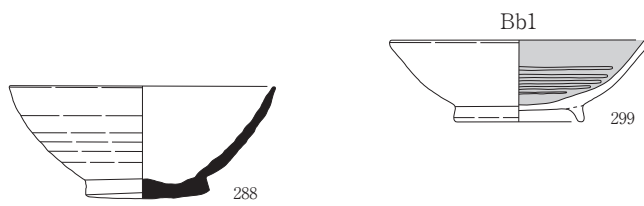


12.0



13.0

14.0



15.0

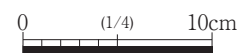


图 23 阿方頭王VIII遺跡 DAN01 出土遺物

口径
8.0(cm)

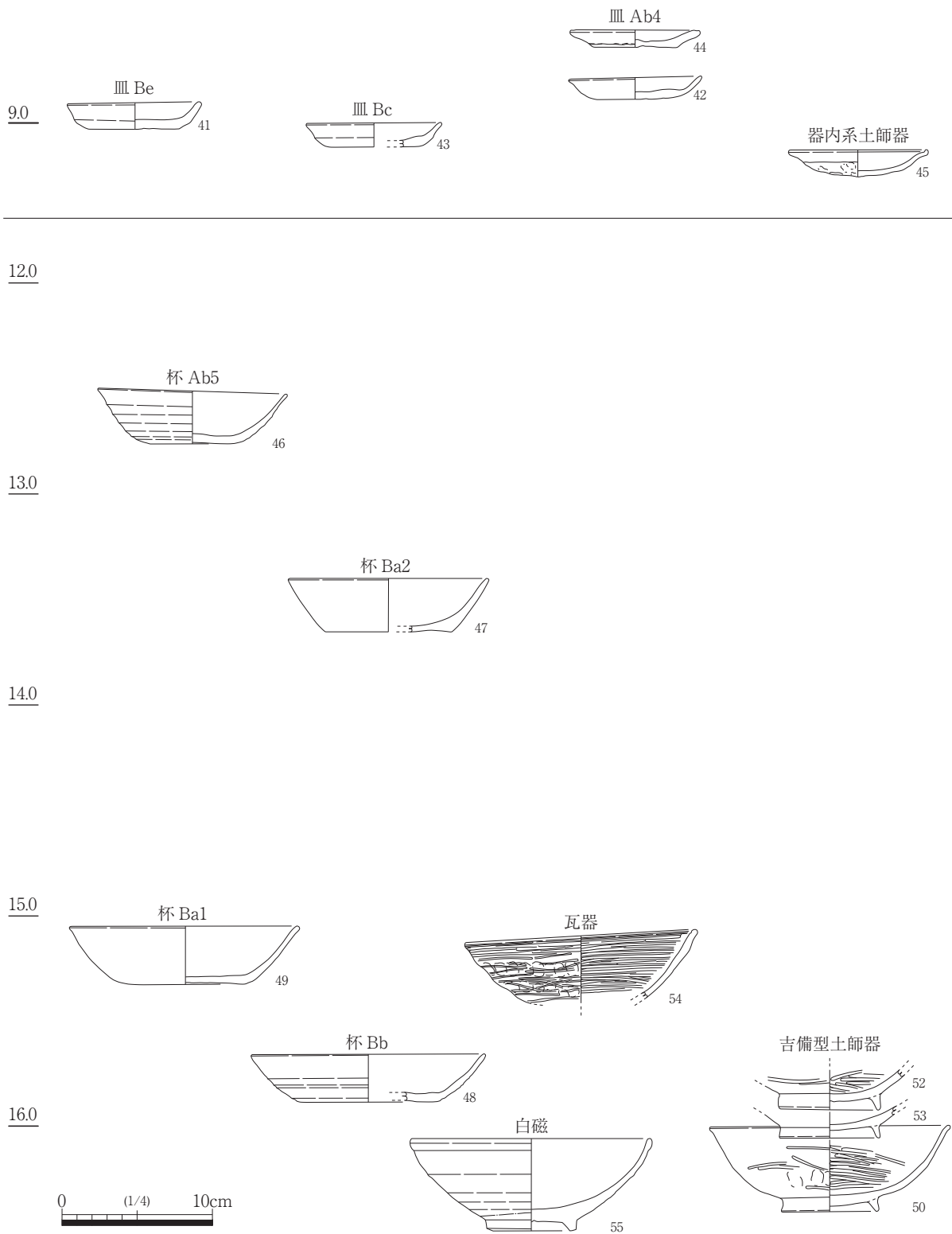


图 24 馬越遺跡 6 区 SE1 出土遺物

口径

8.0(cm)

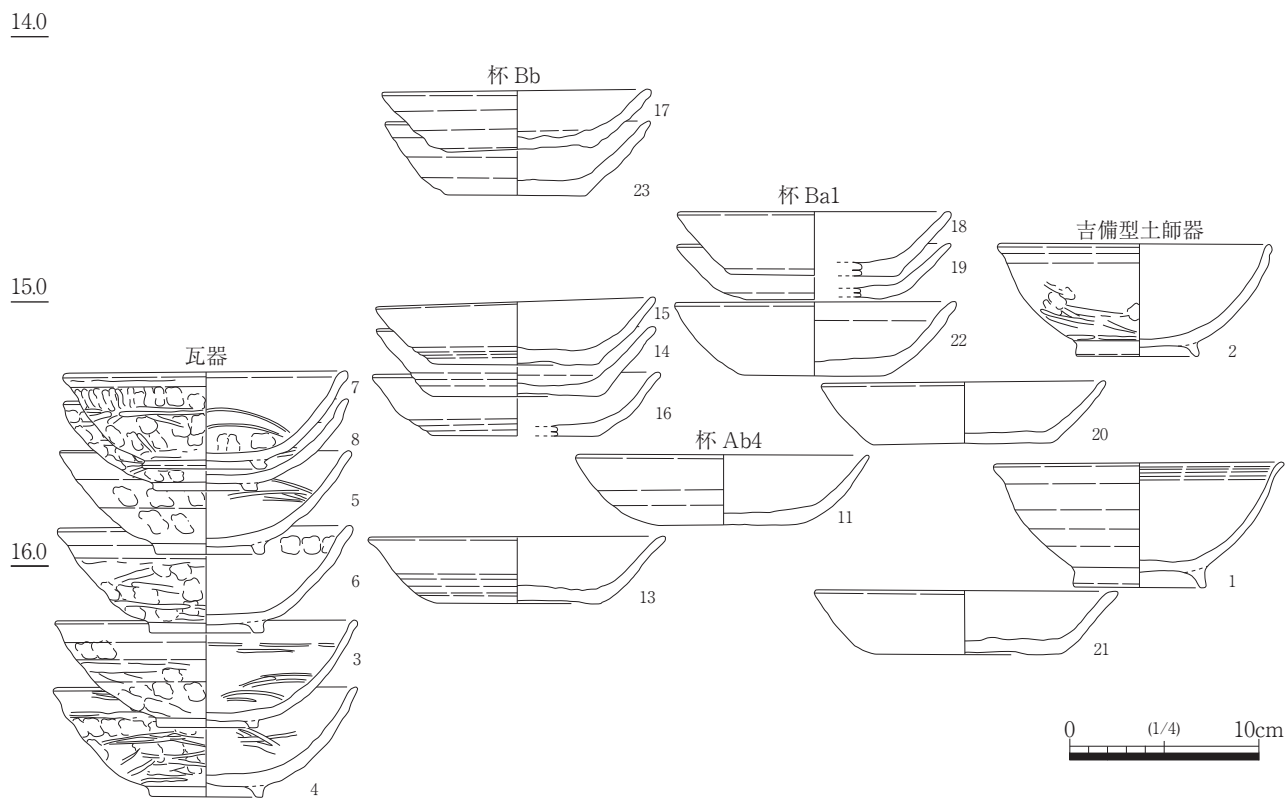
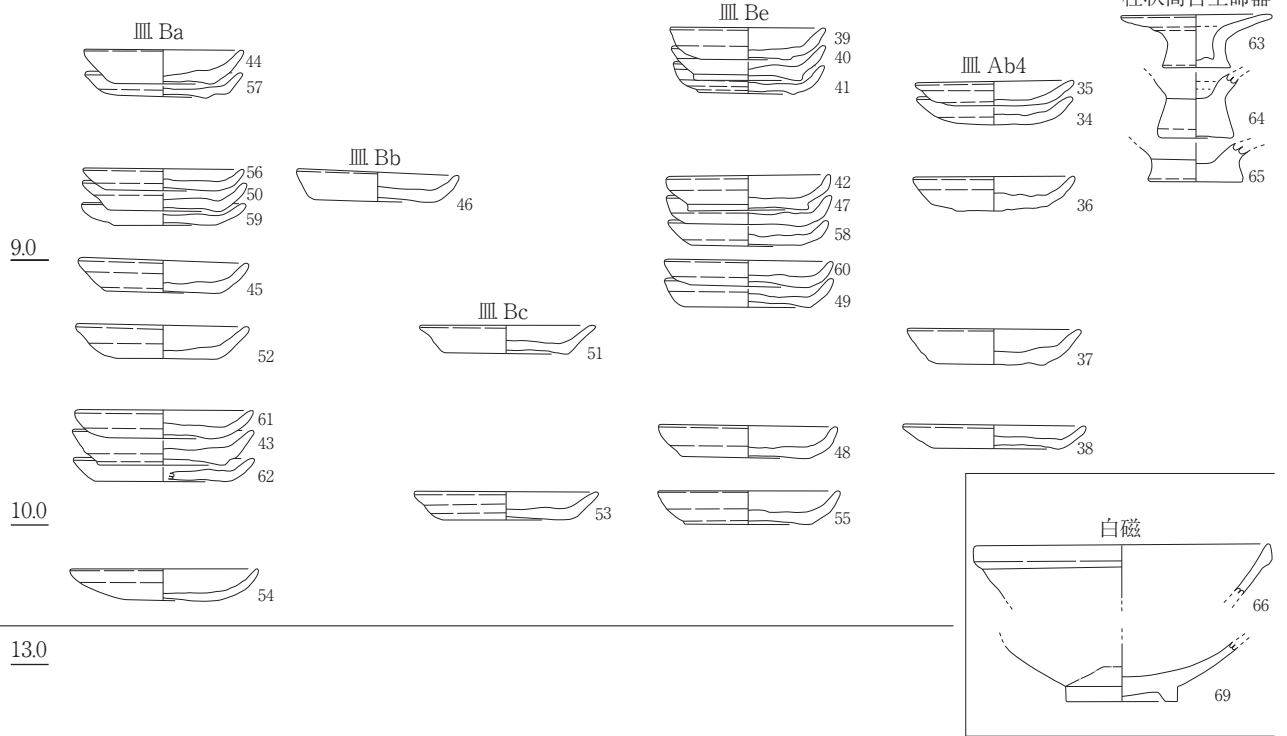


图 25 八町 1 号遺跡 2 次調査区 SK1 出土遺物

口径
7.0(cm)

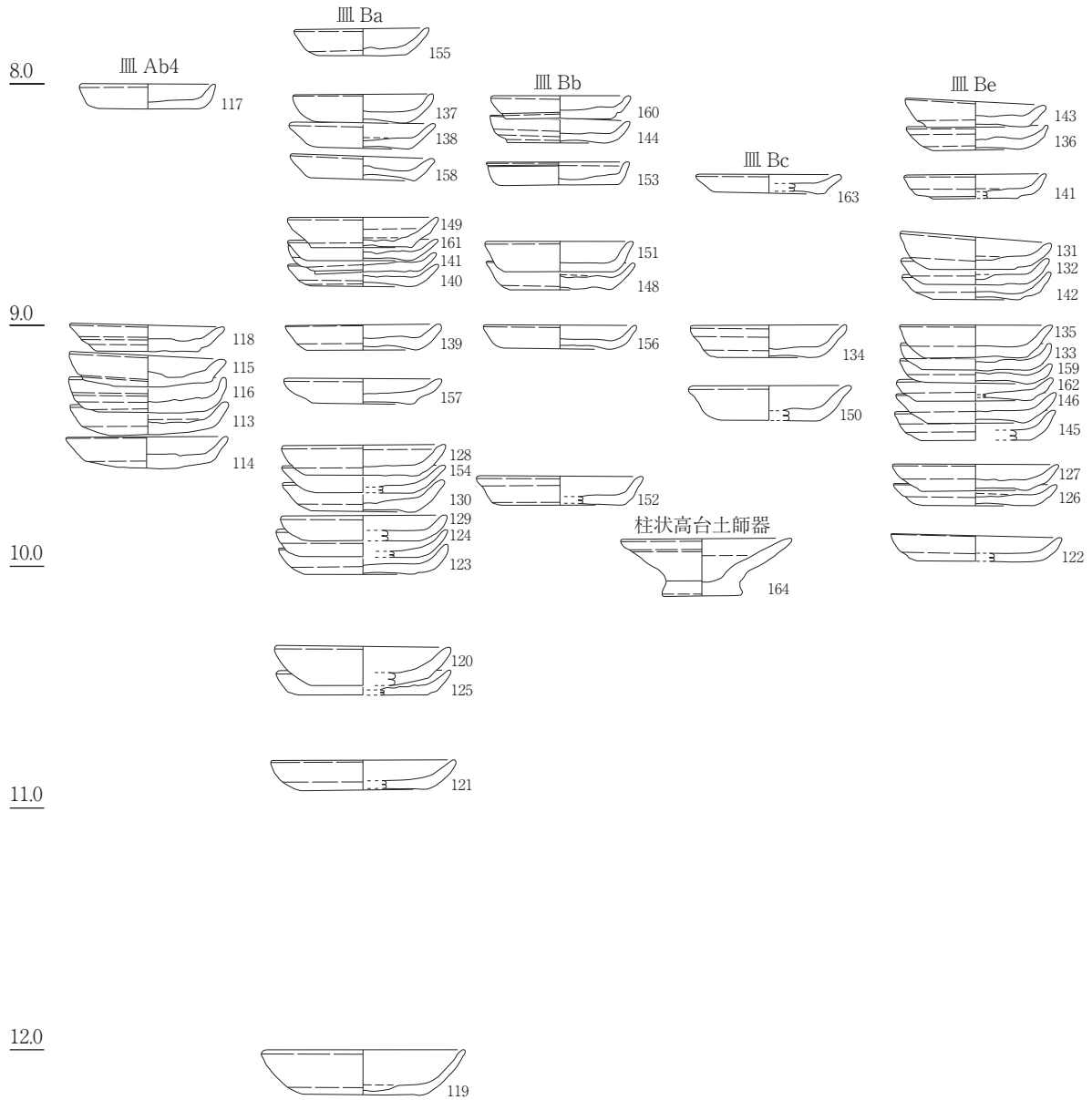
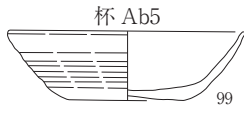


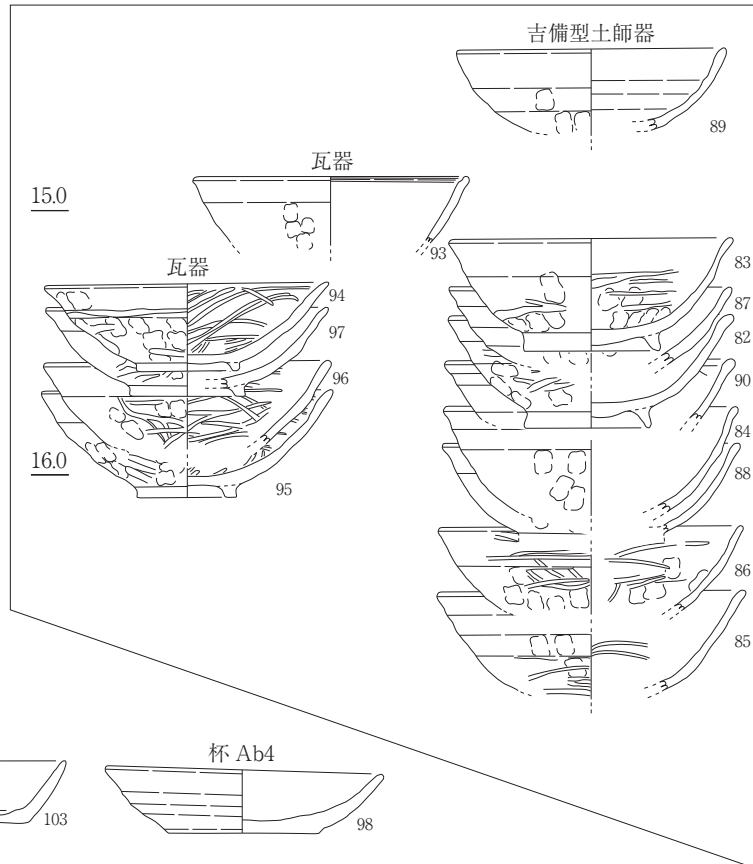
図 26 八町 1 号遺跡 2 次調査区 SK2 出土遺物その 1

八町 1 号遺跡 2 次調査区 SK2

12.0(cm)

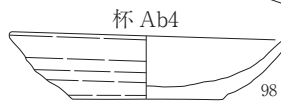
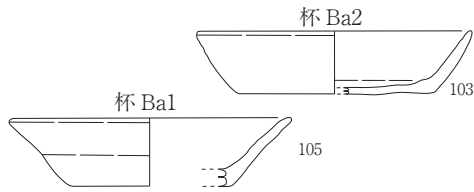


13.0

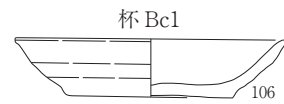
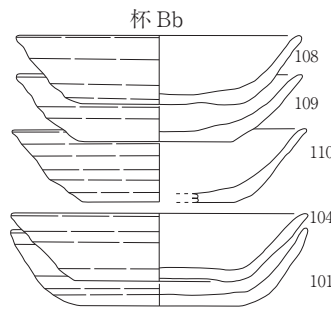
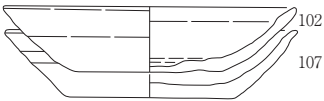


14.0

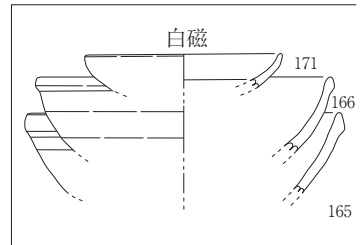
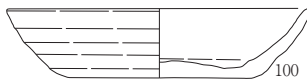
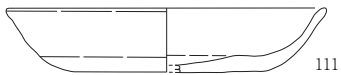
15.0



16.0



17.0



0 (1/4) 10cm

図 27 八町 1 号遺跡 2 次調査区 SK2 出土遺物その 2

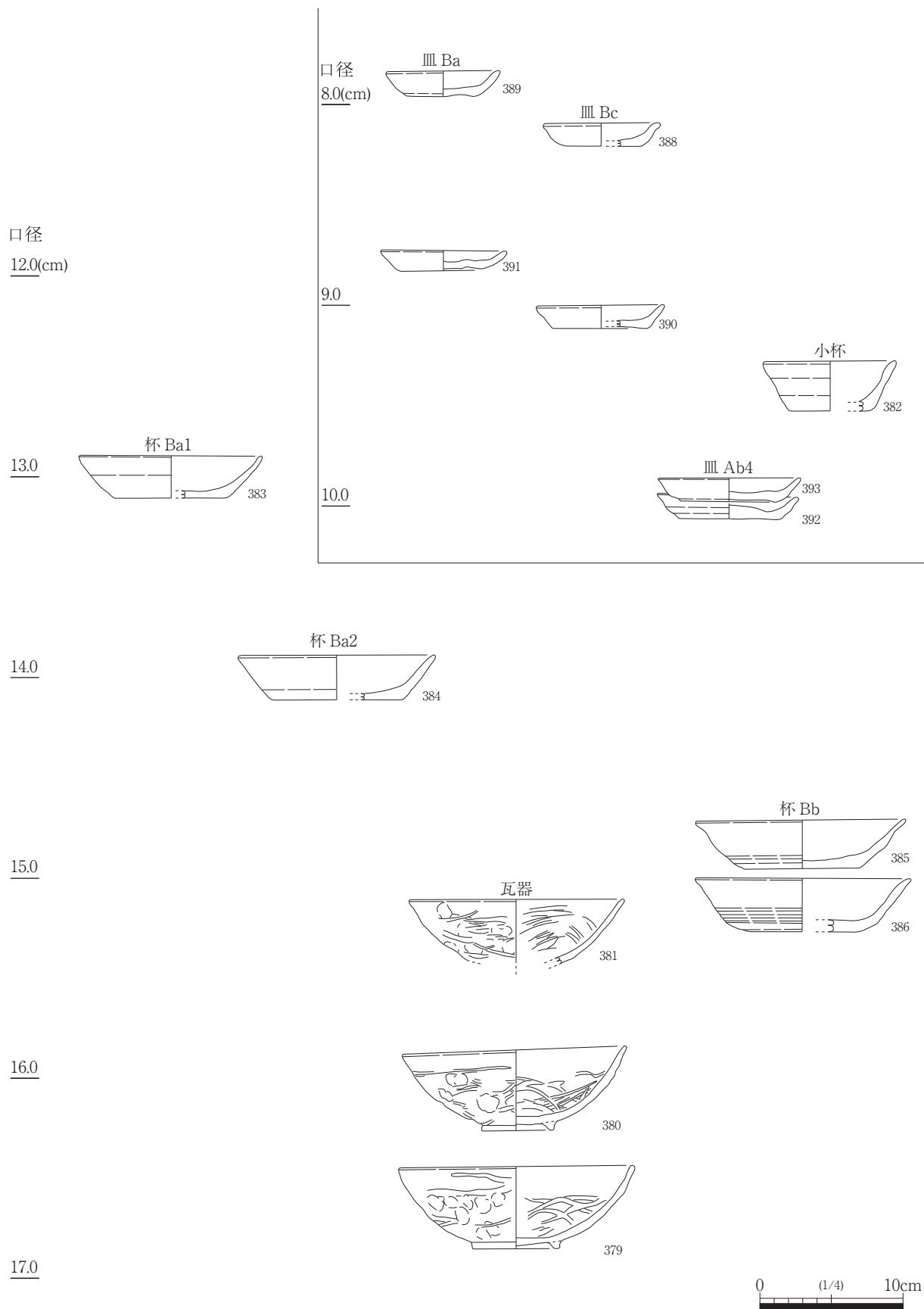
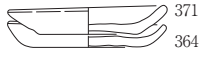
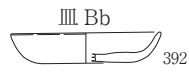


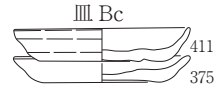
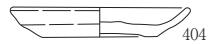
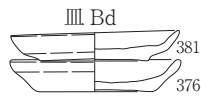
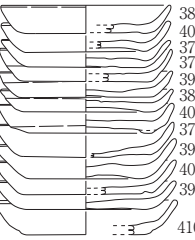
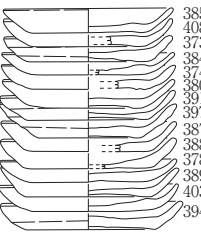
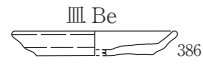
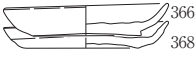
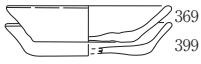
图 28 八町 1 号遺跡 2 次調査区 SP11 出土遺物

口径

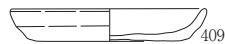
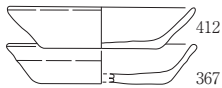
8.0(cm)



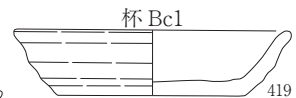
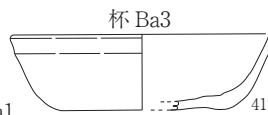
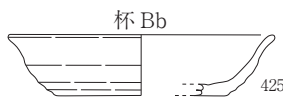
9.0



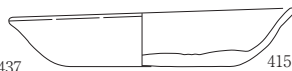
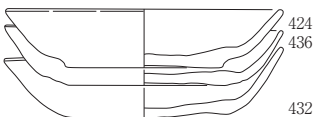
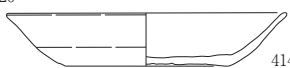
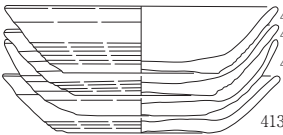
10.0



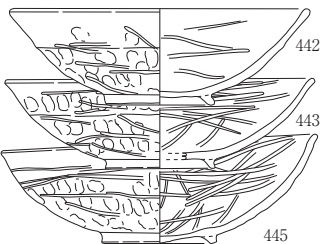
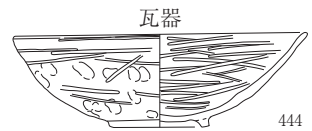
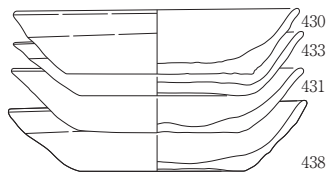
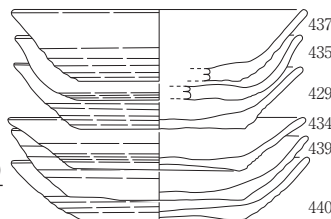
14.0



15.0



16.0



17.0

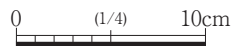


图 29 八町遺跡 7 調査区 4 号井戸出土遺物

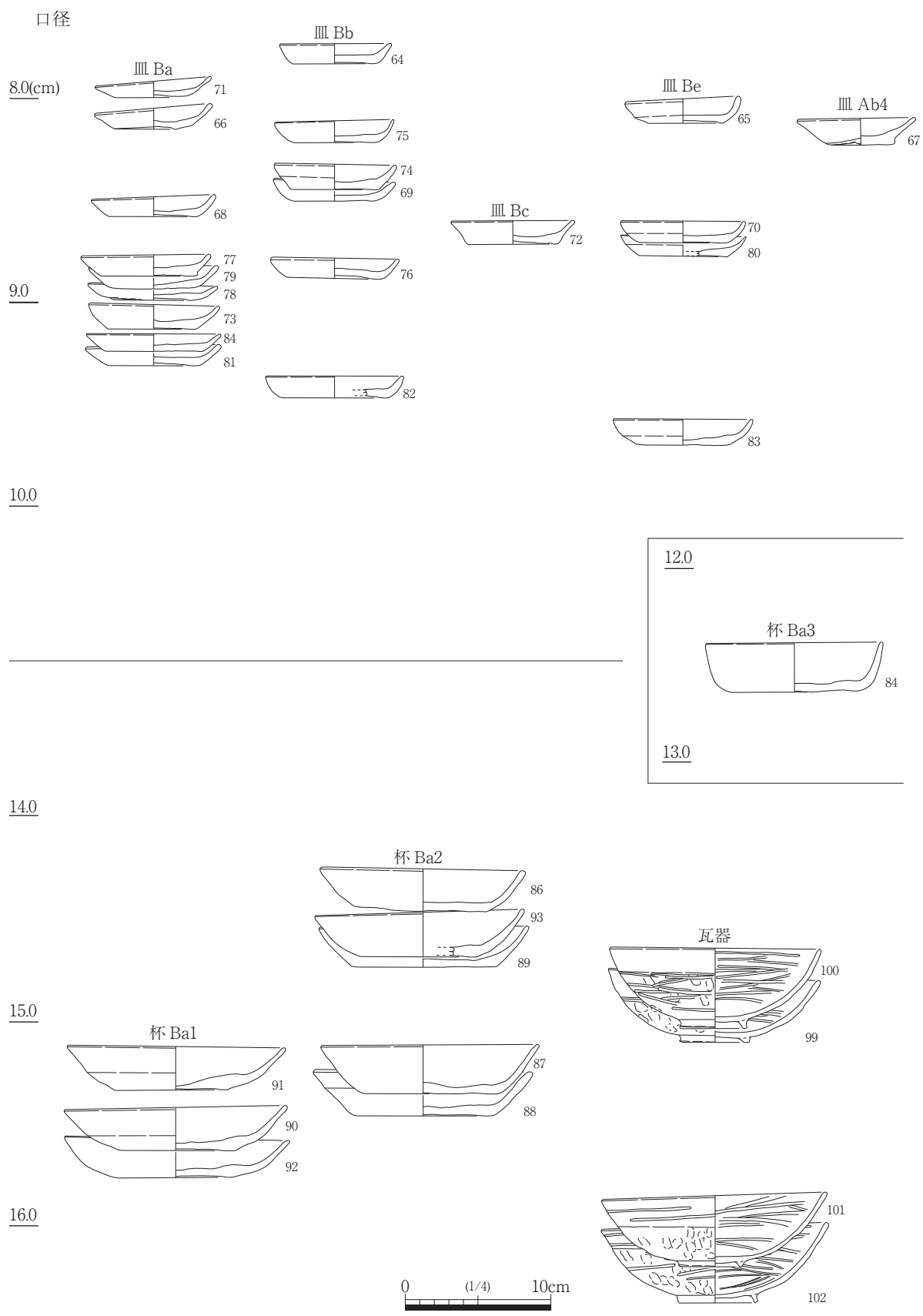
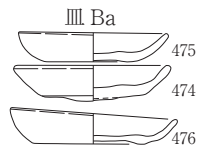


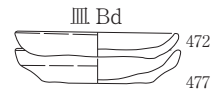
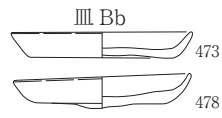
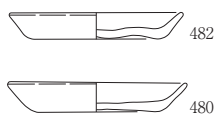
图 30 八町遺跡 5 調査区 5 号土坑出土遺物

口径

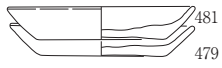
8.0(cm)



9.0

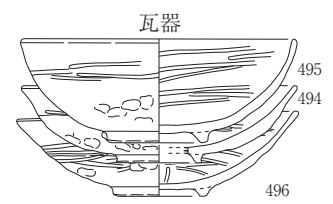
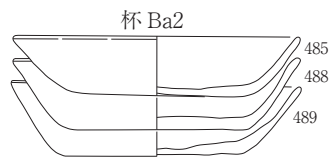
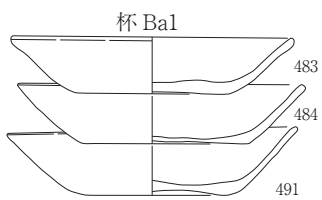


10.0



14.0

15.0



496

16.0

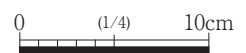
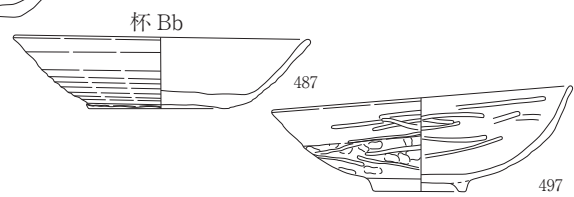
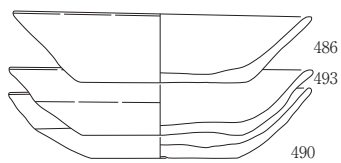
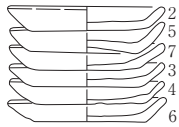


图 31 八町遺跡 7 調査区 13 号土坑出土遺物

口径
7.0(cm)



8.0

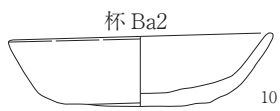


9.0

12.0

13.0

14.0



15.0

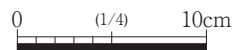
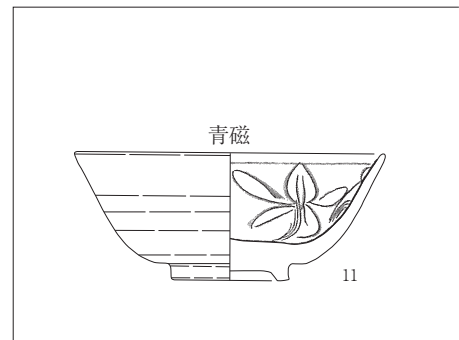


図 32 小泉アツコ遺跡第 1 次調査 SQ01(SK06) 出土遺物

口径
7.0(cm)

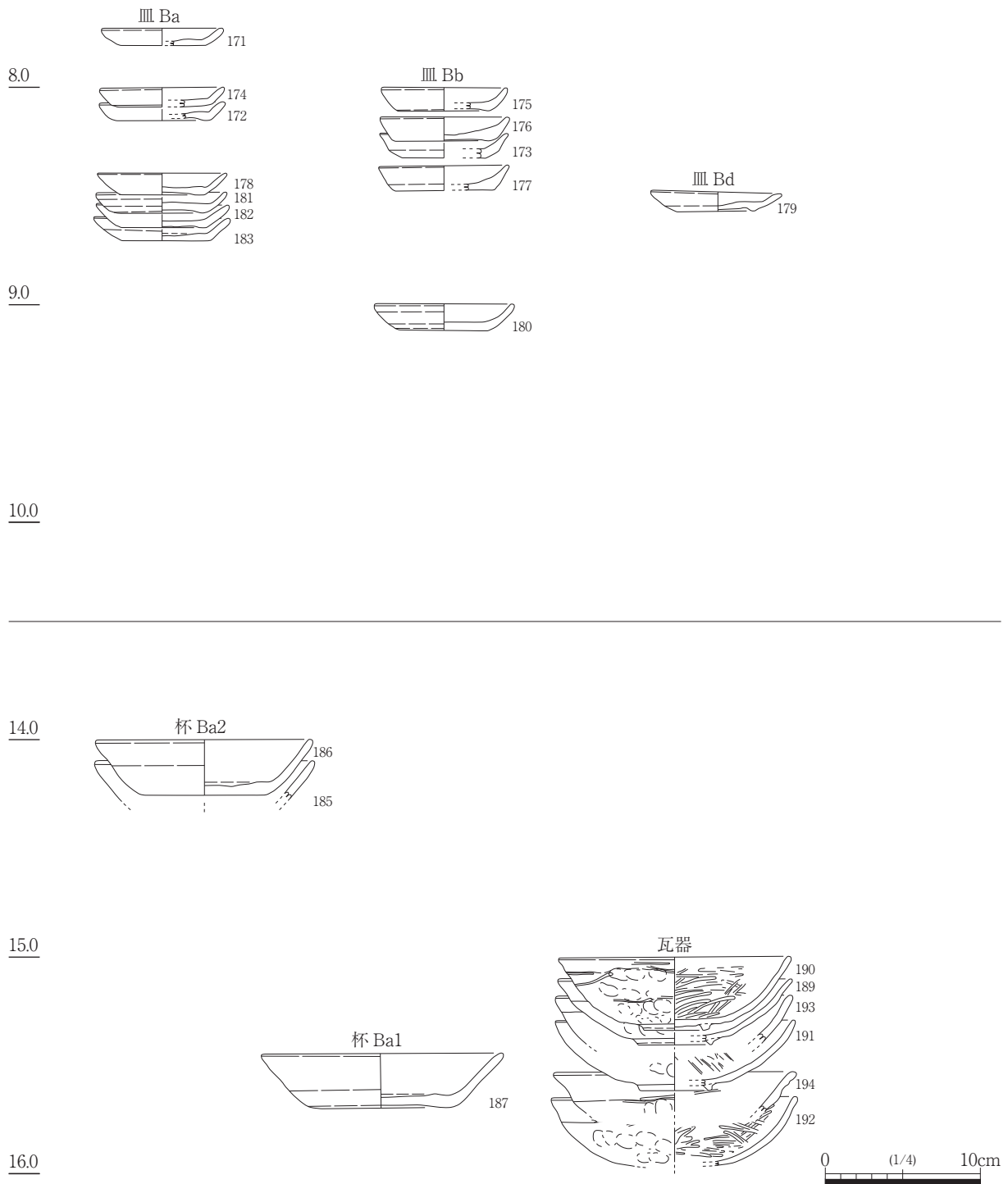


図 33 小泉アツコ遺跡第 2 次調査 SP105 出土遺物

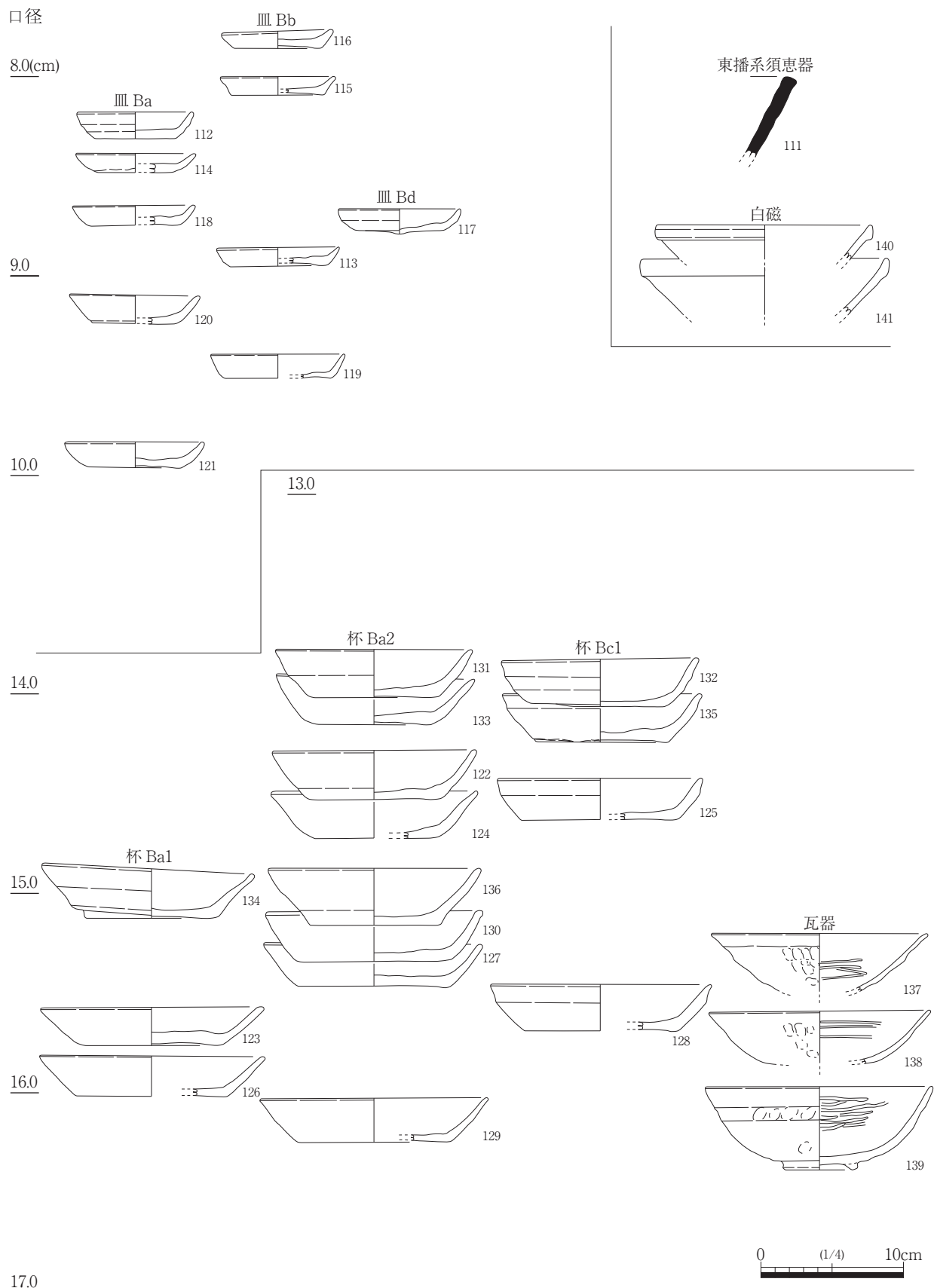
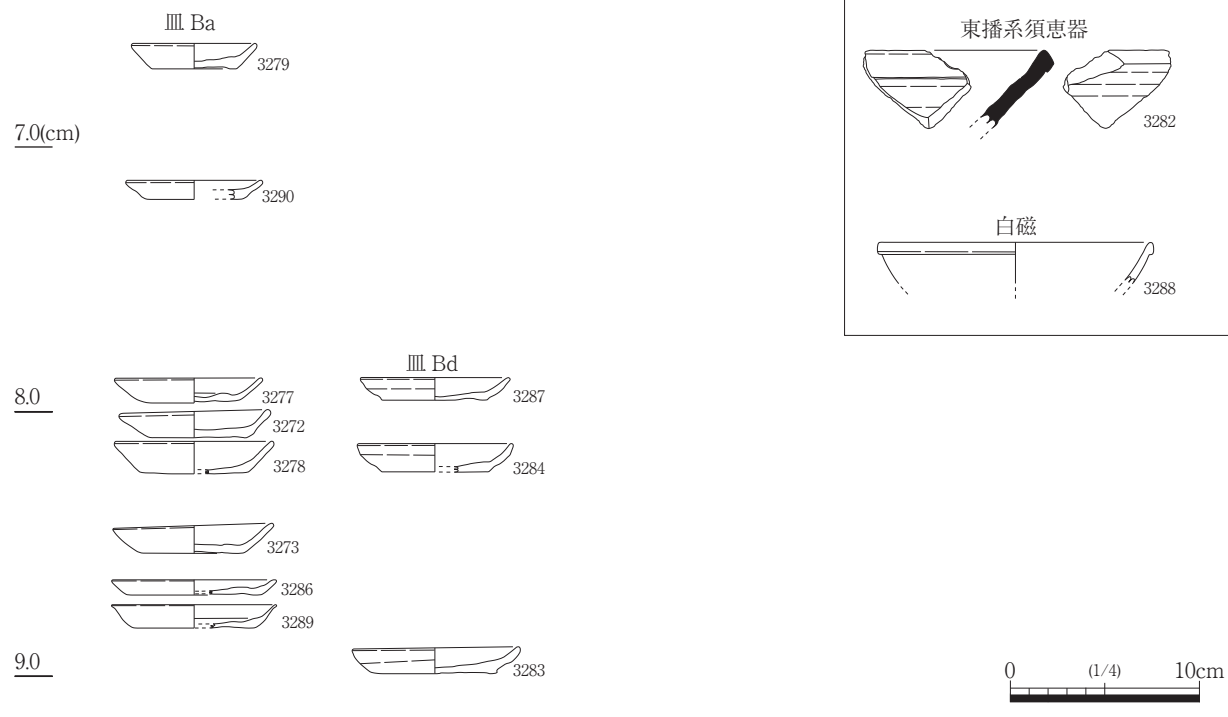
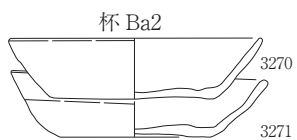


図 34 八町 1 号遺跡 3 次調査 SX01 出土遺物

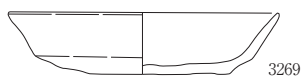
口径



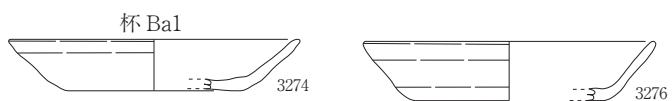
13.0



14.0



15.0



16.0

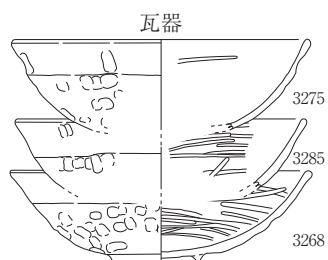


図 35 新谷森ノ前遺跡 2 次 SX01 出土遺物

口径
7.0(cm)

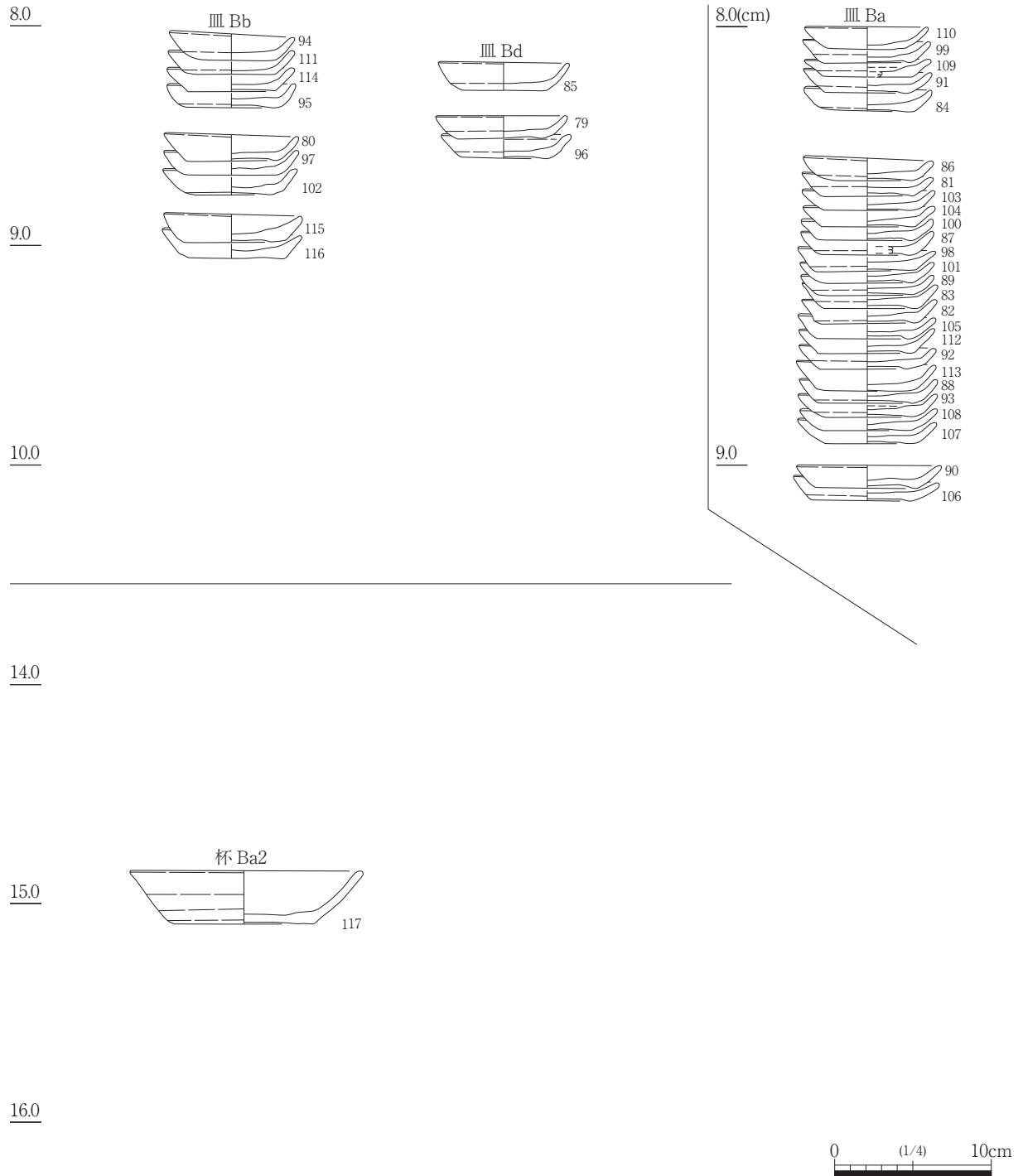
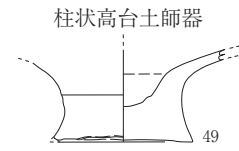
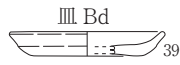


図 36 小泉アツコ遺跡第 2 次調査土器埋納遺構 SP72(SX01) 出土遺物

口径
8.0(cm)

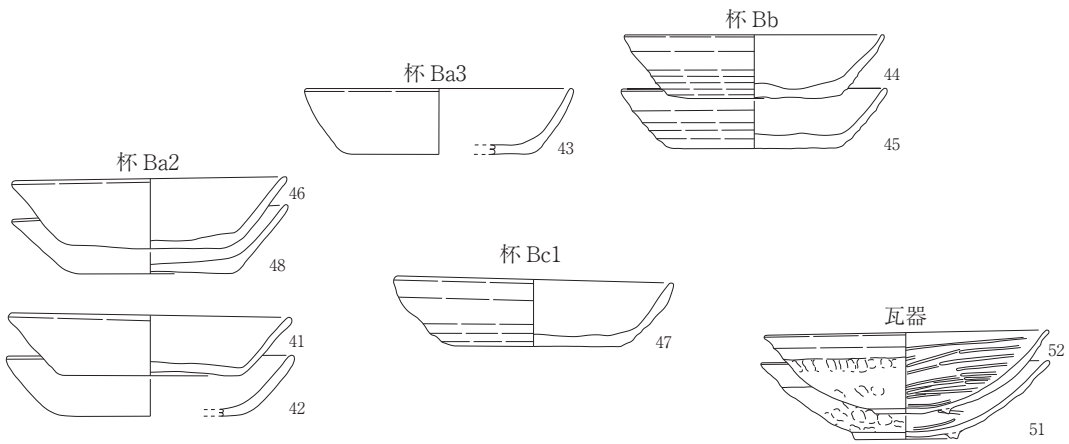


9.0

10.0

13.0

14.0



15.0

16.0

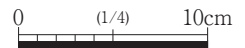
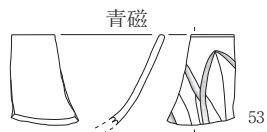


图 37 馬越遺跡 12 区 SK11 出土遺物

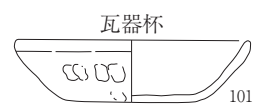
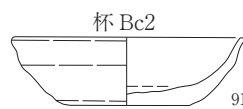
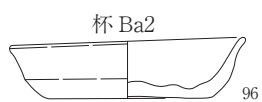
口径

8.0(cm)

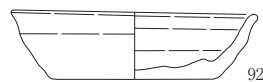
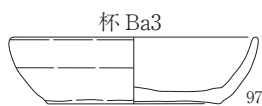
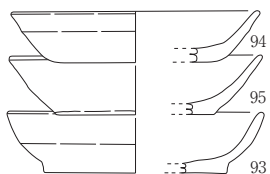


9.0

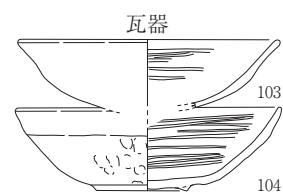
12.0



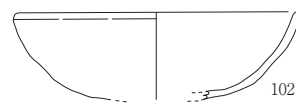
13.0



14.0



15.0



16.0

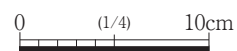
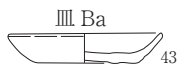


図 38 八町 1 号遺跡 3 次調査 SK15 出土遺物

口径

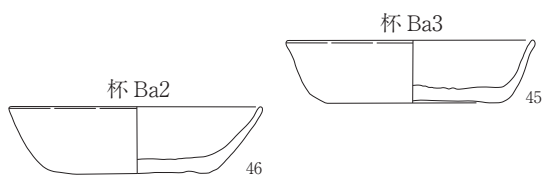
8.0(cm)



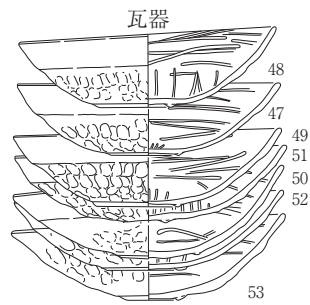
9.0

10.0

13.0



14.0



15.0

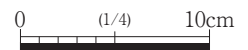


图 39 八町遺跡 5 調査区 1 号墳墓出土遺物

北竹ノ下 I 遺跡出土の龍泉窯青磁筆架

柴田圭子

1 北竹ノ下 I 遺跡の概要(図1)

北竹ノ下 I 遺跡(愛媛県西条市石延・安用)の発掘調査は、道前平野農地整備事業に伴い平成30年度から開始した。遺跡は、西側にそびえる高縄山東三方ヶ森の山麓部に形成された扇状地の緩やかな斜面に立地し、縄文時代から近世にかけての遺構、遺物が検出されている。龍泉窯青磁筆架(以下、龍泉窯青磁を省略)は、令和元年度の発掘調査で出土した(池尻2020)。

遺跡周辺に所在する観念寺は、鎌倉時代創建で、入元僧鉄牛継印により再興され、南北朝期には東福寺諸山および將軍家御願寺に列せられている(川岡1994)。象ヶ森城跡などの城跡も分布しており、出土した筆架と直ちに結びつく訳ではないが、このような周辺環境は筆架所有の文化的背景としてとらえられる¹⁾。

2 筆架出土遺構と出土状況(図2)

筆架が出土した8区では、中近世の遺構が検出され、主要な遺構は溝SD15・16である。SD16は8区中央を南西から北東に直線的に延び、SD15はその東側に並行する。SD15の規模は、検出長約15m、幅約2m、深度0.3mを測り、南側は直進、北側はほぼ直角に曲がり、調査区外へと延びる。このような形状から方形区画を形成する溝と推定される。

筆架はSD15が形成する区画の南西に位置するSE02から出土した。SE02は、掘方の直径約3.5m、深度約1.3mを測る円形の井戸である。本来は石組みであったが壊されており、底面から約0.8mのみ石組みが残存し、上部には礫が平面的に広がっていた。石組み内からは、土師質土器鍋・釜、備前焼播鉢・甕、瀬戸美濃天目茶碗などが出土し、多くの遺物は井戸の廃絶時に廃棄されたものと考えられる。これらの時期は15世紀後半から16世紀である。

筆架は上部の礫の中から出土し、井戸が壊され廃絶した最終段階に筆架も廃棄されたと判断される。付近から16世紀後半に位置付けられる漳州窯青花磁碗が出土しており、石組み内から出土した遺物とともに、SE02廃絶年代を示している可能性が高い。ただし礫上層の堆積層からは、17世紀前半の肥前陶器皿が1点出土しており、SE02の最終埋没時期は近世初頭に下る。そのため筆架廃棄の年代は16世紀後半から17世紀前半の時期幅でとらえられる。

3 筆架について(図3・5)

筆架は、一部欠損するが大半は残存し、高さ6.7cm、幅10.3cmを測る。形態は三山を象り、左右に欠損する部分がある²⁾。両端は前方に張り出し、背面は丸みを持ち、底部は中央が若干持ち上がる。成形は型作りで、前面と背面を型取って合わせ、底部を貼り付けている。底部外面には布状の圧痕が看取できる。背面には1箇所穿孔がある。胎土は白色に近い灰白色で、釉薬は灰

色味を帯びる緑青色である。底部周囲の接地部付近のみ露胎とし、外面は全面施釉する。露胎部は赤褐色を呈し、摩滅する。背面の右欠損部から内面が観察でき(図5下右)、型取りした際の指頭圧痕がみられるほか、内面の施釉範囲が全面に及ばず、欠損部付近は露胎であり、中央から左側

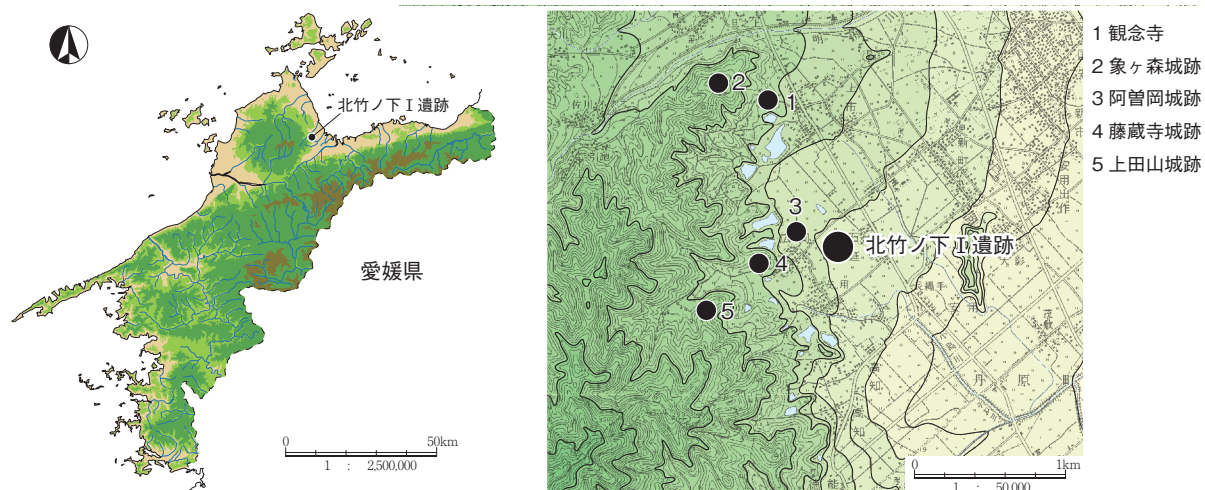


図1 北竹ノ下遺跡の位置と環境

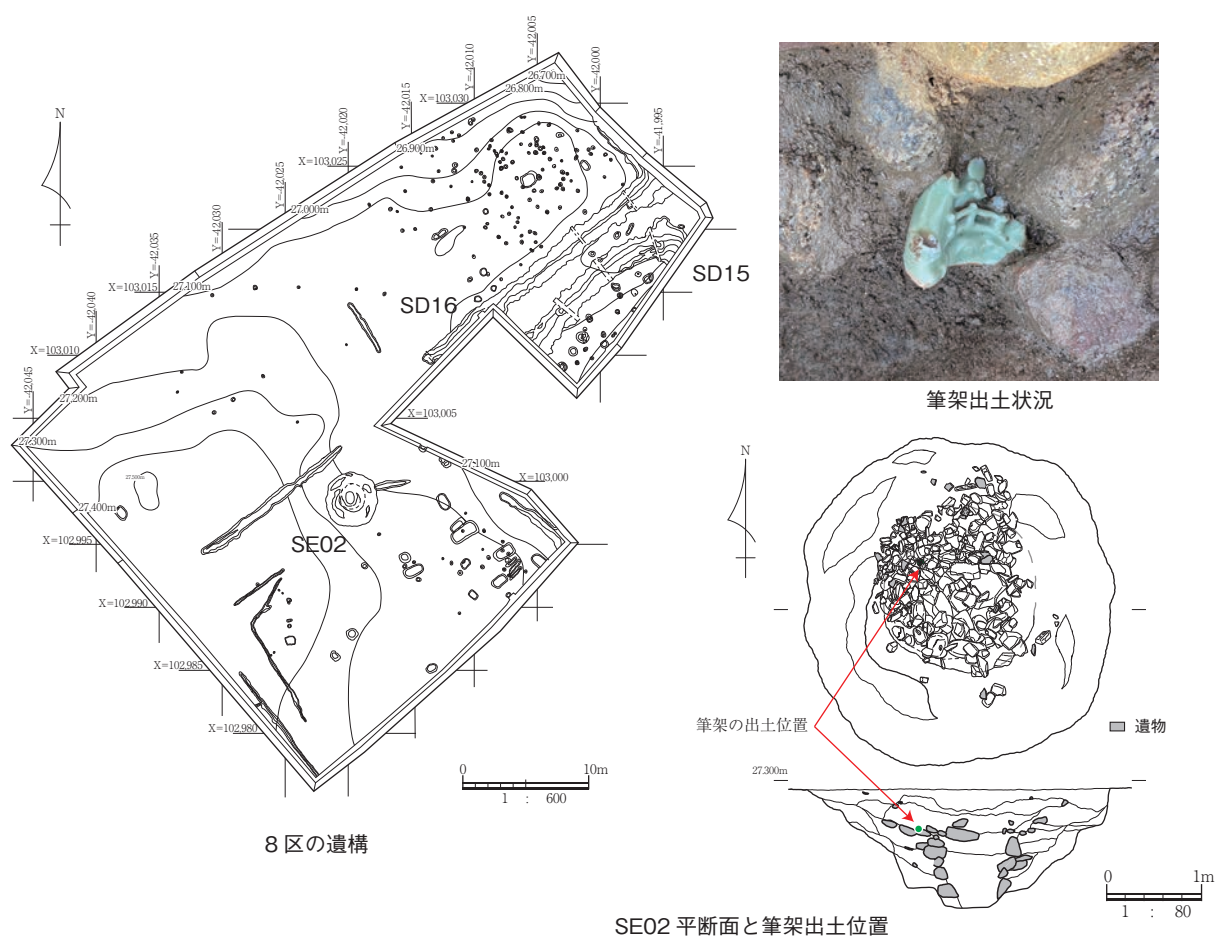


図2 8区の遺構と筆架出土状況

には釉薬が掛かっていることが確認できる。露胎部分は表面が赤褐色に発色する。

形状は、中央が高く左右がやや低い山形で、山頂には太陽³と雲を配置し、前面中位に欄干、下部には波濤文を表現する。背面には陽刻の二重線で山形を表す。前面の波濤文と背面の山形文は型によるが、太陽、雲、欄干は別作りとし釉薬で接着する。太陽は円形で、径1.7cm、厚さ0.6cmを測り、周辺は薄く作られ、下に2箇所亀裂が生じている。上部は一部欠損する。雲は紐状の胎土を巻いて作り、幅2.1cm、高さ1.2cm、厚さは0.5cmである。左の山は、中央より低く頂部まで残存し、頂部前面に渦状の雲を貼り付ける。欄干は紐状の胎土を組み合わせ、横方向に平行する2条の欄干を、やや太い3本の柱が支えている。上部の欄干の両端は渦状に巻く。波濤文は中央より左に大きな波があり、右側に向かって小さな波が重なるように表現される。

欠損部は大きくは3箇所、左側欠損部の上面は円形に孔があいており(図5下左)、内部の空間とつながっている。三山の部分にはこのような空間はなく、内部まで胎土を充填しているため、後述する類例のように、この部分には本来別のものを接着し、水滴としても使用できる形態であったと推定できる。右側の山の上部は欠損し、断面中央に貼り合わせの痕跡が認められる(図5下中央)。右側の背面には楕円形の欠損があり、破断面に横方向の不自然な傷が多数看取できることから(図5下右)、人為的に打ち欠いたものと推定される。また、背面には細かい敲打痕が点々と認められ、欠損部も含めて本資料が人為的に破損されたことを示している。ただし、軽い敲打や一部を切り取るような欠損であり、全体を完全に破壊しようとした状況は認められない。

4 類例と時期(図4)

日本における筆架の確実な出土例は、白山平泉寺旧境内の三彩筆架⁴が挙げられるのみであり、龍泉窯青磁筆架の出土例はない。生産地である中国では龍泉大窯楓洞岩窯址で出土しており(図4-2・浙江省文物考古研究所ほか2015)、大窯において生産されていたことが確認でき、また浙江省博物館旧藏品に窯跡で採集された資料がある(浙江省博物館編2009)。消費地では太倉樊村涇遺址において出土している(図4-1・蘇州考古研究所ほか2018)。これらはいずれも三山を象っており、片面に山形の線文がある点が共通している。これらの筆架と比較しても、北竹ノ下I遺跡出土筆架は意匠が細やかで作りも丁寧であり、上質の製品と言える。太陽や欄干、波濤などの共通点がある例は広東省博物館藏品(図4-3・中国文房四寶全集編集委員会編2008)の青磁や、杭州市出土事例(図4-4・北京芸術博物館ほか編2009)と上海博物館藏品の青花磁(図4-5・上海博物館ほか2019)において確認でき、筆架の意匠として一般的であったことが確認できる。また、北竹ノ下I遺跡出土筆架の左側欠損部については、類例との比較により鰲(伝説上の大亀⁵)や桃形の水滴などが接着されていたものと推定される。

北竹ノ下I遺跡出土筆架の生産時期に関しては、類例に限られるため断定的に述べることはできないが、最も意匠が類似しているのは明代中期の青花磁筆架であり⁶、龍泉大窯楓洞岩窯址における筆架生産の時期、筆架の釉薬の色調や底面にも釉薬が掛けられている点などから、15世紀代と考えるのが最も妥当であろう。ただし、元代とされる太倉樊村涇遺跡出土例も形態は類似していることから、元代に遡る可能性も皆無ではない。

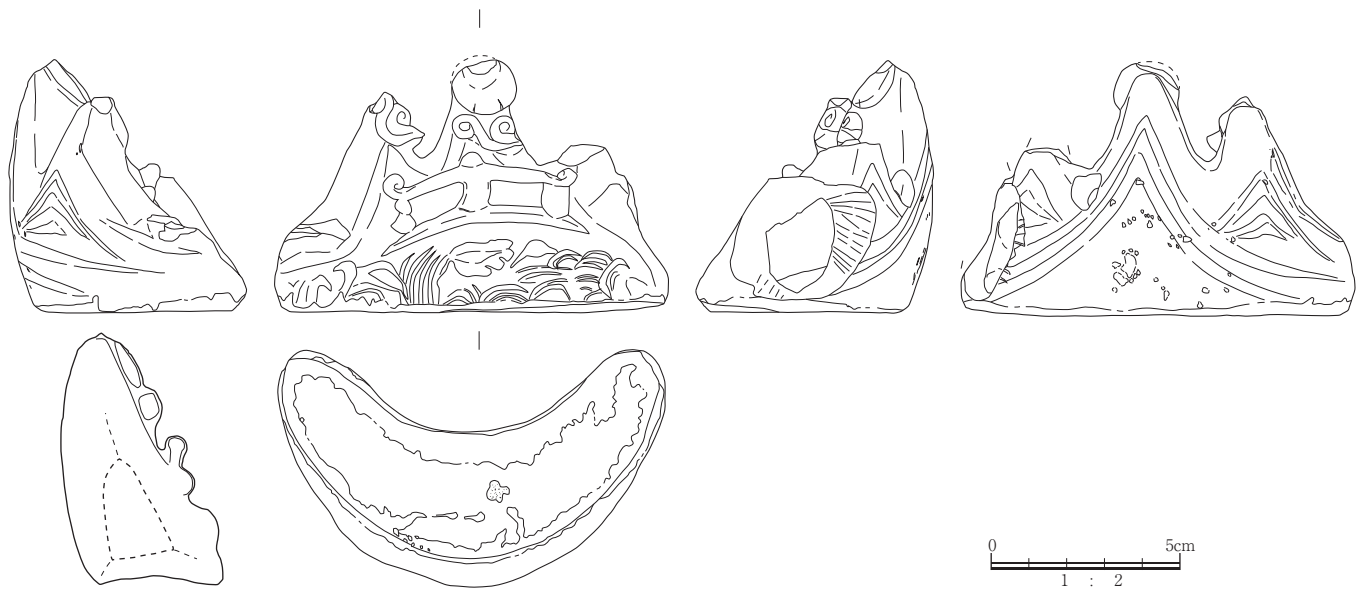



图3 筆架実測図

	元中後期	明中期	明後晚期
龍泉窯	 <p>1 太倉樊村涇遺址出土</p>	 <p>2 大窰楓洞岩窰址出土</p>	 <p>3 廣東省博物館藏</p>
景德鎮窯	 <p>4 杭州出土・杭州歷史博物館藏</p>	 <p>5 上海博物館藏</p>	 <p>6 上海博物館藏</p>

写真引用：1 蘇州市考古研究所・太倉博物館編 2018『大元・倉 太倉樊村涇元代遺址出土瓷器精選』上海古籍出版社,104頁、2 浙江省文物考古研究所・北京大學考古文博學院・龍泉青瓷博物館編 2015『龍泉大窰楓洞岩窰址 上』文物出版社, No.1171~1174、3 中國文房四寶全集編集委員會編 2008『中國文房四寶全集 第4卷文房清供』北京出版社, No.85(廣東省博物館藏)、4 北京藝術博物館・北京市元青花文化交流中心・首都博物館編 2009『元青花』河北教育出版社,146頁(杭州歷史博物館藏)、5 上海博物館・景德鎮陶瓷考古研究所 2019『灼鍊重現』上海書畫出版社, No.245(上海博物館藏)、6 中國文房四寶全集編集委員會編 2008『中國文房四寶全集 第4卷文房清供』北京出版社, No.87(上海博物館藏)

图4 筆架類例



正面



背面



左側面



右側面



底面

S=1:2



左側の欠損部



右側の山の欠損部



右背面の欠損部

図5 筆架写真

青磁筆架の発見以降、類例調査の際には、阿部来、田中克子、續伸一郎、堀内秀樹、森達也、八重樫忠郎、山口博之(敬称略、以下同様)ほか多数の研究者からご協力とご教示をいただいた。また筆架のX線撮影においては村上恭通、安藤公雄にご協力をいただいた。遺跡の概要及び図面については、調査担当者である池尻伸吾と沖野実、筆架写真撮影について眞鍋昭文の協力を得た。末尾となりましたが記して感謝いたします。

注

- *1 中世日本における文房具は硯箱に入れての使用が主流であるが、一方でそれとは異なる中国製の大型文房具が寺院跡を中心に出土することが指摘されている。また、中国から日本へと向かった寺社造営料唐船である新安沈船にも大型の文房具は積載されており、中国の文化を直接受け入れる拠点となった禅宗寺院を中心に大型文房具が所有されたと考えられている(垣内2006)。そのほか、室町時代に成立した『君台観左右帳記』には書院飾りとして筆架を含む大型文房具が描かれており、武家の座敷飾りとしても使用されていたことが知られる(降矢2018)。出土した青磁筆架は大型文房具であり、それを所有・使用できるのは希少な輸入文房具を入手できた寺院、あるいは書院を有する建物に居住し將軍家の文化規範に精通した武家であり、青磁筆架の出土は北竹ノ下I遺跡周辺にそのような人物が存在していたことを示唆している。
- *2 本稿で製品の左右を指す場合、筆架の正面に向かっての左右とする。
- *3 同様の意匠のものでも、図4-4は太陽ではなく月と説明されている。
- *4 白山平泉寺旧境内出土三彩筆架は未報告であるため、勝山市教育委員会阿部来氏よりご教示を得た。
- *5 科挙のトップ合格者「状元」のみが宮殿の階段に彫刻された鰲の前を独占できるため、鰲は吉祥の象徴として文房具としてふさわしい意匠とされる(大阪市立東洋陶磁美術館編2019,p.187)。
- *6 明代においては、景德鎮窯と龍泉窯において共通の意匠の製品が作られている。官器において顕著な特徴であるが、民用においてもその傾向がある。

参考文献

- 池尻伸吾 2020「北竹ノ下I遺跡」『愛比売』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター,pp.7-9
- 大阪市立東洋陶磁美術館編 2019『文房四宝—静閑なる時を求めて』
- 垣内光次郎 2006「文房具」『季刊考古学』第97号 雄山閣,pp.57-60
- 川岡勉 1994「南北朝期の在地領主・氏寺と地域社会—新居氏と観念寺の場合—」『ヒストリア』142大阪歴史学会,pp.1-25
- 浙江省博物館編 2009『窯火遺韻』浙江古籍出版社
- 浙江省文物考古研究所・北京大学考古文博学院・龍泉青瓷博物館編 2015『龍泉大窯楓洞岩窯址』文物出版社
- 上海博物館・景德鎮陶瓷考古研究所 2019『灼鍊重現』上海書画出版社
- 蘇州考古研究所・太倉博物館編 2018『大元・倉 太倉樊村涇元代遺址出土瓷器精選』上海古籍出版社
- 中国文房四寶全集編集委員会編 2008『中国文房四寶全集 第4巻 文房清供』北京出版社
- 降矢哲男 2018「座敷飾りにみえる陶磁器の使用状況とその在り方について」『家具道具室内史』第10号家具道具室内史学会,pp.66-81
- 北京芸術博物館・北京元青花文化交流中心・首都博物館編 2009『元青花』河北教育出版社

(2021年3月10日)

調査員の研究動向

令和2年度における調査員の研究成果を以下にまとめた。①は研究会や講座での発表、②は考古学関係書への執筆(論文・研究ノート・報告など)である。

(柴田圭子)

令和2年度 調査員の研究動向

氏名	職名	項目	内容
乗松真也	担当係長	②	「弥生時代中期の備讃瀬戸沿岸におけるサヌカイト製石器生産」 『古文化談叢』第85集 九州古文化研究会
			「弥生時代中期における金山産サヌカイト製石器の流通」 『さぬき野に 種をまく』『片桐さん』退職記念論集刊行会
			「白鳥廃寺跡の伽藍配置と変遷 —1～3次調査の再検討—」 『香川県埋蔵文化財センター年報 令和元年度』香川県埋蔵文化財センター
松村さを里	担当係長	②	「今治市新谷古新谷遺跡 1～7号墳の調査」 『中四研だより』第47号 中国四国前方後円墳研究会
			「新谷古新谷遺跡の発掘調査成果」『今治史談』No.26 今治史談会
石貫弘泰	主任調査員	②	「集落遺跡出土の破碎鏡(I) —愛媛県内出土の弥生時代破碎鏡を中心に—」 『愛媛考古学』第24号 愛媛考古学協会
首藤久士	主任調査員	①	「発掘された伊予の中世城館(2) ～ムラのなかの方形区画溝～」 ソーシャル・リサーチ 12月例会
		②	「中国・四国地方の動向」『東洋陶磁学会 会報』第94号
沖野 実	主任調査員	②	「大洲市折尾遺跡について」『愛媛考古学』第24号 愛媛考古学協会
山口莉歩	調査員	①	「楯築遺跡を中心とした特殊器台成立期の製作体制」 テーマ研究『古代出雲と吉備の交流』第2回検討会
			「特殊器台成立期における製作体制」考古学研究会岡山12月例会

愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要
紀要愛媛

第 17 号

2021年5月

編集・発行 公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター
〒791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68-1
TEL 089-911-0502
印刷 岡田印刷株式会社

